

艦娘戦記 ～Si vis
pacem, para bellum～

西部戦線

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1930年代前半から続く深海棲艦との生存戦争。通称深海大戦が勃発して既に10年は経とうとしていた。

世界は協力し、この問題に対処していたが小型だが艦船と変わらぬ戦闘力を持ち、泊地から無尽蔵に湧き出る深海棲艦相手では分が悪く、勢力圏を縮小させていった。そんな中、極東の帝国で生まれた新兵器、艦娘が各地で活躍。様々な苦難があつたが、現在では各国の支援もあり、人類優勢となる。

しかし、問題が無い訳では無かった。

広がる戦線、滞る補給。そして艦娘技術独占による各国との摩擦。世界は未だに平穩

が訪れないまま、様々な問題を爆発させようとしていた。

そんな中、世界に变革をもたらす存在がこの世に生まれる。

最高の指揮官。愛国者。戦闘狂。様々な呼び名を持つ艦娘がいた。しかし、皆は彼女を一言で表すならこう答えた。

バケモノと

幼女戦記や皇国の守護者を読んで思わず書いてしまった作品です

独自のな世界観がある為、苦手な方はbackをお願いいたします。

P s : あらすじの表記内容変えました。

目次

その少女は……	1
第一話「新兵時代」	45
第二話「戦争と着任と……」	69
第三話「急展開」	106
第四話「狂気の祭典」	142
第五話「ガダルカナル降下作戦」	200
第六話「マライタ島の死闘・上」	236
第七話「マライタ島の死闘・下」	277

その少女は……

青い空を白い雲が泳いでいく。

時期は春頃だろうか、暖かな日差しが辺りを照らし、陽気な空気を生み出している。普段なら余りの気持ちよさに眠気を誘うであろう。

そう、『普段』なら。

「こちらマライタ島第3駐留大隊。現在、深海棲艦からの奇襲を受け、部隊は大きな損害を被っている！ 至急応援を求む！ 繰り返す至急応援を！」

「おい！ 周辺の警戒に出ていた艦娘や水歩部隊は何をしている！」

「とつくに海の底か、連中の腹の中だろうよ。糞が！」

沿岸部から上がる黒煙と火の手がまるで島全体を隠すが如く、地獄を生み出していた。

ほんの数時間前までは小規模な基地を除き、リゾート地の様な平穏さを見せていたのが嘘のように此処は激戦区と化している。

生き残ったトーチカや沿岸砲、陸上部隊がこの島にいる残りわずかな艦娘達と共に必死の抵抗を見せるが、焼け石に水で逆に撃った傍から十倍に上る反撃を受ける事となり、正に絶望的と言えるだろう。

「くそ！ こんな所で死んでたまるか、俺は生きて帰って——があア！」

「倉田あ！ くそ、くそ、くそ！ 死にやがれ、化け物どもめえ！」

塹壕から上半身を出して小銃を撃っていた兵士が深海棲艦からの機銃掃射を受け、外へ出ていた体の部分全体が穴だらけとなり、血霧を辺りにまき散らしながら後ろへと吹き飛んだ。その様子は最早人であると判別するのが体を外へ出してなかつた下半身部分のみで、宛ら穴だらけにされた紙人形を連想させた。

そんな同僚の死を見てか、激昂した兵士が1人、急ぎ取りついた野砲を目標の深海棲艦——駆逐イ級——へ狙いを定め、発射。

爆発と破片を周囲にまき散らす。

命中した周辺に硝煙が立ち込め、視界を阻害させた。

しばらくして硝煙が晴れると急いで戦果確認を行う。その結果、攻撃した駆逐イ級を見事に撃破。周りも歓声を上げる。

「どうだ！　ざまあ見ろ！」

同僚の仇を取った事に舞い上がり思わず拳を振り上げる彼であったが。

——ヒュ

一瞬間笛のような軽い音を聞いたと思った瞬間塹壕ごと吹き飛んだ。

何の事は無い。

砲弾が降って来ただけの事だ。尤も、降って来た砲弾は今までよりも大きなものであったが。

塹壕の一区画が吹き飛んだのを確認した他の兵士は破壊力の大きさに僅かばかり呆然としてしまったが、直ぐに意識を現実へと引き戻すと双眼鏡を使い撃つて来たであろう敵を探す。

時間にして約10秒掛かったかどうかの速さで攻撃主である敵艦を視認。兵士を絶望へと叩き落とした。

「馬鹿な……戦艦種だと、しかも複数。こんな小規模基地に何で戦艦をこんなに投入してくるんだ！」

彼が見たもの。

それは、黒髪をたなびかせ、病的までに青白い肌をした女性であった。しかし、普通の女性とは決定的に違う点が見受けられる。それは、両手に持つ大きな鉄の塊と海面に立っている事だ。

正に異端。人間とは一線を画す。

余りにも大きな衝撃で、双眼鏡を持ったまま固まっている彼だが、視線の先にいる相手はそんな猶予を待っているほど温情ではない。双眼鏡に移る化物が手に持った鉄塊……正確にはそれに内蔵された砲塔が自分へと向けられたのだ。

そして意識を現実へと戻した次の瞬間、彼は意識を再び手放した……永遠に。

1941年 9月 ソロモン諸島

ここソロモン諸島戦線は現在、人類とそれと敵対する生命体、通称深海棲艦と激しい戦闘を繰り広げる激戦区となっていた。

「派手にやるものだ」

双眼鏡に映る沿岸部の惨状を目に焼き付けながら彼女は機械的な声で呟く。

普通の人間が見れば目を背けるか嘆きや悲しみの感情を口にするだろうが、残念ながら彼女にとっては今それをする意味を見いだせなかった。

「なんて酷い……」

ふと隣から声が聞こえ一瞬確認すると同じく双眼鏡を覗く少女がいる。

長い黒髪にすらりとした体格。身長は小柄で、真面目そうな雰囲気醸し出す。外見年齢は小学生高学年ないし中学生程で女学生の制服に似た服装をしている点から余計幼さを感じさせてしまう。

その身に黒鋼の武装を施している点を除いて。

「朝潮一等水兵……見ているのも良いが、余計な感情を口にしない方が身の為だぞ。言葉というのは口にするのと、よりその意味を強く自分へと実感させる……嘆き悲しむなら任務後にしろ」

この現場慣れしていない新しい部下へ何度か助言をしているが、飲み込みは早く、反抗的ではないのに何処か抱え込み過ぎる気質らしい。

有能なのは良いが、こうも気に病む性格だと此方まで気落ちしてしまう。

そう思いつつも私はそんな気持ちを決して表に出さない。何故なら私は上に立つ立場なのだ。指揮官たる者、部下の前で無様な姿など見せられん。つまりはそういう事だ。

「はい……申し訳ありません……時雨少尉」

これまた子犬を思わせる態度で謝罪を述べる朝潮に思わず垂れ下がった犬耳を幻視

してしまいが今はそんなことをしている場合ではない。

脳裏を過つた妄想を振り払い、直ぐに戦場へと視線を向けると人型形態の深海棲艦が丁度上陸しようとする場面であつた。

敵はどうやら火力の要である戦艦クラス……この場合戦艦ル級4隻を海上に残したまま地上戦へと展開する様子だ。

人類側が島の奥地へと逃げた故の追撃と見られる。

普通なら砲撃や偵察にもう少し時間をかけて上陸するのが定石なのだが、深海棲艦達はそんな事お構いなく早く人類を滅ぼしたいらしい。もしくは考えなしの馬鹿と言えよう。

その結果、沿岸近くに残された敵は戦艦ル級が4に軽巡ホ級16、駆逐艦イ級54だ。もつとも、軽巡と駆逐艦は上陸が出来ないため、留守番ついで警護というのが見て取れた。

正しく好機到来である。

そう判断すると耳にかけている通信機の周波数を後方支援部隊へと変え、連絡する。

「こちらレイン01。敵戦力に動きあり、重巡含む人型部隊が沿岸部へ多数上陸。島奥地へと退却した友軍を追撃する模様。島近海に展開する兵力はル級4　ホ級16　イ

級54 over」

『こちらHQ。了解した。これより作戦通り砲撃を開始する。第1射着弾観測後、修正座標を報告されたし』

「レイン01了解。これより着弾観測を行う」

連絡終了後、しばらくしてから軽い空気音。つまり、何かが落ちてくる音が遠くから聞こえ、段々音が大きくなったと思つた次の瞬間。

爆発。

水柱。

爆発。

水柱。

悲鳴。

その場に地獄が作られた。

何の事はない。敵がやった事を此方もやっただけなのだ。

爆発は主に地上沿岸部や敵に直撃した事による現象で、逆に水柱は海面に当たった為に発生したものである。しかし、強い威力を持つ大きな砲弾は例え外れたとしても周りに無視しえない被害をもたらす。事実、着弾時に発生した衝撃や強い波で着弾点近くに居たイ級が少なくない損傷を受けていたのだから。

「レイン01よりH Qへ、敵に有効射を確認するも戦艦クラスには損傷見られず。また、本隊から見て近弾が多数。誤差修正+032、024を要求」

『こちらH Q。了解これより後部主砲による修正射撃を開始する』
「了解。観測を継続する」

通信終了後しばしの沈黙。

時間にしてほんの1分足らず。しかし、長く感じる1分である。

敵は行き成りの大規模砲撃に浮足立っており、未だに陣形を崩したままだ。それを見ると矢張り敵の練度は然程高くないらしい。

そうこうしている内に再び笛を吹いたような間抜けな落下音。

再びの地獄。

今度は目標地点により多くの着弾を確認。どうやら修正は上手くいったようだ。

だが、これで終わりではない。今度はより敵を追い詰めるために雨を降らせなくては
いけないのだから早く通信を再開する。

「こちらレイン01. 敵に有効打を確認。斉射を求む」

『了解。これより斉射攻撃を開始する』

そして再びの砲撃。

しかし、先ほどと異なるのは今度の射撃はより正確にそしてより多くの砲弾が降り注
いでいるのだ。最早虐殺と言えた。

此の俵いけば敵戦力の大半を砲撃で掃討されるだろう。

つまり、こちらに面倒な仕事は回ってこないという事だ。全くもって運が良い。これ
で戦果として評価されるんだから今回は美味しい任務である。

「しよ、少尉？」

ふと、隣から声を掛けられハツとした私は直ぐに緊張を貼り付け、恐らく緩んだので
あろう表情を元に戻す。

どうやら余りの嬉しさにまた何時もの笑みを浮かべていたらしい。

いかな、最近気が抜ける。この任務が終わったら一度休暇を申請してみよう。

そんな甘い考えだからだろうか、この後私に天罰が下る。

『!? ——こちらHQ。射撃管制装置に異常発生。これより砲撃を中断する!』

行き成りの通信に私はしばし固まってしまいが、このままでは不味い。敵はまだ半数は残っている。しかもル級は大なり小なり損傷しているがまだ3隻も残っていた。もし、今の状態で反撃されれば、こちらの『砲艦』が沈められてしまう。

「HQ、支援砲撃の再開は可能か?」

『……現状での再開は不可能。現在管制装置の応急修理を行っているが、1時間はかかる模様』

「……理解した。これより攻撃は我が隊が行う」

『了解。武運を』

本部からの通信を切り思わず舌打ちをしてしまいが、愚痴を零すほどの余裕はない。砲弾の雨が止み、少しずつだが敵の混乱が収まってきている。時間は敵だ。

「総員、通信を聞いて理解していると思うが、これ以上の支援砲撃は望めない。よつてこれより敵艦隊へ突貫を開始する！」

私の言葉に皆が緊張した面持ちを持つ。

どうやら自分達の出番は無いと私同様判断していたのだろう。しかし、残念ながら出番は来てしまった。もし神がいるのならダース単位で文句を言つてやる。

此方の戦力は艦娘2艦隊分。つまり12人で尚且つ全員駆逐艦。

対する深海棲艦はル級3にホ級5、イ級が23という絶望的な戦力差。

損傷艦は多数居るが、それを上回るリスクの高さ。

余りの絶望感に逃げ出したくなる。私は本来戦いが好きではない。しかし、やらねばならないのだ。

それが軍人としての。

艦娘としての。

そして私がこの世界で生き残るために必要な事なのだから。

そうだ怯えた感情を表に出すな。

笑え、笑うんだ。病は気からとも言出し、笑って楽しみながら遂行すれば苦しくないし怖くない。

うん。行ける気がしてきた。

よし、行けるぞ！

周りが私を見てざわついているが、気にするか、さつきと敵を殲滅しなくては。

「総員、蛇行しながら敵に近づくぞ！ なあに、混乱した敵艦の砲弾など早々当たらん。魚雷射程圏内に入ったら扇状に全弾撃て。良いな？」

私の言葉に部下たちが頷く。

その表情は怯えと恐怖で支配されているが、その意識が何故か自分にも向けられているのが解せん。

まあ良い。今は敵艦隊へ集中する。

嫌な戦いだが気持ちだけでも楽しまねば。

そう思い笑みをより強くする。

右腕をまつすぐと皆に分かるように持ち上げ。

「さあ、奴らを血祭りに上げてやれ、私と諸君らで地獄を生み出せ！ 全艦突撃！」

振りおろし突撃を行う。

さあ諸君。

地獄を創るぞ。

前方の深海棲艦に向け蛇行しながら接近する。時折砲弾が飛んでくるが、狙いが定まっていないのかどれも外的な場所へと着弾していた。

私、駆逐艦朝潮は上官であり、この艦娘艦隊の旗艦である時雨少尉の後ろを必死に付いていくが、見れば見るほど異常であると理解させられる。

彼女は私たちの先頭に立ち、同じように蛇行しつつ接近しているが、回避運動とけん制射撃が精一杯なこちらと違い、一発撃つごとに確実に敵を仕留めていく。

しかも鼻歌を歌いながらだ。ハッキリ言つて狂っている。

そもそも彼女の部下として働き始めてからその異常性を見せつけられてきた。

絶望的な戦力差における敵への突貫や切込み方。そして何より戦争を楽しんでいるとしか思えないその雰囲気。

先ほど行つた突撃前の演説なんて笑いながら行い。まるで指揮者のように皆に突撃を命ずる。

そんな様子を思い浮かべると……。

まるでニタニタと人を馬鹿にしたようなそして狂喜を孕んだその笑顔。

ゆつくりと勿体ぶるかのように持ち上がる手。

そして有名な指揮者が如く振り下ろされると同時に声色が上がった状態。つまり歓声を上げる様に宣言される突撃命令。

『地獄を生み出せ』

思い出しただけで身震いをしてしまう。

恐ろしい。何もかもが狂っていた。

この人は本当に同じ艦娘なのだろうか。もっと別なナニカなのでは……。

「魚雷射程圏内！ 全員味方の位置に気を付けつつ魚雷をばら撒け！」

大声で命令を発する上官の声に現実へと引き戻された私は急いで魚雷を敵艦隊へ向け、発射する。

海面へ着水した魚雷が、一瞬深く沈んで再び持ち上がったと思うと浅い深度を維持したまま敵艦隊へ直進していく。

「うわあああああああ！」

次の瞬間後方から爆発音と悲鳴。

誰かが被弾したんだ。

恐らく魚雷を撃つ瞬間、停止してしまいそこを狙われたのだろう。

一瞬後方を確認しようと思わず悲鳴が漏れ出てしまった。

左腕が無く、血だらけになり海面でもがく味方駆逐艦。

最早重症なのは誰が見ても明らかだ。

一発でこれ程の被害となると戦艦の砲撃が直撃したのだろう。それでは例え『シールド』があつたとしても重症は免れない。一発で死なないだけ幸運と思うべきかそれとも死ねない不幸を呪うべきか。

急いで助けねばと思つた次の瞬間。苦しむ彼女に死の安寧を与えたのはまたしても敵の砲弾だった。

被弾しその場に止まってしまった彼女は格好の的だ。

戦艦は元より、軽巡や駆逐艦の砲撃が殺到。水柱が晴れたときには彼女が居た痕跡など何も残っていない。いや、僅かながら残っている。艀装の一部や彼女の肉片と思われるモノがプカプカと浮き、辺りに赤い水模様を生み出しという彼女がその場で沈んだという証明が。

「うっ……」

余りの出来事に吐き気が込み上げてくるが、口に手を当て、しかし足は止めず上官の

後を必死に付いていく。

今ここで足を止め、胃の中のをぶちまけられたらどんなに楽だろうか。

だがそれはできない。

もし、そんな事をしてしまったら次にああなるのは自分なのだ。

嫌だ！ 死にたくない。

死への恐怖を胸に必死に上官へと追いつがる。

それは恐らく何かに縋る様な気持ちだった。

私の今の顔は酷いものだろう。

隣にいる吹雪さんなど顔を真っ青にしつつ涙や鼻水を垂れ流してでも上官へ付いて行こうとしている。多分私も同じだ。それどころか漏らしている可能性もある。全くもって酷い状況だ。こんな悲惨な艦隊で平気なのは上官だけだろうか。

そうこうしている内に敵艦との距離が100を切った。

此方の砲撃で敵の数は少し減ったが、それでもまだ敵の方が多い。

ふと上官に視線を向けると彼女が羽織っている陸軍の士官コートが何故か動いている。両手に持っていた主砲の艀装片方をしまっている点を考えるとコート内の何かを取り出そうとしているのだろう。

少しして取り出したもの。それは、筒のようなもので下に何か細い棒が付いている。それを自身の持つている艀装の砲身に棒部分から差し入れ取りつける。そしてそれを敵へと向け。

ボン

と間拔けな音を発した。

一瞬それが何なのか分からなかったが、数秒後敵に白い煙幕が立ち込めるのを見て確信する。

スモーク!?

しかし、何故敵のど真ん中に？

そう考えている内に上官は同じ動作を4回は繰り返し、敵艦隊を真っ白に染め上げていた。

混乱していると再び何かをまさぐる上官コートが動いている。位置からして恐らく腰辺りへ手を入れているのだろう。

そして取り出したものは一本のナイフだ。

だが、ナイフと言うには大型であり、形も刃の中ごろから湾曲しているため、ナイフと言うより剣に近い。

確か上官が愛用しているククリナイフという装備だった筈。

駆逐級から引きはがした装甲を材料に作り出した対深海棲艦用近接戦闘用武器。今それを取り出したという事は、敵への切込みを行うという意味。

「総員近接戦闘用意！ 食い破れ！」

上官の歓声に近い声を聞き、しかし、体は反射的に対応し、近接戦闘用のナイフを砲身へと取りつける。

いつの間にか敵からの砲撃は止んでいた。行き成りの煙幕で混乱しているうえに煙が邪魔で狙いつけないのだろう。

しばらくして爆発音。

此方も敵と同じく誰も砲撃していない。弾の無駄だと判断したのだ。そうなる今の音は魚雷が当たった音だ。少なくとも10は聞こえた。命中精度としては先ず先ずと言える戦果だ。

距離が20切る。

間もなく煙幕へと突入する筈だ。そうなる待っているのは視界が安定しない中で混戦。

味方に当てないだろうか。逆に味方から当てられないだろうか。

不安が心を再び占め、思わず銃剣を取り付けた艤装を強く握る。

しかし時間は待つてはくれないし、敵も思うように行動してくれない。こちらが煙幕へと突入しようとした瞬間。正面から黒い影が飛び出してきたのだ。

戦艦ル級!!

痺れを切らして煙幕を抜けてきたのだろう。ダメージが入っており、恐らく中破相当。しかし、突入前で隙だらけな今の状況は不味い!

即座に判断し主砲を向けようとする就先に行動する影があった。

「邪魔だああああああ!」

興奮から罵声を浴びせつつ、上官がル級へ切りかかる。

ククリナイフを斜めから切込みそして振りぬく。

一瞬の交差。

それで全てが決まった。

敵は立ったままだ。しかし、首から上がない。

ドブン。

何かが海面に着水する音が聞こえる。

多分ル級の首だろう。

溢れる鮮血。

ゆっくりと倒れる敵の体。

まるで全てがスローモーションの如く流れていく情景。

「ばけもの」

ふと漏れ出た言葉は誰が発したものでしょうか。

味方かもしれないし自分かもしれない。はたまた敵の心の声が聞こえたのかも。もしくはその全てか。

上官がナイフを振りぬいた姿勢のまま煙幕へと突入。

まるで先ほどの攻撃を何とも思っていないという様子だ。

やはり恐ろしい。

先程と同様に恐怖が心を支配する。

だが、それは最早敵に対しての恐怖ではなかった。

敵よりも私は『あの人』が恐ろしい。

そんな気持ちを胸に自分たちも煙幕へと突入する。

ああ、神様。どうか私を助けてください。

視界全体が白で覆われた世界で爆音や銃声、悲鳴が木霊する。

時折、何かが爆発したような爆炎が白い煙を押しつけて顔を覗かせるが、晴れてきたと思う次の瞬間には何処からともなく飛んできた発煙弾で再び白く塗りつぶされてしまふ。

正に混沌とした戦場とはこの事。

撃ち、撃たれ、切り、切られ、殴り、殴られ、殺し、殺される。

戦争における真理であり、それは深海棲艦と人類との戦いでも変わらない。

一発の砲弾が煙幕を切り裂き、真つ直ぐ飛んでいく。

煙幕を切り裂きつつ向かう先には何処か魚を思わせる様な形をした不気味な存在。

黒い装甲に身を包み単眼を光らせる深海棲艦、駆逐イ級は飛んできた砲弾へ目を向け回避行動を取ろうとするが、音速を超える弾を避けられる筈もなくあつさりと装甲を側面から貫通させられ体内にて爆発。内部を破壊された結果、その身を海へ沈ませた。

その近くに居た別なイ級は味方の被弾位置から敵方向を割り出し、予測位置へと砲撃する。

1発、2発、3発と砲撃を繰り返すが、帰ってくるのは水柱が上がる音のみ。

続いて4発目を撃とうとした次の瞬間。

カチ

自身の近く。正確には右側に音が聞こえ様子を伺おうとすると。

「死ね」

近距離からの砲撃。

それによりイ級は一瞬にして装甲を破られ、先ほどの同型艦と同じく海へと没した。敵を完全に仕留めたことを確かめた実行犯……時雨は次なる獲物を求めその場を移動する。

途中煙幕が切れそうだと思ふ場所へ発煙弾を撃つのを忘れない。

「——チツ」

コート内にある発煙弾が残りわずかと知り思わず舌打ちをする彼女であるが、事態が好転するわけでもなく、一秒でも早く敵を殲滅するべく足を速めた。

煙幕内での戦闘に発展してどれ位時間が過ぎただろうか。

既に敵を20は沈めたし、ル級もあの後もう1隻始末した。周りにまだ戦闘音が響き渡っているという事は味方が未だに生存し、攻撃を続けているのだろう。

そう判断した彼女は自分の周りに敵艦が居ないと分かると今度は発砲音が聞こえる地点へと進路を向ける。

交戦しているという事は少なくとも敵がいる可能性が高い。敵艦との遭遇率が下がったという点も考えると殲滅までそれ程まで時間は掛からないだろうと時雨は予想できた。

この視界不良である。味方同士で攻撃していないことを祈り彼女が砲撃音のする場所へ駆けつけると。

「お願い！ あっち行って！ お願い、おねがい！」

涙を流しつつ複数隻のイ級へと攻撃を行う吹雪がいた。

攻撃は大半が外れ、例え当たっても急所じゃ無いためか、その進撃を止めることは出来ない。

イ級は3隻。

どれもが傷を負っているが、動きや損傷具合から見て大破なものはいないのだろう。恐らく1対1ならば吹雪も対処できたであろうが、1人で3隻同時に相手するとあつて、混乱してしまい上手く対処できていないのが見て取れる。

対するイ級は時折攻撃をするが、余り積極的な砲撃戦はしていない。恐らく、味方が戦力的に多いことから煙幕内全体を考えて流れ弾を気にしているのだ。

この時、敵3隻が時雨に気づいていないと見るや彼女は相手の視界範囲外へと回り込み接近。奇襲をかけようとタイミングを見計らう。

正に奇襲の好機。距離をどんどん詰め、敵に砲身を向けようとした次の瞬間。

「あつー！ し、時雨さん！ 助けてー！」

あろうことか時雨を視界に捉えた吹雪が大声で助けを呼んだのだ。

この行為にイ級達は奇襲を理解し、すぐさま反転しようとする。

対する時雨は吹雪によって奇襲をぶち壊された事に腹を立て、思わず舌打ちをしてみようが、もたもたしている猶予は無いと判断。速力を上げ、砲撃をしつつ敵へと突っ込んで行く。

相手の増速を認めたイ級は先ほどまでの消極的な砲撃が嘘のように口を開けて主砲を連射。時雨を近づけさせまいと必死の抵抗をした。

右へ左にそしてまた右へと蛇行や急旋回を駆使しつつ砲撃しながら目標へと近づくと彼女は、確実に敵を仕留めるべく接近を続ける。その眼には敵だけでなく、何かを待つ

ている様なもしくは期待するような色合いが感じられた。尤も、煙幕と高速移動により、イ級達には確認することができないが。

距離が50を過ぎたのを皮切りにイ級達が痺れを切らしてか、交互射撃から3隻による一斉射撃へと切り替える。つまり、数ではなく、面での攻撃に切り替えたのだ。

しかし、それを見た彼女が笑った。

口元が弧を描きニヤリと笑う。

目を輝かせながらまるで待つていましたとばかりに笑みを浮かべる。

一斉射撃を確認した彼女は瞬時に蛇行を止め、直進での急加速を実施。

蛇行での回避を予想した彼女は瞬時に砲撃は見事に外れ、大きな水柱を上げるのみに留まった。

3隻は急いで修正射撃をするため口内にある主砲を向けるが、一瞬砲撃と金属の光が瞬き、左右に展開する駆逐艦が撃破されてしまう。

片方は砲撃で、もう片方はあろうことか投げられたククリナイフを口内の砲身に突き刺され。

反撃されて1秒足らずで2隻が撃破された事に慌てた最後のイ級は最早形振り構わず撤退を選択。その場から退避しようとするが。

「逃げようとしている所悪いね。これも戦争なんだ」

いつの間にか背後に回り込んでいた存在に砲身を向けられ、固まるイ級。対する時雨はまるで楽しそうに笑いながら目の前の存在に言葉を贈る。

次の瞬間1発の砲撃音が木霊した。

あつという間に3隻沈めた時雨を呆然と見やる吹雪だったが、彼女の上官がイ級の口内からククリナイフを引き抜く動作音を聞き、現実へと引き戻されると急いで近づき、礼を述べようとす。しかし、対する時雨は聞いているのかいないのか全く反応を示さず、抜き取ったナイフの状態を確かめているだけだ。もしかして聞こえてないのかもしれないと考えた吹雪はもう一度声を掛けようとした瞬間。

「二等水兵」

ぽつりと発せられた階級。

はじめ吹雪は誰の階級か分からなかったが、この場にいる者で該当する人物は自分しかいないと分かると直ぐに敬礼しながら返事をする。

「貴殿が臆病な事や敵を上手く倒せないのは良いだろう。人にはそれぞれ得手不得手があるからな」

紡がれる言葉はとても静かでしかし力強いものであった。その為か、それを聞いていた吹雪は敬礼姿勢のまま思わず固まってしまった。まるで蛇に睨まれたカエルの如く。何故ならば言われている彼女は気づいてしまったのだ。

その言葉に。

「だからな……私の邪魔はするな」

怒気や殺気が含まれている事が。

「ヒツ——!?!」

自分に向けられた殺気に思わず悲鳴を上げてしまう吹雪。思わずガチガチと奥歯を鳴らしてしまう。

殺される。

目の前の存在に殺される。

吹雪がそう思い思わず一步下がった時。時雨から出ていた怒気や殺気がフツと消えた。

先程までの様子が嘘の様にあっさり空気が変わった事で吹雪は思わず間抜けな言葉の口から漏らしてしまい海面へとへたり込む。

「なにポーとしている。とつとと帰るぞ」

「え？　ですがまだ敵が……」

不敵な笑みを浮かべながら帰還を促す上官に吹雪は任務がまだ終わっていないのではと聞こうとするがふと気が付く。

先程まで辺りを覆っていた煙幕が大分消えており、空には青い空が見えていた。

気を取り直して辺りを見渡せば、自分と同じように海面に腰を落とす者や恐慌状態になり虚空を見つめている艦娘の姿が見て取れる。そしてあれだけ多くいた深海棲艦は見る影もなく、居たとしても海面に漂う残骸ぐらいだ。

つまり終わった？

思考が戦闘終了と導き出された結果、思わず涙を流してしまふ吹雪。今までの恐怖や興奮状態、そして悲しさ等色々な感情が一気に押し寄せて来た為である。

嗚咽を漏らし泣き出す吹雪に苦笑を漏らしつつ見つめる時雨はため息を付いた後、コートから煙草を一本取り出し口に咥えた。そして同じくコートから取り出した銀色のオイルライターで火を付けその場で一服を楽しむ。

要は煙草を吸っている間は好きに泣きわめいて構わないから終わり次第出発するぞという意思表示なのだ。

そんな微妙な空気が流れる場所に一人の艦娘が近づく。

時雨の副官的存在の朝潮である。

恐らく報告のために時雨へと近づいたのだろう。事実、彼女は上官の前に着くなり、敬礼をすると戦果と被害の報告をしだした。

「隊長！ 敵の掃討完了。周辺にも敵影ありません」

「報告ご苦労朝潮一等水兵。被害は？」

「……混戦時での被害は轟沈3と大破2、私含め中破5です」

「突撃時を含めて轟沈は4隻か。少なく済んだと喜ぶべきかそれとも戦友の死に嘆くべ

きか……それに私以外で小破以下な者が居ないのは問題だな。後で訓練をつけてやるか……」

「……お戯れを。先の混戦で無傷で済むのは少尉殿ぐらいです」

「ふん。買い被り過ぎだよ」

一通り話を付け、肺に取り込んだ煙を外へと吐き出す。

美味しそうに煙草を吸う彼女の様子は、少女の姿でありながら実に様になっている。事実、彼女は煙草とコーヒーにはうるさく、代わりに艦娘に配られている間宮券を余り欲しがらない辺り、矢張り他の艦娘とは違うのだろう。

「よし、そろそろ行くか」

吸い終わった煙草を海へと放り投げ皆に向き直る時雨。

彼女の部下たちは煙草を吸い終わるまでに何とか持ち直したのか、整列して命令を待っていた。尤も皆が皆満身創痍であったが。

「さて諸君。楽しい戦争も終わった事だ。早急に帰還し、汚い垢でも流しながら戦闘の

余韻でも楽しもうではないか」

彼女の変わらない笑顔を見て部下達は頼もしいと思う反面表情に暗い影を落とす。

やはり、彼女は艦娘などではない。

彼女は艦娘の姿をした――

同時刻　大日本帝国　首都東京　海軍省

「ソロモン諸島での戦線は膠着状態だな」

「はい。現場は一進一退を繰り返しており、深海棲艦を殲滅するには戦力も装備も足りていない状態です」

「北方戦線から部隊は引き抜けないか？」

「残念ながら北方方面司令部としては難しいと判断するしかない。新たに出現した北方棲姫への睨みもある。」

「西方方面と致しましてもこれ以上の戦力分散は愚行と判断致します」

煙草の煙が立ち込める会議室で各戦線の司令官や参謀本部、そして総司令官などが今大戦——深海大戦——の戦線推移について話し合っていた。

しかし、明るい話題は余り出てこない。

数か月前までであった快進撃の明るい話題は何処にもなく、戦線の膠着や伸びきった補給線について頭を悩ませるばかりだ。それだけならまだ何とかなるが、問題はこれ以上戦線を押し上げる戦力が無いという点だ。

深海棲艦は制圧海域を奪わない限り、無尽蔵と言える戦力回復能力を有する。つまり、長期戦になればなるほど人類側にとって不利なのである。

幸い、現在は多くの拠点を奪取した結果、深海棲艦の増加速度は開戦当初よりも大幅

に落ち、2、3か月で戦力を全回復させた頃程ではない。

しかし、このまま戦線を維持するのも問題だ。現在の膠着状態が続けば何時か崩壊するのは目に見えている。その為早急な解決が必要なのだが。

「やはり他国への艦娘建造技術供用を考えるべきなのでは……」

「馬鹿を言うな。あれの技術は我が国の戦略的要だぞ。戦後を考えると秘蔵するべきだ！」

「しかし、このままでは前線が持たん。せめてドイツやイタリア等の同盟国には技術供与は考えるべきではないかね？」

「既に水歩の技術は他国でも成功している。何れは艦娘の建造技術も確約される恐れがあるなら利用価値がある内に外交取引用に使うべきでは無いかね？」

「事実アメリカやイギリスは技術供用の見返りにより一層の支援を申し出ている。それに各国が深海棲艦への戦線を押し戻せば我が国の負担は大きく下がる」

現在話し合っている議題は各国への艦娘開発技術を他国へ輸出するかの可否である。

今深海棲艦を圧倒できているのは他でもない日本が開発した艦娘と水上歩兵による賜物だ。もしこれらが無かったら戦線は既に内地まで押されていたであろう。

しかし、いくら優秀な技術とそれによつて作られた兵器でも数では敵の方が圧倒的に有利な点で限界が来るのは必然である。それならばこの技術を他国と共有すれば戦線は劇的に改善できるのは目に見えて明らかであった。しかし、懸念事項もあり、先ほど出た反対意見、つまり戦後を考えるなら秘蔵した方が良いというものだ。

実際に艦娘は強力な戦力であり、たった一人の少女が艦船と同等の能力を有しているのだから正にバランスブレイカーと言える。艦船より劣る点は射程が短い点と面制圧が砲艦よりも向かないぐらいで、彼女たちが戦後における戦略的存在になるのは火を見るより明らかであった。

だからこそ他国への技術供用が慎重になるのは必然と言える。

結局、今回の艦娘開発技術供用についての話し合いも平行線を辿つたままで終了となった。そればかりは直ぐには決められないという感じだ。

気を取り直して彼らは次の議題へと話を進める。

「続いて前線の将兵からの提案で、艦娘や水歩兵との連携戦略と砲艦による支援砲撃戦略についてです」

「確か、前線で戦っている艦娘からの提案であつたな」

「巡洋艦や砲艦、戦艦を砲兵部隊に見立て、艦娘や水歩兵は前線で戦う……正に陸軍の様

な戦いだな」

「ですが、これが一番有効なのは確かです。艦船だけでは深海棲艦を倒すことは難しく、しかしながらその射程や範囲攻撃は魅力的です。ならば地上への砲撃と艦娘や水歩兵の護衛兼輸送任務中心な今よりも活躍の幅は広がるのでは？」

「各艦隊を預かる者たちは好意的だ。特に深海棲艦に苦汁をなめさせられ続けた者たちは是非全面的に採用するべきだと」

報告を聞いて頭を悩ませる者もいるが、それは先程の議題に比べ圧倒的に少ない。

何故ならば頭を悩ませる者はどちらかと言うと陸軍の真似事をする事が気に食わないだけで反対では無い為だ。

この戦略は艦娘や水歩兵が前線で戦い、戦艦や巡洋艦、砲艦が支援砲撃を行うという陸上戦を海上で再現した戦い方である。事実提出された提案書には、陸軍の戦い方を参考にしたと思われる点が多々あり、群島における戦い方では、塹壕戦を思わせる物まで存在した。これを見た海軍の上層部は「何時から海軍は陸軍の真似事を？」と疑問が出てくるが、実際に有効なのだから反対も言えない。

「何度か試験的に行った所、前線での評価は上々です」

「つい先程入ってきた情報によりますと提案者が行った作戦では、少ない損害で大きな戦果を得られたとのことです」

「うむ。確か提案者は現在激戦区であるソロモン諸島に配属されていたな」

「はい、そうであります」

報告を聞いた者たちは皆採用すべき、もしくは採用せざるを得ないという雰囲気醸し出す。

ここまで結果を出されたのでは反対する方が奇怪というもの。先程の議題と異なり、今回は逆に早く纏まった事で周りも少し拍子抜けした様子だ。

「それにしても。これほどまで練りこまれた戦略を生み出し、尚且つ前線で活躍する艦娘が居るとは……ぜひ会ってみたいものだ」

「そうですね、どうやら指揮官としての素質も多くある様です。将来的にはより多くの部隊を指揮してもらおうのが理想かと」

「参謀本部としては彼女の戦略的見解に感銘を覚えています。是非欲しい人材です」

「しかし、報告によれば彼女は前線に好んで出撃する傾向があるらしい。そう易々と後方へ下がってくれるかね？」

会議に区切りがついた為か、皆が皆今回の提案者に対して思い思いの話を始める。戦力に余裕がない現状、艦娘とはいえ優秀であれば、それ相応の席を用意するのが定石。未だに艦娘に対して否定的な者は居るが、ここに集まるものは艦娘を嫌うものが居たとしても悔るものは居ない。

「そういえば兵站担当の佐々木中佐は彼女に会った事があるらしいな」

行き成り話を振られた兵站担当——今回は前線の兵站状況を説明するため上官に付いてきた——は、一瞬驚いた表情を見せるも直ぐに肯定する。

この話には周りの上官たちも興味津々らしく、彼直属の上官までもが話を聞きたそうにしていた。

初めは余り彼女の話に加わりたくなさそうな彼であったが、上官達からの希望とあっては、話さざるを得ない状況だ。

最早逃げられないならば話すしかない。

そう覚悟を決めた彼は、上官達へと向き直り彼女について話し始めた。

「失礼ながら申し上げますと。私が彼女を見た印象は決して良いものではありません」
「ほう……」

彼の第一声に総司令官が思わず声を出し、眉を持ち上げてしまう。

周りも何故という感情と続きを促す雰囲気醸し出す。

それに応えるかの様に彼は言葉を発する。

彼の見たままの感想を。

「私が受けた印象……それは、彼女は艦娘の姿をした——」

彼女は笑う。戦場で

彼女は歓喜を上げた。敵前で

彼女は歌う。死体の上で

彼女は踊る。地獄の中で

人は常識外の存在が居るとそれを恐れる。

だからこそ周りは彼女を恐れた。

理解できないゆえに。

心が分からない為に。

故に必然。

彼女は必然的にそう呼ばれてしまった。

バケモノと

艦娘戦記—序章—
e
n
d

第一話「新兵時代」

科学技術に優先するものは人間の正しい思想だ。技術を持つ人間が、それをどのよう
に利用するか、世の中に貢献するか、しないかで、その価値が決まる。

——本田宗一郎——

転生という言葉を知っているだろうか。

要は死した者が再びこの世に生を受ける事であり、仏教圏での思想と思われがちだが、意外と西洋にも昔からある概念である。大まかに分けて転生型、輪廻型、リインカーネーション型の3つに分けられると言われているが、今はどうでも良い。

つまり死んだ存在が『どの様な形であれ』再び生を受ける事が転生と思ってくれ。

ところで何故私がこの様な事を突然言い始めたのか疑問でしょう。

『それ』には深い事情があるのです。

それは……。

私自身が転生したからだからだ。

更に付け加えるならば過去の日本へと。

以前の私なら何を馬鹿な事をと鼻で笑い、言った人間を黄色い救急車で搬送させていたが、当事者となった今では最早笑えない。

しかも死んだ理由は更に笑えないもので、勘違いした女に後ろから刺されて殺される

という惨めなものだ。

死んで学んだ事は、女という奴は少し優しくただけで、肉体関係や恋愛関係にも発展していないにも関わらず、突き放したら刺す様な存在だと再確認出来た位である。

全くもってついていない。

折角上司が列車事故で死んでポストが空き、愈々私の時代だと思った矢先であった。

まあ、だが転生も百歩譲って『ある意味』悪くないと言っておこう。なにせ一度しかない人生を再び謳歌できるのだ。そう、『普通に第2の人生』が送れば問題ない。そう
だ問題ないはずなのだ。普通の人生ならば。

足らぬ信仰心云々で私を転生させた神……否、神モドキに言おう。

死ね。もしくは死んでくれ、せめて殺されろ。いやそれよか私が殺す！

私が生まれたのは貧しい農村地帯……だったらしい。

らしいというのは私に当時の細かい記憶が無いからで、気が付いたら養子として出されてきたからだ。

当時は近代文明を西洋から多く取り寄せ、列強に追いつけと躍起になる我らが大日本帝国であったが、地方。特に田舎はそんな事は関係ないとばかりに貧しくそして昔ながらの風土が色濃く残っていた。

そんな土地で生まれたものだから養子に出されたのは不思議な事ではなく、逆によく口減らしとして殺されなかったものだと感じたよ。

尤も拾われた家にも問題があり、私は女性で尚且つ子供のころから容姿が良い方であつた。

そう、察しの良い人間には直ぐ分かるだろうが、私は大きくなったら男を相手に商売をしないといけないらしい。

それが分かった瞬間この世を呪い、同時に何か回避する方法は無いかと必死に模索した。

女に生まれ変わってそれなりになるが、男に抱かれるなど真つ平御免だ。今は下働きとして家の雑用を押しつけられている程度だが、恐らく15歳を過ぎればアウト。私は目出度く風俗な女にジョブチェンジである。

色々と家に役立つ様に有能である事をアピールし続けているが、結果は思わしくない。

否、ある程度事態は改善した……家の5男坊に嫁として結婚させられるという改善結

果が。

恐らく低い身分な血筋とは言え、有能だから自分の家族として迎い入れたいのだろう。この時代では良くある事だし、尚且つ見た目が悪く、変態気質、5男の嫁が決められるのだ。ある意味家を守るものとして妥当な考えと言えた。しかも件の5男坊は私に色目を使つてきて乗り気である。

ここで私の考えは冗談ではないというものだ。

誰が好き好んでブ男に嫁いで股を開かねばならない。

此処にきて私はこの家では逃げ場がないことが判明。

荷物をまとめ出ていくことにした。

無論、唯出ていくだけでは、直ぐに連れ戻され、尚且つ逃げられないように監禁されるのがオチだ。

ではどうするのか。

答えは簡単。

軍に志願するのだ。

この世界が私の前世における過去ならば無理であつたらう。しかし、国家としては不幸でも私としては幸運な事にこの世界は前世と似た別世界である。

何故分かるかだつて？

それはこの世界は3流映画の如く人類外的な侵略者によつて危機に瀕している世界だったのだ。

私も初めは信じられなかったが、家人が読んでいた新聞を盗み見て事実を知つた時、大きな衝撃を受けたと同時にチャンスだと思つた。

深海棲艦という未知なる侵略者により、海の平和は乱され、それに対する対抗策として艦娘と呼ばれる存在が奮闘する。記事を見た時、正に私が逃げる道筋を見つけた瞬間であり、この好機を逃したらもう後がない。

そう考えるしかなかった。

尤もこの案も賭けに近いモノで、艦娘適正が無ければどのみち無理である。その為、軍に志願し、無理ならば着の身着のまま逃亡という形振り構つていられない計画を実行する事となつてしまう。

しかし、この時私は半ば確信めいた自身があり、艦娘適正については問題ないという考えだ。何故ならば艦娘適正のある者は『とある』共通点があるらしい。そして新聞に載つていた写真を見て私は『適正者』の可能性が高いと判断した。

此処までの判断材料があれば自ずと分かるというもの。

そう、私は容姿が似ていたのだ。
かの駆逐艦型艦娘である時雨に。

そうと分かればこんな家さつきと出て行く。

私は少ない荷物を纏め、一応の置手紙を残し、軍門を叩いたのだ。

結果、直ぐに検査を受け予想通り。駆逐艦時雨の適正ありと認定。晴れて時雨6番目
適合者となる。

此処で艦娘について説明しよう。

艦娘とは、特殊な艤装を身に纏い、深海棲艦を倒すための戦乙女である。

その能力は正に圧倒的で、艦船と同じ防御力と攻撃力を兼ね備え、歳を取らず、尚且
つ特殊な施設、通称「入渠施設」を使用すれば、内臓破裂や欠損といった超重症も直す
事が可能。

最早人間なのか疑問だが、軍の講義で説明された内容だと、可能にしているのは『妖
精』という特殊な存在が適正者の体を作り変えた結果らしい。

細かい点は軍事機密という事で教えられなかった為、残念ながら知り得なかったが、
私はこの艦娘に晴れて成れた。

まずは自由のそして安寧な生活への第一歩を踏み出せたのだ。

正に幸運、正に好機。

軍人となり、上へと目指すこれぞ我が道と心得たり。

この時代の軍人は花形職。さらに人類の存亡を賭けた戦いが起き、人手は幾らでも欲しい。尚且つ艦娘は大変貴重な戦力だ。

唯一の不満は命の危機だが、現在世界各国が協力して対応している点と艦娘技術により深海棲艦を押し返している。そう考えると人類滅亡の可能性は少ないだろう。ならば、今のうちにキャリアを積み上へと昇る。

無論、未来知識を活用する事に私は下手な悪影響を及ぼさない範囲では惜しまない。要はこの世界にとって毒薬となる可能性がある先進的理論や思考は仕舞い込む。私の命と昇進の為にもね。

これこそ我が人生の設計図。

貴重な職種で

未来の知識で

そして勝てる戦争で

キャリアを積む。

全てが良い方向へと転んだ。

少し前までの風俗もしくは強制結婚に怯えていたとは思えないほど良く廻った。
良い……実にいい。

これぞ我が明るい人生。

今から未来が楽しみではない。

そう思っていた……。

後日私は嬉々として艦娘専門の軍学校へと入学。

模範的な艦娘として勉学や軍事訓練に励み。

反発されない範囲の先進的論文を書き。

常識的な交友関係を周りと結び。

軍事的な後輩指導を心がけ。

模範的優等生になり続けた。

結果、卒業後新兵が、一般的に配属される筈の各種鎮守府正面海域には配属されず。

私はなんと将官や軍令部の方々から直々に辞令を頂く。

どうやら私の戦意と戦術を高く評価した結果らしい。

聞いた当初は舞い上がる思いだった。

正にエリート街道まっしぐら。

このまま評価されれば、後方の安全な場所で優雅な生活と地位を手に来るのだ。

正にわが世の春。

嬉しさの余り、明るく、やる気ある雰囲気です。辞令を受け取った私は、思わず鼻歌交じりで自室へ向かい、着いた瞬間、居ても経つてもいられず封筒を素早く開け放つ。そして笑みを浮かべながら詳しい内容を確認すべく、中に入っている辞令へ目を通すと私は一度辞令を折りたたみ目元を揉み解す。

おかしい。今、変な単語が見えた。恐らく疲れているのだろう。

そうして意を決して再び確認した後、しばらく呆然としてしまい、内容を理解した後

に思わず絶句した。

曰く、新戦術のテストを実戦で行う為、最前線で尚且つ激戦区であるラバウル方面へ向かえと。

どうしてこうなった。

艦娘専門学校。

軍に志願し、艦娘の適正がある者達が学び、経験するための場所。

歴史は艦娘が生み出されて1年後。つまり今から7年程前で未だに浅い。

在学期間は1年間で、1か月で基礎を学び3か月で肉体強化訓練。そして8か月で各種戦場や訓練について学ぶ。

無論これで一人前という訳でなく、卒業後は深海棲艦が少ない海域へ配属され更に3か月の実戦経験を積む。

そして今までの記録や点数を元に最終的な配属先が決まるのだ。

つまり、1年3か月での教育後には晴れて正式な兵士として戦う事となる。

普通なら兵士を育てるのに最低2年は必要と言われているが、艦娘では当てはまらない。

何故か。

それは、前線へより早く人員を派遣したいという余裕の無さも関係するが、一番大きい点は、艦娘は『艦娘に成った』時点で、ある程度の艦装使用知識や戦術、その他艦娘における情報を刷り込まれるからだ。

妖精という存在の力を借り、生み出された艦娘は各種装備を刷り込まれた知識により

使用できる。その為、使い方の講義等は軽く流す程度しか教えられない。初めの基礎学習も、知識に抜けが無いかの確認と刷り込みでは入りきれない戦場での常識を学ぶことが主な為、短期間学習で済む。

逆により時間をかけて学ばされるのが連携や戦術、敵に対しての知識である。

その為、訓練における模擬戦や軍議以外は、どちらかというと大学の講義に近い情景と言えた。

事実、講義後は、レポートの提出を求めたりと、大学キャンパスを思わせる授業風景だ。建物も海沿いの学校施設を改修した建物である為（警備や校内施設は全然異なる）より一層大学と思わせてしまう。

そんな艦娘学校の職員室。つまり教官達が詰めている場所でレポートを嫌々見る士官がいた。

彼は、艦娘へ戦場での作戦組み立てや戦略的観点でどう戦場を見るかを教える為の教官であり、今回自分が受け持つ者達に課したレポート内容を見ていたのだ。

実戦経験のない彼女達から提出されるレポートは、大半はどこか考えが足りなかったり、教科書通りもしくは支離滅裂な内容が大半で、1つずつ確かめる作業はある種の拷問を思わせた。しかし、中には重要なアイデアが隠されている可能性も捨てきれない

し、何より点数を点けない事には彼女達の配属選定に差し支えてしまう。

何本目か分からない煙草を灰皿へと押しつけ、レポートの確認作業を続ける彼は、ふと視線を未読ものの山へと向けた。

高さが1メートル近く有ろうと思われる山は、体に鞭打ち仕事を行う人間にとって、ヤル気を削ぐものでしかない。

思わずため息が漏れるが、それでレポートが減るわけもなく、漸く作業を再開させた。

トン

作業を再開して直ぐ。何か軽い衝突音がして、次の瞬間には、バサバサと複数の紙が床へと落ちる音が室内に響く。

ぎくりとした動作で一瞬間が上がった男は、見たくないものでも見るかの様にゆっくりと視線を先程の書類の山へと戻す。するとそこには、案の山が崩壊し、雪崩を起こしたレポート達が床へと散乱している。

それも見事に1つのレポートを残して全てが。

「ああ、くそ。やっちゃまったか!？」

慌てて片づけるが、何枚か付箋が外れてしまった為か、ページがバラバラに混ざり合
い、どれがどのレポートか分からない状態へとなってしまうていた。

これには最早脱力するしかなく、頭を思いつ切り掻き毟った後、ふて腐れた様子で椅
子へと座り込む。

脱力し、背中当てに体重を掛けて座る姿は、仕事を投げ出している様だ。事実半ば当
たっており、彼の口から「今日はもう止めようかな」と小さな声が漏れ出ていた。

要は諦めである。

口からやる気のない声を意味なく出すと同時に煙草の煙を曇らせる。ふと机に残る
一枚のレポートへと目を向けた。

机の上に置かれた1つだけ無事だったレポート。

見る人によっては、先程の偶然といい、まるで読むのを催促している様だ。

題名と提出者名が自己主張する表紙を手に取り、恐らく唯残っていたからという適当
な理由だが、それから読むことを再開した彼は煙草をくわえたままページを開く。

文章を目で追いつつ紙が捲れる音が響く中、彼の表情が変わった。

先程までのやる気無い顔から一転、彼の眼は見開かれ、ページを捲る音も力が籠った

ものとなる。時にはひとつ前のページへと戻り何度も内容を確認する点から、より詳しく理解しようとする努力しているのが見て取れる。

しばらくそうしていると職員室の扉が開く音が勢いよく開き、誰かが教材片手に入ってきた。

「お疲れ、まだやってんのか……って、床に書類ぶちまけて片づけもせず何してんの？」

職員室へと入ってきた同年代と思われる男が、落ちた書類を片づけもせず、一心不乱に何かを読みふけている様子を見て驚く。

恐らく講義後だったのだろう。室内に入った男は疲労を感じさせる溜息を一つ付くと教材を自分の机へ置き、落ちたレポート片づけを手伝う為、嫌々近づいた。

しかし、近づく最中、先程から同僚が微動だにせず、未だにレポートを凝視している姿に気づくと怪訝な表情を浮かべる。その姿は何か鬼気迫る雰囲気を感じさせるもので、もしこの場に第三者が居れば、異様な雰囲気を感じ、職員室を出ていきたくなるだろう。だが、手前で立ち止まった男は、逆に同僚をここまで夢中にさせる原因が何か気になっている様子で、原因たるレポート用紙を凝視する。

ふと先程までレポートを読んでいた男の気配が少し落ち着いたものへと変わった。

多分読み終ったので雰囲気を変化させた様だ。

「何？ 何か気になる書類でもあったのか？」

話しかけるタイミングが到来した事で、好奇心を刺激された男は、足早に同僚へと近づくと今度は近くから声を掛ける。すると疲れか、それとも別な理由からか、目頭を抑えてマツサージをしている同僚は、顔を上げると男へと向けた後、無言でレポートを突きつけた。

黙ってこれを読め。

無言だがハッキリとそう意味を込めて男へと視線を向けるその姿は流石に馬鹿らしいと考えたのか、男は自然と呆れた表情を見せてしまう。そして黙って受け取ったレポートの表紙を少しの間凝視した後、意を込めて読み始める。

再び室内を満たす紙を捲る音。

その流れは先と同じく、初めはゆっくりと。しかし、後半には何度も前後させ確認するものとなる。無論男の表情もまるで同じだ。

時間にして15分ほどだろうか、一通り読み終った男はレポートを目の前の人物へと返し、深いため息を付く。

疲れた様などう表現すれば良いか分からないといった表情は次の瞬間には真剣なものへと変化していた。

そして息を吸うと。

「提出者は？」

簡潔にしかし多くの意味を乗せて聞く。

「時雨2等水兵。10期生の方だ」

聞かれた側は、打てば返す楽器の如く、ハッキリ述べる。

彼自身既に聞かれると分かっていたのだろう。その瞳の眼光は力強い。

「彼女は……戦争を、いや、世界を変えるかもしれない」

「俺もそう感じたよ」

互いに確認し合った2人は急いでレポートを彼らの上司たる校長へと持っていく。
これの価値を見出して。

レポートの題名にはこう書かれていた。

『深海大戦後における国家間における戦争及び艦娘の活用事項』と。

彼女は1つ間違いを犯してしまふ。

艦娘の能力を人類と深海棲艦両方の戦争に広く活用できると上層部は既に考え、教官達も思い描いている。事実、艦娘技術を他国へ輸出しながらない姿勢や講義内容を見て、その考えを確信させた彼女はこう判断した。

『ならば現大戦である深海大戦のみを題材にしたレポートよりも戦後を題材にした内容もしくは両方に対応できる戦術等の方が目に留まつてくれるのでは?』と。

実際にその思考は間違っていない。

上層部は艦娘が次の時代における戦略的要になり、戦争を変える物だと理解。よつて、その技術を他国へ渡すのは不可能もしくは一部に限るのが好ましいと思つている。無論教官クラスでも同様な思考を持つているだろう。

では何が不味いのか。

話は変わるが皆さんは飛行機を知つている筈だ。

天高く飛び、人や物を高速で運ぶ便利な乗り物。

そしてそれは軍民間わず今では欠かせないものだ。

しかし、登場した当時は懐疑的な意見が多く、その有用性が示された後も試行錯誤の連続であつた。

軍事的に大々的な投入が成されたのは登場してから約11年後……第一次世界大戦の頃である。

結果、飛行機は偵察から対空戦闘、爆撃そして連絡と多様な戦術を編み出したのだ。

しかし、この時期でも飛行機は未発達な存在で、恐竜的進化を遂げる第二次世界大戦まで約20年を要してしまう。これは性能的な問題もあるが、運用方法は試行錯誤の連続なものも起因する。

再び話を変えるが、彼女の提案していた内容が、もし航空機に関するものならば、その時代の技術に合ったモノを提出し、尚且つ先進的過ぎた技術は逆に今後の技術発展を邪魔する可能性があると思ひ至つたであろう。

では此処で一つ有りえない仮説を設ける。

もし、技術は現代だが、戦術は全くもって未発達な時はどうアドバイスをすればよいのだろうか。

普通ならば有りえないチグハグな情景。

技術と戦術は片方が多少追いついていない事があるが、完全に引き離される事は先ずない。正に有りえない仮定と言えた。

しかしもし、有りえたなら如何するか。当然ながら行き成り現代戦に合わせずスピードは速めだが、段階に教えていく筈だ。

行き成り革新的な戦術を与えてもそれは劇薬に過ぎない。

下手をすると国家戦略に大きな歪を生むことになる。

他国に漏れようなら目も当てられない。

これが艦娘の場合はどうだろう。

艦娘は言うなれば技術が最初から発達し、尚且つ初めから操作方法が提示されたある一種の完成兵器である。

技術は完成しているのに戦術は完成していない。

その為、現場は試行錯誤を繰り返して、今回の様に教官達が必死に訓練生からもレポートを求め生かそうとしているのだ。

そんな所に現代戦の知識やそれらの知識に裏打ちされ、今ある時代で再現かつ効果を

期待できる戦術を提示したレポートが出てきたらどうなるだろうか。

艦娘の能力を駆使して輸送機からの降下を行うといった作戦方法の数々。

特殊部隊構想とゲリラ戦における細かい戦術の多く。

艦娘を艦隊的な運用ではなく、陸軍に近い猟兵的な活用法。

そして今後各国が艦娘を運用してきて尚且つ戦争に発展したときの推移予想。

前世の書類作成技術とプレゼンテーション能力を遺憾なく発揮したそのレポートは大変分かり易く、どれもこれも再現可能かつ理解可能——劇葉だった。

彼女の不幸は、兵器の発展状況と戦術の発展状況がある程度比例して考えてしまった事であり、尚且つ艦娘となり、戦う方法を自然と身に着けてしまったからこそ他にも同じと感じてしまった点だ。

つまる話、彼女は現世の技術を理解しつつ、情勢も分かっていたが、艦娘については分かっていたいなかった。

ハッキリ答えるとつまり。
やらかしてしまったのだ。

第二話「戦争と着任と……」

戦いは相手次第。生き様は自分次第

——小野田寛郎——

1939年 ラバウル周辺海域

深海棲艦が出現してからというもの、人類が海上で活動する機会は以前より減ってい

た。

それはある程度の海域を取り戻した現在でも変わらず、政府主導の下、無闇な海上航行を控えると同時に人々も、未だ癒えぬ恐怖心ゆえ、好き好んで海へは出ようとしない。

よつて、海上を航行するものは輸送船や漁船を除き、残りは軍閥係を占める。

特に激戦区ともなる此処、ラバウルでは、航行する存在の大半が人類軍もしくは深海棲艦のどちらかのみ。稀に迷い込んだ密漁船位のものであった。

青い空の下、穏やかな海を疾走するものが複数あった。

それは二本足で立ち、周りを警戒しつつもまるでスケートで滑るかの様に進む。

此処まで説明されれば艦娘か深海棲艦のどちらかを想像するが、答えは否。

事実、疾走する者の服装は緑色を基調とした軍服に鉄帽、各種弾薬ベルト。そしてライフルを装備しており、歩兵を思わせるものだ。

しかし、尤も異色なのは、足に取り付けた鉄脚で、時代錯誤な中世の甲冑を思わせる作りをしており、そこから推進力を得ているのか、駆動音と水柱を上げている。

特別水上駆動歩兵。通称水歩兵。

深海棲艦は元より、艦娘とも違う海上を船舶以外で疾走できる第三の存在。

艦娘技術を応用し、歩兵を海上で活動できるようにしたもので、主に哨戒や偵察、艦船防衛といった様々な任務は勿論、深海棲艦との戦闘や上陸任務までこなす一種の便利屋でもあつた。

主な特徴として、艦娘とは違い適正等は関係なく、訓練を積みば誰でも成れる兵科である。また、弾薬や燃料の消費も艦娘より少なく、速度こそ最高28ノットまでしか出せないが、下手な低速船舶や場合によつては、低速の戦艦艦娘よりも早い為、使い勝手は良いと言える。

実際に戦場で戦果を一番あげるのが艦娘ならば、逆に戦場で一番活用されているのが彼ら水歩兵なのだ。

では、何故彼ら以外の存在、艦娘を運用しているのか。

それは、彼らはいくまでで水上で活動可能な歩兵だからであろう。

深海棲艦は、艦船を小型化して尚且つ火力や防御力をそのままにした様な存在である。

人型種の持つ防護膜、通用『シールド』は、各艦種が持つ装甲と同じ強度があり、シールドを持たない非人型種であっても、代わりに持つ装甲は銃弾や手榴弾程度での突破を不可能にする強固さがあつた。

対して水歩兵は、航行時における風や波の影響を軽減させる程度の防護膜しかなく、尚且つ彼らの航行は時間制限が艦娘よりも圧倒的に短い。

燃費の悪い戦艦種の最大航行可能時間が24時間に対して水歩兵は2時間。つまり1/12しか無いのだ。尤もこれは『航行時間』であつて、海上を歩くだけならば、艦娘と水歩兵共に移動できるが、敵が居るかもしれない海域で歩くなど自殺行為と言えるだろう。

その為、基地からの敵地へ移動し、攻撃を行うという行為に向かない。もし行うならば人員輸送の艦船を用いて移動を行い、そこから出撃する事となる。

だがこれはまだ小さな問題だ。

元々艦娘も遠くで作戦を遂行する際は疲労や長期戦に備え、艦船に乗船。そしてそこを中継地点として活用する為、同じ運用にすれば良いだけ。

一番問題なのは、最初に述べた防護能力不足であつた。

艦娘は深海棲海同様に各艦種に合わせた強固な防護膜を持っている。しかし、水歩兵はせいぜい銃弾を2〜3発耐える位しか持たない。

また、主戦場となる海上も問題で、群島や陸地が近く活用できる戦場ならば奇襲や撤退、防衛戦が容易だが、何も無い大海原では隠れる事は勿論、攻撃を防ぐ場所が無く、不可能だ。よって、塹壕もない平地で戦車と対峙した兵士と同じ末路と化す。

同時に問題なのは攻撃手段の欠如だ。

彼らの主兵装は駆逐艦娘の主砲を使用できるように改良した三八式歩兵銃と最近開発され、未だに一部の部隊にしか配備されていない破甲爆雷。そして拳銃や手榴弾といった歩兵と何ら変わらないものである。

中には弾幕形成のために軽機関銃を持つも者もいるが、牽制程度にしかならないだろう。

防護は無く、攻撃手段も限られ、活動時間は陸より短い。

そんな状況で敵艦船を相手にせよというのは無理な話だ。もし行ったとしても戦果と犠牲が割に合わないのではなからうか。

だからこそ艦娘が必要で、しかし数的主力は彼らとも言えた。

正に最も死に近い兵科、水歩兵である彼らだが現在、一小隊にも上る数がこの場を航行していた。

理由は単純で、近海における警戒網で敵深海棲艦の水雷戦隊を確認。応援を要請された為だ。本来ならば艦娘もしくは艦娘と水歩兵の合同部隊が増援として派遣される筈だが、生憎別戦線へ派遣されてしまった後で、尚且つ他の艦娘部隊は補給中。その為彼ら水歩兵のみが派遣される。

海軍ラバウル鎮守府特別海兵隊。第一大隊所属。第二中隊下、第三小隊。
それが彼らの部隊だ。

因みに海兵隊とは、水歩兵導入に伴い陸戦隊を解体し統合させた結果、その様な名前となった。また、陸軍の場合は水歩兵部隊を水陸隊と呼ぶ。

「小隊長！ 間もなく戦闘海域に到着予定です！」

「よし！ 基地へ伝達。我コレヨリ戦闘海域二侵入セリ。コレヨリ味方ノ救援ヲ開始スル、とな」

「了解！」

時間差を感じさせないやり取りの後、小隊長と呼ばれた約三十代後半と見受けられる男が右手を挙げ、ハンドサインをする。するとそれまで三列に並び進行していたが、三角形を思わせる突撃陣形へと素早く移行。皆が戦闘準備を完了させた。

その流れるような動きから、彼らの練度が高いことを伺わせる。

双眼鏡やライフルのスコープ、味方からの通信によって敵位置を割り出そうとする中、陣形外郭で双眼鏡のレンズを見ていた兵士がお目当てのモノを発見した様だ。

「十二時の方向に敵水雷戦隊発見。距離にて3000、艦種はホ級1にイ級4の計5隻！ 尚ホ級は『赤色』です！」

「どうやら苦戦してますな」

直ぐに小隊長へと報告し、続いてより詳しい内容を記録しだす。

彼の隣に居た兵士も同時に確認したのか、味方の状況について思わず声に出して呟く。

彼が言った通り、その水雷戦隊は5隻編成で、味方哨戒部隊と交戦中の様だが現在の戦況は、味方に分が悪いらしい。哨戒部隊が一個分隊、つまり下士官含め11名なのに対し、確認した限りでは6名しか見当たらず、恐らく既に戦死したと思われる。そして残る兵士たちも必死の形相で逃走しながらの射撃を繰り返している。

「指揮する人間が見当たらん……やられたか？」

「恐らくはそうでしょう。此の俣では全滅させられます」

連絡があつた方向へと首に下げた双眼鏡を向け、見ている小隊長は現状の深刻さを理解し、隣の副官も同意した。

最初に受けた報告では、敵は6隻編成と聞いていたが、どうやら偵察隊が自力で仕留めたらしく、他にも駆逐艦2隻に損傷が見られる。しかし、他の敵艦は無傷で、練度がそれ程高くない分隊ではそれが限界なのだろう。

「第二、第三分隊は右側面に回り込め！ 第四分隊は援護射撃を3分後に実施。第一分隊は俺と共に左からだ！ よし、お前等生き残れよ、各員状況開始！」

『『『『了解！』』』』』

小隊長が直ぐに各分隊へと命令を伝達、命令を告げると各分隊は行動を開始、正に流れるような動きだ。

そんな中、速度を変えず、一定の距離を保つ分隊が居た。

援護射撃を担当する分隊であり、彼らが突撃した3分後に第四分隊が射程圏内まで近づくと持っている小銃を敵艦へと向け狙いを定める。

「距離、2000！」

「艦式弾装填！ 第一射始め！」

分隊長の指示に従い、一斉射撃する兵士達。見た目よりも多く煙を銃口から吐き出され、勢いよく放たれた弾丸が、敵艦隊へと飛んでいく。

そして僅かな時間経過後。

まるで駆逐艦が砲撃したような水柱と爆発音が戦場に響き渡る。

爆発音からして恐らく敵艦に命中したものが有ったのだろう。水柱が発生した瞬間、爆炎らしきものが確認できた。事実、視界が回復して彼らの目に飛び込んできたのは、側面に被弾して黒煙を上げるイ級だ。

遠距離からの支援攻撃に初弾で命中を出した事に思わず隊員たちに笑みが浮かぶ。

しかし、高練度の成せる技か、直ぐに表情を引き締めると回避運動をしつつ次の攻撃への移行を迅速に行う。

彼らは深海棲艦がどれだけ恐ろしい存在か嫌となるほど体験してきた。だからこそ次の行動を即座に実行。決して油断などしない。

その行動は正しく、新たな敵に気が付いた敵艦隊は即座に陣形を立て直し、回避運動と第四分隊への砲撃を開始。

先程まで分隊が居た場所へ砲弾が降り注ぐ。

分隊もお返しとばかりに射撃を行うが、蛇行して回避する敵に命中や至近弾は見られない。先程の命中は敵が哨戒部隊に夢中であり、回避行動をしなかったからであって、

此方に意識を向けた状況ではまず無理であろう。

少しの間、互いの牽制射撃が続くが、深海棲艦に対して両側面より砲弾が降り注ぎ、形勢は人類側に大きく傾いた。

「06、07両名は哨戒部隊の生き残りを助ける！ 後は俺に続け！」

『『了解！』』

奇襲に成功した彼らは、混乱している敵に更に攻撃をするべく、蛇行しながら接近し相手に狙いを定めさせない。

逆に距離が300まで近づいた状況で水歩兵たちは命中率を大きく上げ、敵へ着実に損害を与えていく。

そんな中、敵艦の中で旗艦的存在。つまり赤い目とオーラを出しているホ級が味方イ級へと何か指示を出す様子が見られる。それを見て小隊長は思わず舌打ちをして再び指示を出す。

曰く、敵旗艦を集中して狙えと。

命令を受けた兵士たちは敵ホ級へと攻撃を集中、しかし、決定打にはなりえない。

「ちっ、硬い！」

「やはり三八式の艦式弾では『赤艦』を撃沈させるのは難しいか！」

「構うな！ 射撃を続けろ、敵艦を拘束させるんだ。それと『亀の子』用意！」

隊員たちの苦悶を遮り鼓舞する小隊長は、部下に亀の子……つまり九九式破甲爆雷の使用を指示した。

本来、破甲爆雷は、敵戦車を撃破する為に開発されたものだが、この世界においては、装甲型深海棲艦を撃破する為に珍しく陸海共同で開発されたものだ。

形状は史実の九九式破甲爆雷と同じく、撃発装置、導火薬筒、尾筒、安全栓から構成された作りになっており、円形の形が亀に似ている事から陸海の兵士から共に『亀の子』と呼ばれている。

しかし、この破甲爆雷は敵に取り付けて爆発させる吸着方式を取っている為、使用するには敵に接近しなければならぬ。

敵艦への接近は大変危険を伴う。

もし、接近に気付かれれば直ぐに機銃掃射を受け、蜂の巣にされてしまうのだ。その為、他の隊が援護をして、敵艦の気を惹きつける必要があり、ハッキリ言って半ば特攻

要員じみたと言えた。

しかし、それだけに威力は絶大で、同盟国からの技術供用もあり、史実の九九式破甲爆雷よりも破壊力を増している。

「05頼んだぞ」

「了解！ 任せてください」

「残りは俺と共に05を支援しろ！ いいか、決して敵に攻撃の機会を与えるな！ それと間違えて05を誤射するなよ。分かったら行くぞ、各員散解！」

無線により他の分隊にも聞こえる様命令を発した後、作戦開始の号令が響き渡り、それぞれが与えられた使命を全うすべく敵へと挑む。

イ級達は他の分隊が相手取り、着実に仕留めていた。そして狙うべき一番危険な相手、ホ級に対しては小隊長を始めとした者達が攻撃を行い、イ級へと合流させない為に分離と行動阻害を同時に行う。

ホ級に対して命中弾を何度も浴びせるが相手は普通のタイプのとは異なり強化型と呼ばれる赤艦。普通の装備で仕留めるのは難しい。

それに赤艦は他の深海棲艦よりも練度が高いことで有名だ。下手に慢心すれば仕留

められるのは彼らになる。

事実、ホ級は時折、射撃を行う水歩兵達へ攻撃の合間を見つけるなり砲撃又は機銃掃射を行い連携の邪魔をしてきた。それに対して彼らは小隊長の指示や独自での判断を駆使して回避や反撃を続け、正に一進一退の攻防が続く。

続く援護射撃が功を成してか、爆破要因がもう少しで敵に仕掛けられるという距離まで近づく事ができ、いよいよ仕掛けられるべく途中しようとした瞬間。

深海棲艦が彼の方を向いた。

接近していた彼はこの時、ホ級と目が合ってしまった、自分達の目的がばれたと判断。一か八か自滅覚悟での突撃を慣行するべく、安全ピンを抜こうとした時。

「貴様の相手はこつちだああああ！」

十一年式軽機関銃を乱射しつつ接近する小隊長によりホ級は再び意識を射撃側へと戻す。

決死な覚悟での小隊長の行動で、好機がやってきたと分かった爆破要員は隊長と同様

にホ級へと突撃。距離が10を切った段階で安全ピンを抜く。

味方からの攻撃は自分への誤射を防ぐため現在止められており、実質小隊長がギリギリまで近づき行っている射撃だけだ。しかし、それ故、深海棲艦は近距離で攻撃を続ける彼を鬱陶しく思い意識を向け排除しようと躍起になる。

故にそれが隙となった。

眼前の敵を確実に排除するべく、機銃と砲塔が一斉に向き、攻撃を行おうとした瞬間。ゼロ距離まで近づいた『本命』が破甲爆雷先端部を叩いてからホ級の砲塔部に接着。瞬時に離脱。それを見た小隊長も急いで距離を離す。

敵の不可解な行動と砲塔部に感じた衝撃を疑問に感じたであろう。ホ級は思わず行動を止めてしまい、まるで呆然としている様だ。

だが時間は待つてくれない。ピンが抜かれ、先端部を叩かれてから約十秒。

仕掛けられた破甲爆雷が起爆し、内部の爆薬が爆発。指向性を持ったエネルギーが砲塔の装甲を食い破り、爆炎が侵入。それが砲塔から弾薬庫へと伝わり。

大きな爆発が発生。

爆炎を天高く持ち上げた。

深海棲艦の艦装もしくは体内には艦船と同じく燃料や弾薬が納められている。無論そこを破壊された場合の末路もまた、艦船と同じである。

誘爆。

艦船が沈む時、最も助かる見込みのないモノだ。

敵艦の撃沈を確認した分隊は急いで集結。他の分隊を支援しようとするが、どうやら同じように戦闘を終えたらしく、小隊長へと向かって集まる様子が伺えた。

「各隊被害状態を知らせ！」

「第一分隊欠員なし！」

「第二分隊欠員なし！」

「第三分隊も同じく欠員なし！」

「第四分隊も同様です！」

それぞれの分隊から報告を聞いた小隊長は大きく頷くと隊員の顔を確りと見つめる。皆が皆疲労を感じさせるが、目は未だに輝いている。確かに疲れは感じるが、彼らはそんな事で戦意を決して失わない。もし同規模の敵が来たとしても隊員達は喜んで戦うだろう。何故なら彼らの絶望は既に通りに過ぎて過去となったのだから。

「総員、苦勞！ しかし、任務は帰るまでが任務だ。総員決して最後まで油断するな！」

「[[[[はいいー]]]]」

「よし、いい返事だ。我々は哨戒部隊と共に帰還する。総員出発」

自分の部下たちを見つめた小隊長はニヤリと不敵な笑みを浮かべた後、帰還指示を出す。

哨戒部隊の救援を終わらせた彼らは、皆が無事である事を国や神、そして上官に感謝し、帰路へと就く。

戦闘は終わった。

今日は誰一人欠けることなく無事に済んだ。
ああ、だから。

今後も皆で生き残れますように。
彼らはそう祈るのであった。

毎日を平和に過ごしている諸君。

平和を謳歌することはどんな気分だろう。

変わりない日々を愚かしくも退屈に感じていないだろうか？

それとも「流石は平和の国だ。今後も平和が続くといいな」と能天気にかけているかい？

海外の自爆テロや紛争、民族問題を「酷いね」または「怖いね」と言いつつ次の瞬間には忘れて友人や趣味に費やす時間へ戻る気分は楽しいだろうか？

無論楽しいだろうね。

自分達にとって『直接』関係のない事ですし、何より自分の時間は何事にも代えられぬ大切なものである。

貧困国から輸送された原料を元に作られた服を着て、紛争国またはその周辺地域から輸出された石油を使う生活は楽で過ごしやすいものだ。

別に非難している訳では無いよ。

唯、自分の理不尽な出来事に精神的な不安をきたしてしまい、不条理な攻撃を周りへばら撒いているだけさ。

事実、前世では自分もそんな生活を送ってきましたので文句は言いません。

どちらかと言うと今の世界に来てから、前世が素晴らしいと再確認する為です。

申し遅れました。

今世界で艦娘へと転生した少女、時雨16歳です。

艦娘学校へ入学し、卒業するまで約1年3か月。時間が経つのは早いもので、当時15歳だった私も既に高校生へ入学する歳となりました。1年ちよつとでは変化が見られませんが、この年頃の女子は気難しい為、娘を持つお父さんはちよつとした変化や雰囲気を見つけましょう。発言次第で、反抗期に高低差が出るらしいので。

最も私たち艦娘になると歳を取らなくなるので、見た目はどの道変わりませんが。

それは兎も角。

話しは変わり、唐突ですが、皆様、旅行はお好きですか？

もしくは、経験は？

旅行の醍醐味はやはり他国文化を見聞きし、実際に触れる事でしょう。

そして国際交流の素晴らしさを実感出来る事。

残念ながら私は前世において一度だけ、しかも会社の出張関係で、某ビルとソーセージな国へと行った位です。

現地の言葉や習慣を覚える事は大変な労力でしたが、それに見合う。否、それ以上の成果を得られたため、貴重な経験でした。

ですが、今世においては何と16の身で海外へと赴くことになり、戸惑うばかり。人生何があるか分かりませんね。

そして今回出向いた国は何と南太平洋のニューブリテン島。
オーストラリアに近く、日本に比べ暑く、自然豊かな土地です。

やはり今世初の海外という事もあり、私の心は様々な感情に満ち溢れました。

飛行機を降りてからその暑さを一身に受け、現在冬な日本との違いに殺意を抱きますね。

上を向けば強い日差しと青い空。今日は雲一つない快晴である為か、最早拷問を思わせる日光で、太陽に向かって呪詛を吐きそうになりました。

左右を向けば飛行場だから当然、様々な軍用機が見受けられますが、フェンス越しに見える日本では見られない南国風の植物達が私を出迎え、まるで不幸な自分をあざ笑うかの様で苛立たせられません。

そして真正面。軍事施設として整備され、大きく、しつかりした造りを持つ我が大日

本帝国が誇る最前線の航空基地。これからこの場所を発つて、重い足を引きずる様にお目当ての場所へと向かわなければいけません。

車前で待機している兵士たちを殴りたくなる気分です。

それらを見聞きし、実感した気分はそう。

ハッキリ言つてクソである。

場所の名はラバウル。

前世でも様々な戦いの舞台となり、地獄と化した戦場。それはこの世界でも変わら

ず、相手がアメリカから深海棲艦へと変わっただけ。

史実同様、相手がこの基地を放っておいて、他へと戦力を振り分けてくれるならまだ救いがあった。しかし、奴ら深海棲艦はそんな頭は無いのか、全力で当基地を攻撃してくる。それはもう陸軍の無能（むたぐち）が如く、他の泊地や基地はお構いなし、ラバウルに突撃の一点だ。

無論敵を多く倒せているが、その分犠牲も馬鹿にならない。

正に地獄の一丁目で、別名、天国に最も近い場所とは何たる皮肉か。

そんな場所に何故私が居るのだろうか……。

いや、原因は分かっている。

教官が話した私に対する評価と新戦術テスト。これらを分析すると私が提出したレポートを評価した結果に違いない。

確かに私は、将来の為、そして昇進の為にレポートを前世における知識を動員して作成した。ちゃんと何度も目を通し、上層部から敵視される内容は見当たらなかった。だ

からこそ問題なく評価されたのだ。

問題は上層部が私を、そしてレポート内容を予想以上に評価した点だろう。

恐らく新戦術を評価するのは良いが、前線における実施試験を早く済ませたい事と発案した私自身が戦地にて取り組む事で、現場とのすり合わせをスムーズに進めたいと見て取れる。

要は、早く結果出したいし、お前の提案だからお前が責任とれよ。

と、上は申しているのだ。

……余りにもバカバカしい。

もし、この時代に労働相談所があれば私は迷わず駆け込む。

そもそも私は、出世する為にレポートを作成したのであって、最前線に出る為ではないのだ。しかし、蓋を開けてみれば、上層部は私を最前線へ派遣し、新戦術のテストを命令してきた。全くもって不愉快かつ理不尽な事態。

しかも、私が提出した書類を上層部は選考し、尚且つ強く推薦した。つまり、これに失敗しようものなら態々推薦した彼らの顔に泥を塗る事になり、私の出世街道が奈落へと方向転換。最前線での酷使が決定づけられる。いや、『それだけ』ならまだ良い。最悪の場合は比喩的ではなく、物理的に首が飛んでしまう。

最早私に残された道は、成功させて名誉と昇進を得るしかない。

本当に……どうしてこうなった？

私は何度目かも忘れた疑問符を脳内で再生させ、この世の理不尽を嘆く。

そして私をこの世界へと追いやった神モドキを心の底から呪う。

そもそも。こうなった根本的な原因は、あの神モドキだ。

奴がこの世界に私を転生させなければこんな危険な目に合わなかった筈。

おのれ神モドキ。

いや、奴には神モドキという名も不適切だ。ならば別な名前、そうだ謎の存在Xで十分。奴の名は存在Xだ。うんそれで行こう。

前世で仲が良かった同僚にネーミングセンスが上司と同じと苦言されていた自分であるが、今回は中々良い名を決められた。恐らく、線路に突き落とされた挙句、電車にはねられて死んだ元上司もあの世で絶賛しているに違いない。

そう考えると『極僅か』だが、ヤル気が出るというもの。

早く奴を殺さなくてはならない。

私の未来と平穩の為にも。

よし、覚悟は決まったから、今は兎に角、現地の指揮官に挨拶しなければいかん。私の様な新参者がでかい口叩いて「新戦術試す為に来ました」なんて言えないうえ、言った瞬間全てが終わる。だから此処は友好的にそして愛国心を持った感じで接そうではないか。

無論、ユーモアある上司の場合は、それ相応のジョークを返さなければならぬ。全く社交辞令とは前世で慣れているとはいえ難しいものだ。

しかし、何事も初めが肝心だ。

私は前世の社会人としての経験をフル活用し司令官へとコネを作る。そうだ。だから先ずは、基本を思い出せ。

営業の基本……真面目な態度と柔軟な思想、そして笑顔だ。

ラバウル基地 特務司令室

その部屋は、薄暗く、何処か陰湿だった。

日中にも関わらず、窓を閉め切り、外から入ってくる光はカーテンから漏れ入る僅かな量のみ。

また、室内は、特務司令室の主が吸う煙草により、煙が充満。独特の匂いと煙さを感じさせ、この場に嫌煙家が居れば、直ぐに部屋から飛び出るか、部屋の窓を全開にするかのどちらかであろう。

そんな部屋の主は煙草の煙を曇らせながら、書類確認や判を押す作業を行っている。傍らには、艦娘の秘書つまり、秘書艦と呼ばれる者が書類整理を行い、時には自分の上官たる司令にお茶などを入れて気遣っていた。

「司令、今村司令官殿より書類です」

「うむ」

彼の秘書官たる青い制服に身を包んだ艦娘、重巡洋艦の高雄は先程送られてきた書類を己が上司へと手早く渡す。

傍から見れば理想の上司と部下な関係に見える、事実、即座に受け取った書類へ目を渡し、素早く判を押す様子を見ると正に阿吽の呼吸を感じさせる。

しばらくそうした時間が続くと唐突にドアをノックする音が室内に響く。

書類に視線を向けたまま司令は単純に入室を許可すると「失礼します」と男性の声が聞こえ室内へと入ってきた。

服装を見る限り衛兵の類に見え、彼の傍らには制服姿の艦娘、時雨が佇む。

「時雨一等水兵をお連れしました」

「そうか、ご苦労」

「ハッ！ それでは、失礼いたしました！」

簡単なやり取り後、衛兵は直ぐに退室し、残されたのは時雨と司令、そして秘書艦たる高雄のみとなった。

一呼吸おいて時雨が見事なまでの海軍式敬礼を上官へと向け、口を開く。

「本日付で着任いたしました。一等水兵の時雨です！」

「長旅ご苦労。私がラバウル第2艦娘艦隊の司令、長石だ。よろしく頼むよ」

気怠そうな言葉を返す司令だが、その瞳はずっと時雨に向けられている。

それは何処か人を見比べる様な視線で、もし、社会人経験が多い人間なら何となく意図を察する事ができるであろう。

要するに彼は、彼女をどういう人種か知ろうとしていたのだ。

新戦術や戦争の概要を変えうる可能性を秘めたレポートについて彼は上層部より、色々聞かされた。しかし、提案者の事については極秘で知ることが出来ない。

確かにそうである。

もしこの情報が他国へ漏れた場合、一番狙われるのは彼女だ。そう考えると上層部の案は悪くないと言える。

その為、正確な情報が司令に届いたのは彼女が着任する3日前で、結果、書類確認時間の確保に苦労する事となったが。

ふと、彼に遊び心が芽生えた。

何の事は無い、単なる冗談の一種で、目の前にいる艦娘はどう返すか気になったのだ。要はその返しで、彼女がどういう性格かを知ろうという魂胆である。

「それにしても君は優秀だと聞いているが、さすがに最初の配属が最前線（ここ）では大変だろう。もし良ければ、兵士としてではなく、清掃員に転属願いで書こうかね？」

明らかな相手を馬鹿にした発言。

本来この手の言葉を例え部下だろうが、投げかける事は余りよろしくない。事実、彼の隣に控えている秘書艦は、横目で己の上官に鋭い視線を向けていた。

しかし、彼は、秘書艦の反応を無視し、返答を待つ。

理不尽な言葉に激怒するか。

上官の発言を真に受け、悲しむ。

それとも呆れる表情を見せる。

一番ベターな反応として社交辞令に終わるか……。

彼は主にこれのどれかだと予想し、僅かな確率で喜んで雑用を受けるが残っていた。同種艦の性格は大体一緒だ。

他の時雨達にあつた事がある彼からすれば性格を導く事など造作もない。しかし、あれだけのレポートを作成する知力と優秀な訓練成績。そして先方から聞いた話で、大変好戦的だと耳にした。ならば僅かな確率だが違う答えを出すのではと予想してしまう。結果、彼の予想は『ある意味』的中する。

「お気持ちは大変うれしいのですが閣下、私は新戦術の試験的導入のために此処へと配属されました。申し訳ありませんが、お断りいたします」

決められた様な真面目な回答。

これには期待した自分が馬鹿だったか。と、司令は自らの行動に呆れてしまう。彼女へ投げかけた視線を一度書類へと戻し、ばれない様に少しのため息を付く。

もう、これで彼女がどういふ存在か、ある程度分かった。恐らく、彼女は凄く真面目

で尚且つ普通に社交辞令もこなす艦娘だ。そう考えると彼女は前線ではなく後方向きな人物であろう。

ハツキリ言つて、最前線には合わない。

そう判断した彼は今後において彼女の立ち位置と作戦終了後の配属先について思案する。

脳内にあるのは、作戦終了後の昇進を利用して彼女を後方へと下げるといふものだ。

普通の戦意が高く、好戦的な司令ならこんな考えは浮かばないが、彼は人それぞれには適正というモノが存在する考える人物で、適正に應じて仕事を振り分ける事が得意であつた。よつて、彼は、彼女の反応と優れた頭脳は前線ではなく、後方——特に参謀本部——向きと判断。明確な未来予想図を描く。

今後の彼女についてある程度思考を纏めた彼は、先ずは先の発言について謝罪せねばと再び顔を上げて彼女を見た瞬間。

空気が一変する。

彼女は笑つていた。

綺麗な、純粋な笑顔ではない。

口元を吊り上げ、ニタニタと楽しむような狂気を感じさせるような笑顔。

なんだ、これは。

誰だ。こいつは。

此奴は……なんだ？

先程まで真面目な表情を見せていた彼女ではなく、まるで悪魔を思わせる笑顔を見せながら彼女は彼を見ていた。

心底楽しそうな表情を見た彼は思わず煙草をくわえた状態で固まってしまった。

ふと横目で自分の秘書艦を確認すると彼女も同様に目の前の悪魔に恐れを抱き、表情を強張らせている。もし、この時より注意深く見れば、高尾の目に涙を滲ませている事が確認できたであろう。それだけ彼女もそして司令も目の前に居るバケモノに空気を飲まれていたのだ。

「閣下、大丈夫です。実は私、既にごみ処理を任された身です。ですので、閣下の発言も間違いではありませんよ」

透き通るような声で発言した時雨（バケモノ）。

一瞬二人は、彼女が何を言っているのか分からなかった。しかし次の発言で理解する。

「深海棲艦を処理する事が我々人類の使命。人類に黄金の時代を与える為に私は処理し続けましょう。そして奴らの死体で山を築いてみせましょう」

笑顔絶やさず発する言葉は正に狂気。

彼女は敵を、深海棲艦をゴミと断じた。我々を追い詰め現在戦争している相手を。

敵を罵倒するのは別して珍しい事ではない。兵士の中には憎しみを持って奴らを見ている者が多くいる。そして全滅させる意思を持つ。

また、新兵の中には敵を侮る事も多くあり、着任早々威勢の良い声で話す様子が見られた。

だが、彼女は違う。

目の前に立つバケモノは本当にそう思っているのだ。

深海棲艦をただの塵芥と。

それは油断や慢心からではない。

人が部屋に落ちているゴミを汚く思い、片づける事と同じ感覚。

「……失礼した一等水兵。今後の活躍に期待するよ」

何とか声を絞り出した司令は、二言程言葉を交わした後、彼女へ退室を促す。

時雨が司令室を出て行った後、何かが床へと落ちる軽くも重量を感じるような音が響く。彼が横へ向くと秘書艦の高雄がその場にへたり込んでおり、両手で肩を抱き、まるで寒さに耐えるかの様に震えていた。

普通なら無様な姿を見せる高雄に軽い説教をするのだが、司令自身もそんな気分は起きない。

あれが後方勤務向き？

冗談ではない。あれは戦争を拡大させる戦争狂い（ウォーモンガー）だ。

少し前まで後方の参謀関係へ推薦しようとした自分を殴りたくなる。

奴を参謀の下手な職につけて見ろ。深海棲艦を殲滅させるだけでなく、他国に戦争を吹っかけるだろう。

様々な思考が脳内を駆け巡り、彼は表情を強張らせた。

結果からすると彼が藪をつついて出たのは蛇ではなく、猛獣であり、しかも知性のあつる猛獣だ。

下手すると此方が食われる。

そんな危険な奴が前線に、しかも自分の艦隊へと配属されると考えたら悩まずにはいられない。

それに優秀な点も厄介であり、無能ならば色々訳を付けて後方の戦争とは関係ない閑職へと飛ばすのだが、彼女は大変優秀で、上層部も注目している。結論からして打つ手なし。

此処まで思案した彼は、唾えたまま短くなっていた煙草を灰皿へと押し付け、大きなため息を付く。

「全く、貧乏くじは引きたくないものだ……高雄」

「は、はいー」

ようやく立ち直った秘書艦に話しかけると、彼は出来る限りの策を模索し、時雨の下

へ着ける護衛の兵に一部手を加える事とした。

「そろそろ出撃中の第一大隊所属の第三小隊が戻ってくる。そしたら小隊長を私の下へ呼んでほしい」

「了解しました」

敬礼後、直ぐに退室する彼女をみて司令は新しい煙草に火を点ける。

そして、窓のカーテンを開け、夕日が差し込むラバウル基地を眺めながら煙草の煙を吐き出す。その姿は何処か疲れ切ったもので、少し前まで仕事に専念していた様子は最早感じられない。

「この戦争……更に荒れるな」

血の様に赤い夕陽が未来を暗示してか、彼は窓際でポツリと呟く。

この予想が外れて欲しいと思いつながら。

第三話「急展開」

有能な怠け者は司令官に、有能な働き者は参謀にせよ。

無能な怠け者は、連絡将校か下級兵士にすべし。

無能な働き者は、すぐに銃殺刑に処せ。

——ヨハネス・フリードリヒ・レオポルト・フォン・ゼークト 他諸説あり——

1940年 2月 ラバウル—ソロモン諸島間海域

赤い夕陽が海へと沈んでいく。

それは戦場に散った者達の命を代弁するような光景だった。

『——こっツ——!?!……だッい——敵の——ツ!』

海面に反射する光が太陽が沈むと同時にどんどん小さくなり、辺りに闇が浸食する。さながら闇が光を食べていく。そんな悍ましきを感じさせる光景だ。

『こちツ——第九——!・敵への——至急!!——』

だが、闇が広がっていく海に光源が幾つも広がっている。

それらは編隊や隊列を組み、時折轟音と発砲炎を発しながら別な光源へと殺到して行く。

上空から見ればまるで祭りの会場を思わせる光景だが、実際はもつと血なまぐさく悲惨なものだ。

『こちら第九艦娘艦隊！ 敵からの攻撃が激しくこれ以上は持たない。至急救援を！』
『機甲水上部隊の損耗率が2割を超えた！ 上空の援護は何をやっている!?!』
『艦娘防空艦隊より各隊へ、現在制空権の維持で精一杯です。援護は出来ません!』
『こちら第八海兵大隊。我が隊の第三、第四中隊が壊滅！ 後退の許可を!』
『上層部め、何が半年の間に敵進行は無いだ!』

通信から流れる悲鳴と怒号。

ある者は味方へ懇願し、ある者は戸惑いの声を上げ、またある者は敵や上層部へ罵声を浴びせる。

無線機から流れる状況から現在は人類軍が不利なのは明らか。

必死の抵抗を見せるも幾つかの作戦指揮を発令する為の艦艇が敵の攻撃で沈められ、統率を欠いた行動を取らざるを得ない状況だ。

残った作戦指揮艦艇も出来る限り事態回復に努めるが、直ぐに打開策が出る筈もない。

彼らは、言葉が意味する通り正に『決死』の防衛を強いられていた。

事の発端はとある偵察隊が敵深海棲艦の大攻勢を感知した事で始まる。数にして深海棲艦約八十個艦隊。

つまり480隻にも上る深海棲艦が一気に押し寄せて来たのだ。

無論報告を受けたラバウル総司令部は直ちに陸海両軍による防衛線を展開。ラバウルとソロモン諸島間の海域に防衛線を構築した。

尤も防衛線と言つても塹壕を掘つたり、陣地を造る訳でなく各種艦船や航空機による後方支援と制空権の確保。そして前線において活用する陸軍と海軍の水歩兵部隊及び艦娘艦隊による防衛範囲という意味合いが強い。

しかし、急な攻勢の為か十分な戦力が確保出来ず、現在は防衛線を下げつつ遅延作戦を実施。体制が整い次第、意図的に防衛線に穴をあけてそこへと誘導。そして合流部隊と共に包囲殲滅という作戦である。

言うのは容易いが実際に行うとなると難しい。

特に制空権は航空機の数は敵が圧倒的に多い為、維持に持つていくまでに多大な労力を労してしまいその間に味方部隊が想定よりも被害を受けてしまっていた。

弁明するなら艦娘の航空部隊や基地妖精航空隊、そして陸軍航空隊も死力を尽くしたのだ。だが、相手は航空機の数が此方よりも遥かに多く、尚且つ対空砲も激しい。幾ら

性能や練度が良くても戦力差1対2では厳しいもの。逆に制空権の喪失を防いだ事を考えると彼らの働きは十二分に果たしたと言えるだろう。

そもそも深海大戦において航空戦が有利だったのは深海棲艦が未だ航空戦力を有していなかった初期だけで、航空機に対応しだすと人類の勢力圏縮小が大きく進んだ。艦娘登場後も数的有利は深海棲艦側の為、結局のところ人類側は航空戦に至っては防衛戦一遍となったのだ。

つまり、彼らは爆撃や雷撃は二次で先ずは戦闘機による敵戦闘機及び攻撃隊の排除を最優先事項と決めた。

この方針は攻勢作戦でも変わらず、先ずは敵航空隊の排除を重点としている。そして余裕があれば爆撃機や雷撃機を飛ばし、敵への嫌がらせ程度を行う。それがこの世界における航空機の運用方法である。

より分かり易く説明すると、艦載機や基地航空隊は八割から九割が戦闘機で残りが攻撃機と偵察機という内情だ。

この問題は後にとある駆逐艦娘が提出したレポートに活用意見が書かれていた為、それを参考として一応の解決を見込む。

因みに妖精ではなく人類が率いる航空機は戦闘機と爆撃機が主体で、雷撃隊は一部部

隊を除いて解体されていた。

理由は、通常航空機の魚雷では敵にすぐ見つかってしまううえ普通の艦船よりも小さな深海棲艦相手では命中率が非常に悪いのだ。また、魚雷のコストも考えた結果他に戦力を振り分けた方が良いと判断。雷撃隊は大体を解体されて、残った部隊も本土による演習部隊のみと化す。

尚、不要と判断されながらも僅かながら部隊として残っている理由は、技術の断絶を防ぐ為と戦後を見据えてであった。

話しを戻すとつまり航空機による援護が期待できない現状では、自力で何とか対処する他ない。

幸いなのが制空権を維持している為、敵からの空襲を気にしなくて済む点である。

しかし、現状では何の慰めにもならなく最早増援到着までに戦線の維持は不可能なのは誰が見ても明らかだ。

誰もが防衛線を放棄しての即時の撤退を考えた……その時。

『こちらラバウル第一特務混合部隊、本隊より先行して救援に来た』

透き通るようなだが力強くも感じる少女の声が戦場に響く。

初めは聞きなれない部隊名に各部隊や艦隊が疑問と困惑を感じさせるも、次の瞬間に敵艦隊群へと無数の砲弾が着弾、混乱に乗じて側面から攻撃する部隊を目の当たりにしたら皆が自然と口にする。

「やった。友軍だ、友軍が来てくれた！」

待ちに待った友軍とあつてか少数であったとしても戦場に歓声が広がる。

それらの期待に応える様に援軍に来た彼女らもまた素早く部隊を展開、隙を見せずに戦闘を行う。

「H.Q、こちらレイン01。敵部隊への有効打を確認。しかしながら遠弾多数を認める。

よつて誤差修正——15をされたしover」

『こちら支援艦……失礼、こちらHQ了解した。これより修正射撃を開始する。out』

紺に白のラインが入った制服を着た黒髪の艦娘——時雨が、耳に掛けた無線機へと声を投げ掛けると通信相手から不慣れながらも返事が返ってきた。内容からして先程の砲撃に対するものであるが、先方は何処か戸惑いがちな点を見ると受け答えに慣れていない様だ。

これは、通信での効率化を図る為、時雨が提案した通話方法を試験的ながら採用したためである。訓練を繰り返し、既に問題ない筈だが矢張り昔の癖が抜けていないのが見受けられた。

尤も時雨は気にする様子も無く淡々と業務をこなしていく。

周りからしたらその落差にどちらが年上か分からないが彼女としては一々気にして貴重な時間を無駄にしたくないという理由に過ぎない。

そうこうしている内に座標修正された支援砲撃が敵へと降り注ぎ多量の水柱と爆炎を巻き起こす。

その中心に居る敵は正確さを増した砲撃の雨に浮き足立ち、陣形が乱れ始める。

本来ならば混乱した味方を支援する為に他の艦隊が支援するのだが、時雨達の到着や味方からの砲撃に士気を高くした各人類側部隊が陣形を立て直し一時的な攻勢を実施。急な反撃に深海棲艦達は守りを固める為、砲撃に曝される味方への支援が出来ないでいた。

「各員、このまま100前進。その後魚雷攻撃および砲撃を行いつつ味方部隊が受ける攻撃を此方へ誘引する。海兵隊はこの場にて砲撃射撃を続けよ！」

「了解！」

時雨の指示に従い各々行動を開始。

彼女達と行動を共にしていた一個分隊の水歩兵が砲兵によって混乱する敵に更なる追撃をし、部隊から分化した時雨含む六名の艦娘は味方部隊支援及び敵からの攻撃誘引。つまり囷役を行う。

彼女達の目的は味方の防衛線を準備が出来次第下げる為の支援である。

要は防衛線を崩壊させないようにするためのダメ押し、攻勢に出ての敵勢力殲滅ではない。

だからこそ自らが囷となり味方部隊が立て直せる環境を作り出したのだ。

事実各部隊のCP（司令部）は混乱から脱し、各部隊への指示及び情報伝達に再び取り組む。

因みに、時雨の部隊はHQ（本部）直属であり、尚且つ砲撃艦隊に前線本部が設けられている為、直接HQと通信している。だからこそ混乱する事無く、尚且つ迅速な情報伝達ができたと言えた。

流れが完全に変わり、このまま行けば作戦を遂行できるだろう。

余り時間を掛けずに終わらせられる可能性に時雨自身、笑みを浮かべ機嫌を良くする。彼女からしたら余計な時間は食いたくないので、さっさと仕事を終わらせて定時帰宅をしたい感覚だ。

しかし……

『おらいくぜえ！』

『深雪様の力見せてやる！』

黒い服装と眼帯、そして特徴的な形をした刀を装備した時雨よりも年上な少女——天龍と青と白を基調としたセーラー服姿の活発的な幼さ残る少女——深雪が突出しだす。

「どうやら敵への更なる攻撃を敢行すべく、行動したようだが、部下の勝手な行動に時雨は思わず眉を顰め、両名へと通信を開く。

「戻れ。天龍、深雪両二等水兵。我々の任務は味方が陣形を完全に整えるまでの支援だ』『しゃらくせえ。敵を叩けるときに叩いちまった方が良いだろうよ!』

『あたしも賛成だぜ! 深海棲艦はまだ混乱中だ!』

「チツ……命令だ。とつとに戻れ!」

怒気を発し、両名へと再度命令するが、二人はそれを無視。

流星に砲撃地点への突入はしなかったが、それでも近場の深海棲艦へと近接戦闘を仕掛けた為そちらへ攻撃を行う味方部隊の邪魔となった。

行き成りの出来事に時雨の隣に控えていた紫色の髪と白シャツ、ブレザーが特徴的な陽炎型駆逐艦、萩風が狼狽し攻撃の手を止めてしまう。

「し、時雨水兵長……一体どうすれば……ひっ?!

指示を仰ぐ為、隣の上官へと声を掛けた萩風だが時雨の顔を見た瞬間に思わず悲鳴を

上げる。

その顔には怒りが渦巻いていた。

唯の怒りではない。普通、人が怒る時はその自分物に対して行動や個人を表す。要は同等的存在への怒りだ。

しかし、今時雨が浮かべている怒りは違う。

まるで家畜が咬みついてきた時に浮かべる表情と言ったら分かるだろうか。つまりこの時、彼女の中で二人に対する評価が決まった。

一時間後、無事に援軍本隊が到着。

深海棲艦誘引及び包囲殲滅に成功する。

そして時雨達の部隊も全員無事に帰還。

多くの戦果を挙げる事ができ、その名を轟かせるのであった。

様々な問題を残して。

海戦から約一か月前
1940年 1月 ラバウル基地演習場。

命令というものはとても重要だ。

民間企業は勿論軍事においても重要な要素で、上官からの命令無き軍隊などテロリスト同然。

実際に軍隊では命令を聞く事を何よりも重要と教育される。

例えば新兵に施す教育で最初に経験することは命令を聞かせる各種行動だ。朝の起床訓練が正にそれで規律や命令、理不尽さを教え込む第一段階。起床出来ない者や遅れて点呼に参加した者、はたまた反抗的な者。それら全てに罰則を与え、軍隊とはどういう場所か脳と体に教え込む。

そうする事で、立場の重要さを理解させ同時に感情のコントロールを身に着けるのだ。

では、命令や規律を疎かにした結果は？

火を見るより明らか。

反抗的な態度は部隊の士気を落とさせ、任務に支障をきたす。否、それだけではない。場合によっては、本人や部隊どころか他部隊に対しても被害を与える可能性があるのだ。

戦場で賭けるのは自分の命だけでない。

どうも駆逐艦娘、時雨上等水兵です。

この度晴れて昇進いたしました。

ラバウルへと着任して二か月、やった事は上から提示された特別訓練と水歩兵の皆様と共に行った近海哨戒任務のみ。戦果は駆逐イ級やホ級、時にはり級を含め数十隻沈めただけで糞にも役立っていません。

まだ前線で余り活躍していないにも関わらず、一艦娘に対してこの高待遇。

上等水兵に成るには普通、一等水兵で実績を積み、『最短で』一年以上経つてからの昇進となる。『普通』、一等水兵に成りたての私成って良い階級では絶対ない。

恐らく上は余程私に借りを作りたいのでしょう。

辞令内容には『貴官が提出したレポートの戦術及び発案した新装備の中で直ぐに効果の発揮出来たものの戦果を評して昇進と致す』と書かれていたが、読んだ後に中央から態々来た派遣員が『今後行われる作戦における重要なアドバイザーとして、そして要として、より一層の活躍を期待する』などと御託を並べてきたのです。

受け取った時は、絶対に私を縛る気だと直感し、同時に私の退路はもう塞がれたと確

信しましたよ。

今更ですが。

更に付け加えるなら、臨時艦娘艦隊の旗艦となり、編成終了後は、その実績を評価して無理やり水兵長へと昇進させるそうです。派遣員の前で無様な姿は見せませんでしたが、余りの事に頭痛と眩暈を引き起こしてしまいました。

これも『普通』は、選抜試験を受けて合格しなければいけない階級なのだが……。

それとも艦娘とは、数が少ない分高待遇かつ早期昇進が実現可能な兵科なのか。

いや、無いな。

事実、一年以上艦娘やって未だに昇進できていない艦娘も居ましたから私が特別なのでしょうか。

認めたくないですが。

それにしても二階級特進の先払いとは、死んで来いという暗示だろうか。

迷信やフラグというものは信じない性質だが途轍もなく不吉である。

あと、昇進や上からの覚えが良い事は嬉しいがこの様な過剰な期待や処置は後々自分の首を絞める原因となるので控えてもらいたい。

全く、考えるだけで頭どころか胃も痛い。

頭痛薬と正露丸が常備薬になりそうだ。

尚、豆知識だが日本海軍において上等水兵や水兵長という階級が成立するのは1942年からであり、本来なら現時点で存在しない階級だ。しかし、この世界はなんと他の階級名称変更も含め今から約四年前の1935年に改定。つまり史実より七年も早い。これは、深海棲艦との戦争で航空科や整備科等の必要性が増した事と、陸軍との連携強化において余りに違う呼称は現場に混乱を生む為に変えられたらしい。

大戦における歴史変化は意外なところで起こる様だ。

尤も、地球外？生命体と戦争やっている時点で史実も糞も無いが。

さて、悩ましい無駄話は此処までにして話を戻しましょう。

皆さんは上からの命令や規則をどう思いますか。

人が行動するうえで規則とは、それはそれはとても大切なもので御座います。

私も前世において新人社員時代は規則の大切さを強く実感しました。

新卒は右も左も分からない赤子同前。事前に規則を分かっているも知らず知らずの内に破らないか肝を冷やしつ放しでしたよ。

そしてそれを未然に防ぐためにも上の方は命令して下さいました。

その甲斐あつて遅刻や無断欠席を繰り返す様な無能には成りませんでしたよ。

え、命令や規則を守らない無能者はどうなったかつて？

私の死んだ上司に聞いてください。

結論からして上位者からの命令及び規則とは集団生活、特に社会を生きていくうえで重要かつ必要なものなのです。だからこそ、私は自分も含め命令や規則は生命にかかわる時を除き、破りません。

潜る事は暫しありますがね。

よって……。

「貴様、いったい何のつもりだ。何故あの時突撃した！ 誰が命令した。貴様の耳は飾りか？ それとも脳みそが空か！ 両方か!？」

訓練後の反省会にて大きな声を張り上げ、目の前に並ぶ新兵二人に説教をする。それが今私の行っている仕事だ。

まるでフルメタルなジャケットを思わせる発言だが少し待つてほしい。私も好きでこんな事をしている訳では無いのだ。

何せ上からの辞令で旗艦に成った事は良いが配属された艦娘が二等水兵三名と一等水兵二名、つまり未だに卒業に値しない者達と経験が私と同レベルな層ばかりだ。

初め艦隊の編成表を見た時は目を疑い、続いて人事部の正気を疑いましたよ。

仮に百歩譲って二人の一等水兵はまだ良い。なんせ少なくとも軍隊としての教育を済まし、尚且つ実戦経験有りだから。

だが問題は残り三名の新兵以下共だ。

私でさえ実戦経験僅か一か月ちよつとな新兵なのに教育課程を修了していない新兵以下の者達を普通部下に就けるか？

確かに今回の作戦は新しい戦術を試す為、下手な知識が無い方が良いかもしれないが限度というものがある。何も末端まで無知で経験足らずある必要は無い。

書類確認後、私は直ぐに理由を伺ったが帰ってきた返答が。

『三名は実戦早期希望者であり、訓練では問題は見られなかった』

であった。

聞いた瞬間頭を抱えなくなった自分は悪くない筈だ。

実戦早期希望制度。

書いている字の通り訓練艦娘でも希望と一定以上の練度を示せば実戦へ早期に参加できる鬼畜な制度である。

私が艦娘学校に在籍していた時も同期が何人か応募し、早期に実戦へと駆り出されていた。その時に見た合格通知が来た奴らの反応は今でも理解不能だが。

この狂気を感じさせる制度は元々、艦娘の研修的な役割で三か月の実戦参加後、再び艦娘学校へと訓練艦として戻す。要は、実戦で学んだ事を他の訓練艦娘へ教える教官役とする為の制度なのだ。

制定当時でも苦肉の策らしく、前線帰りの教官艦娘が各艦娘学校への訓練供給に間に合わない結果、訓練艦娘を教官役に仕上げるのが目的である。また、これら訓練艦娘が、実戦を経験し、感じた事や不満点をフィードバックして戦術改良を期待しても有るらしい。

無論、前線へ参加したとして実際に参加するのは近海に出没するイ級狩り程度で、尚且つ引率に水歩兵が就く。

前線からすれば定の良い哨戒員であり正に人的資源が枯渇しかけている故に出来た制度と言えた。

しかし、人とは慣れるもので特に日本人は辛いことがあっても慣れてしまうと気にしない事が多い。

例えるならば企業に勤めている時、上から無茶な要求を受けたとする。要求する側は少し厳しいギリギリのラインな仕事を社員に押し付け、社員も熟すには難しいと判断しつつも仕事を行う。その場合、仮に仕事を完遂してしまうと上は大丈夫だと思いきや更に仕事を増やす。

つまり上の要求を満たし更に制度に上が慣れた結果、本人の希望があれば最前線でも配備可能という糞な制度に成り下がったのだ。

元々ゴミ制度だが、ゴミが糞にランクダウンするだけである。

無論、希望者にも美味い話があり卒業後の昇進と旗艦任命が早くなるらしい。また、配属先によつては、艦娘家族の手厚い生活支援や自分に対する手当も付く。

天涯孤独な私から見ればハイリスク&ローリターン極まりないが。

だが、家族や自分の生活苦を理由に志願した奴はまだ良い。

何せそういう奴は生き残る事中心で考えて無茶は（志願した時点で無茶極まりないが）しない筈だ。

しかし、愛国精神に溢れ、英雄願望の奴が来るともう手が付けられん。

そして悪い出来事は重なるもので私の艦隊に來た三名の内二名が愛国精神溢れ、英雄願望を強く抱く馬鹿だった。

実際に私との演習対決において旗艦役の命令を無視して突撃を行うのはまだ序の口、私に対して反抗的な態度を良く取るだけで無く、口の訊き方も悪い。挙句の果てに上官に対する命令無視を何度かやらした。

全く、私と同期の天龍と深雪は私の言うことを聞いてくれたのに何だこの格差。

本来は厳しい精神面と能力面での審査を受けて配属させられるのだが、人は苦しい時

ほど愛国心と忠誠心溢れる人物に好感を覚えるらしく、恐らくこいつらの担当教官が感化されやすい奴だったのだろう。

強制送還するように何度も人事部へ申請したが通らず、頭痛の種だ。

因みに此処まで問題を起こして何故か強制送還を受理されない事に疑問を持ち、色々調べるとラバウルの海軍人事担当は馬鹿共を推薦した教官とは親友と判明、尚且つ互いに便宜を図ることが暫し見られるらしい。

腐っている所は本当に腐ってるなと改めて実感した。

軍隊生活はゴツコ遊びでは無いのだぞ。

話を戻すが。

確かに……確かに我々が今作戦におけるポジションは砲撃要請任務及び遊撃な為、大規模な兵を有するものでは無い。しかし、だからと言ってこれは無いだろう。

戦場において絶対というものは存在しない。

前線には出過ぎないが砲撃支援の要請テストと遊撃は大変危険を伴う。もし、敵が此

方の役割を理解すれば最重要目標として一気に押し寄せてくる。

そんな事態を防ぐ為、高練度とは言わんがせめて一定の練度を持つ実戦経験者が必要なのだ。しかし、現実是非情で、実戦経験者どころか訓練兵を派遣してくる始末。明らかに盾以外の利用価値が無い。

事実、着任後に私と彼女らで1対5の演習を行ったが先に述べた馬鹿どもの突撃もあり、私を小破所か被弾すらさせず彼女達は全滅判定となった。

不味い。

実に不味い状況だ。

既に各訓練予定は最終段階に入らねばならぬ。

今から新しい人員を要請しても作戦訓練に間に合わないうえ意見が通らない可能性が高いだろう。

ならば残された手段は一つ。

彼女達に対する徹底的な教育及び訓練だ。

奴らを最前線で使える練度まで引き上げるしかない。

最早手段は選べん。

早速訓練の続きと程々危険な哨戒任務をこなし、練度を上げる。

本来なら雪山での実戦形式演習を行い尋問訓練等も並行して実施したかったが、此処は前線な為そんな事は不可能。

仕方なく先に挙げた方法で鍛える事にした。

で、最初に怒鳴っていたのは相も変わらず自分勝手な行動を叱咤しているに過ぎない。

以前に比べ普段の態度は改善したが思春期特有の反応なのか良く咬みつく。

後方に下げようとすれば『戦わせろ！』と叫び私を睨む。

本土への強制送還も二人そろって『納得できない』の一点張り。

私だって毎日馬鹿二人の為に怒鳴っていたら疲れるから嫌だ。

だが此処は我慢しろ時雨。三か月だ。

三か月我慢すれば奴らは出ていく。

我慢しろ時雨。全てはキャリアの為である。

そう、全ては私の昇進と後方勤務の為。

そして存在Xを殺すために。

そんな感じで続けていた訓練だが、開始一か月で事態は思わぬ方向へと向かう。

それは何時も通り新兵共を鍛えようとしていた時だ。

宿舎前に集合し整列した奴らに今日の訓練内容を告げている最中。

基地全体にサイレンがけたたましく鳴り響く。

そして放送で告げられる敵大規模侵攻。

各部隊や艦隊が出撃準備を整える中、私は上官に呼ばれ命令を受ける。

曰く、本隊で出撃できる者達はまだ時間がかかる。だが、貴官の部隊は洋上での訓練の為、既に大半の準備が完了しており砲撃支援艦含め早期に出撃可能。よって準備が終わり次第出撃せよ。

という内容だった。

……馬鹿な。

あんなヒヨッコ共に大規模戦闘に参加だと？

冗談ではない！

確かに大規模戦闘での支援砲撃の有効性を試すまたと無いチャンスだが不安材料が多すぎる！

無論抗議した。

彼らの練度では未だ満足な戦闘は無理だと。

しかし残念ながら我々人類に残された選択は余りにも少ない。

どうやら敵の数が多すぎて最早余裕が無い状態。

つまり、出せるものは出せ状態だ。

こうなるともう私の力ではどうにもならん。

仕方なく出撃し、海上での陸式砲撃活用を試す事となった。

新兵共は妙にウキウキしていたが私には到底理解できんし、したくもない。

まあ良い。

実戦はある程度済ましたから新兵共も変な邪魔はしない筈だ。場合によっては盾として役立つてもらおう。

時間は戻り現在。

先の戦闘で少しでも新兵（特に二人）を期待した私が馬鹿だった。

恐らく興奮して突っ込んだのだろうが、命令無視して自分勝手に戦う部下はもういらん。盾としても使えないのなら本土へ早急に必ず、断固として強制送還させるべし。

しかし、ラバウル海軍人事部はこんな事態になつても友人に義理立てするらしい。奴らの風紀レベルは恐らく史実の空母加賀位悪いのだろう。

事実、ギンバイが偶にあり他部隊におやつを取られたと萩風が私に泣き付いて来た時はどう反応すれば良いか困った。

こんな時、不正や汚職の少ない陸軍側の人事部が羨ましく思う。

やはり今村中將は優秀だ。それに比べ海軍ときたら……。

ならば此方にも考えがある。

私としても将来『使えるかもしれない』駒を無駄にするのは嫌だがこれ以上は効率やコスト的に見てあの二人は邪魔過ぎた。

怨むなら強制送還の判断をしなかつた人事部と無能な自分達を怨め。

同時刻 大日本帝国 首都東京 海軍省

海軍省にある会議室。

各種調度品が置かれ高級感溢れる長テーブルと椅子そして照明、普通の会議室よりも豪華な作りとなっていた。

しかし、会議に参加している者達にそれを気にするものは誰一人居ない。それぞれろか全員が渋い顔をして目の前に置かれた又は手に取った資料を睨むように読んでいる。

中には資料の紙を破かんばかり力で握りしめつつ読んでいる者も居た。

敵深海棲艦、北方方面及び東南方面ニオイテ大規模ナ攻勢ヲ実施セリ

前線よりもたらされた報告書にはこう書かれ各種被害状況や敵の規模、そして今後における戦線推移の変動について記載されている。その内容は、どれもこれもが彼らを悩ませる内容ばかりで空気の悪さを感じさせる原因だ。

「件の作戦に投入予定だった奇襲艦隊が大規模な損害を受け壊滅か……轟沈数と損傷数が馬鹿にならない。これでは作戦は不可能だ」

「しかし、既に準備は八割方完了している。それに陸軍との調整も済んでいる中で行き成りの中止では……」

「物資の移送や艦隊等の移動で貴重な燃料を消費している状況で中止などできるか!?!」
「そうだ! 何もせず中止など出来ん!」

彼らの話し合う内容は先の敵進行による被害確認及びそれによる作戦への影響である。

敵の大規模攻勢は局地的に見れば人類側の勝利だが大局からすると敗北と言えた。

本来なら敵への侵攻作戦を実施しなければならぬ時期に敵が進行した為、泊地攻略の為に必要な戦力を削られてしまう。更に付け加えるなら作戦に重要な役割を齎す艦娘艦隊が壊滅したのだから目も当てられない。

奇襲作戦専門の訓練を施した者達が居なくなり、作戦が実行不可能。新たな部隊で再訓練しようにも貴重な艦娘戦力抽出及び訓練期間を考えると約一年近く延期が必要だ。そんな事をすれば更に多くの物資と戦線調整が必要となる。

もうこの際中止にしてはどうかという意見も出るほどだ。
尤も、此処まで準備して中止するのも大問題だが。

「一先ずこの件は明日の会議へ持ち越す。次の議題は？」

「ハッ！ かの駆逐艦娘が実施した支援砲撃の戦法についてです。この度彼女の率いる部隊がそれによる敵攪乱や友軍支援を実施。敵に大打撃を与えつつ味方損害を抑制したと報告がありました。また、以後は他の部隊でも試すべきと本人の意見です」

進行役の将校が、手持ちの資料を捲りながら報告を済ますと周りの者達は思案した表情となり、それぞれ話し合いを始めた。

「ふむ。従来の砲撃よりも戦果は大きいか……」

「今までの航空機による観測射撃や接近しての砲撃では思ふような戦果は挙げられなかつたからな。航空機では敵に最重要目標として撃ち落とされ、かといつて目視確認距離まで近づくと砲撃を行う艦艇を危険にさらす……そう考えるとこれは、敵に観測主の露見がしにくく、尚且つ前線要請に直ぐ対応できる。正しく理にかなつた戦法だ」

「全く、陸と同じ方法で砲撃支援とは、我々も考えが足りないな」

「仕方あるまい。艦娘や水歩兵は出来て日が浅い。手探りの段階で見つけるしかないのだ」

「そう考えると矢張り件の艦娘は優秀ですな。戦意も高く、部隊の指揮もこなす」

彼らが褒める内容はどれも本人からすれば過剰評価に過ぎないが、上層部は彼女の能力や戦果、そして頭脳を高く評価していた。だからこそ彼女への期待を込めて最大限の支援をしているのだ。

そうして時雨に対して賛否や今後の方針を話し合っていると一人の将官がふと声を漏らす。

「彼女なら或いは……」

「ん、どうした？」

小さくつぶやいた言葉は隣に居た将官に聞こえたらしく、質問すると時雨に関しての資料を見つつ言葉を続ける。

「先の議題で奇襲部隊の再配備について上がったであろう」

「そうだな」

顎に手を当て思案する男は、隣の同意を受け自分の考えを話す。

「彼女に任せてみないか？」

この提案は周りに居た者達にも聞こえたらしく様々な意見が飛び交う。
反対意見としては。

曰く、危険すぎるし彼女のような優秀な人材を態々消費すべきではない。

曰く、彼女自身実戦経験は短い為、却（反）って足手纏いだ。

曰く、新戦法実施に忙しい中で新たな役割を与えるのは本人と現場に混乱をきたす。というものが出た。

逆に賛成意見は。

曰く、そもそも今作戦は彼女のレポートに書かれた内容を元に作成された為、奇襲部隊の行動や重要性も理解している筈。よって彼女ほど向いている人材は居ない。

曰く、ラバウルの海軍人事部からの報告によれば早期実戦希望者兵も既に第一級で使える程練度を高めたらしい。ならば彼女の人材育成能力を駆使して部隊編成を行えば、最小の延期間で済む。

曰く、彼女は好戦的な性格で前線に出たがっていると担当司令より報告がある。ならばどの道自分から志願するだろうと。

多くの意見が出て話し合う事一時間。先程まで騒がしかった会議場は静かになり、意見を纏める事が出来た。

「どうやら決まりのようだな」

会議の行く末を見守っていた人物、海軍総司令官山本五十六は立ち上がり皆へと顔を見渡しながら確認する。

不満そうな者も居るが誰もが賛成に回ったと理解した彼はその場で言い放つ。

「ソロモン諸島攻略作戦における奇襲降下部隊隊長を時雨二等兵曹へ任命。一時的であるが艦娘二個艦隊と水歩兵一小隊を預ける」

戦争は次の段階へ。

第四話 「狂気の祭典」

血を流すより、汗を流す方法を学べ。汗を流しておけば血を流さずに済む

——エルヴィン・ヨハネス・オイゲン・ロンメル——

冷たい風が頬を撫で、私の意識をより鮮明とさせる。

ふと下を向けば流れる雲が見え、その切れ目から太陽に照らされて光を反射する海が見えた。

「綺麗……」

口から漏れ出た言葉に私は、本心は意図せずに出るものだと実感、この素晴らしい光景へ見入りたい気持ちになる。

ああ、こんな穏やかな時間が続けばいいのに。

ああ、どうして時間は止まってくれないのでしょうか。

あああ……どうして。

「おい、萩風二等水兵。どうした早くしろ、貴様が最後だぞ」

どうして私の上官は此処まで鬼に成れるのでしょうか。

私は心の中で上官（鬼）に対して文句を言いますが事態が好転する筈もなく、彼女は先程から催促を繰り返すのみ。

思わず涙目で見つめ返すも飛行士が着る厚手服装の上官は私を睨むだけ。

ああ、神様助けて下さい。

今度から毎日神社をお参りしますし、境内の掃除も致します。

早寝早起きは勿論、色々な雑務も率先してこなします。

お賽銭も多く出しますし、何なら毎日の健康食事も捧げます。

おやつだって我慢……するかもしれません。

だから、だから……。

「やっぱり降下訓練なんて無理ですよおおおおお!?」

「安心しろ。例えパラシュートが開かなくても艦娘なら骨折か中破で済む」

「全然安心できません!」

大きく叫ぶも二等兵曹傭の一言で全てが無駄だと悟る。

ああ、どうしてこうなったのでしょうか。

そんな言葉が脳内をぐるぐると廻り続け、一週間前の出来事を思い起こします。

1940年 2月中旬。ラバウル基地 特務混合部隊待機所

「諸君！ 本土から命令が来た。我々は名誉ある事に敵泊地攻略における奇襲部隊へ選ばれた。これも我々の奮闘が成し得た成果だ！」

壇上に立ち休めの姿勢をしながら宣言する水兵長は皆にそう宣言しました。

彼女の下で働き既に一か月ちよつと。

とても一か月とは思えない程に様々な出来事がありました。が今思うと感慨深いなと思いつつ私は壇上の上に立ちながら声を張り上げる自分の上官——時雨さんへと視線を向けました。

初めて会った時の感想は、他の駆逐艦娘時雨とは違い少し怖い方だなというのが第一印象です。

ですが、多くの活躍や知能を見聞きして私の憧れとなるまでそう時間は掛かりませんでした。

彼女の噂は、艦娘学校でも同様に当時から色々な話を耳にします。

曰く、愛国心溢れる厳しい方である。

曰く、知識に優れており教官を何度も唸らせた。

曰く、卒業後に直ぐ活躍をし、尚且つ敵重巡最速撃沈の偉業者。

曰く、曰く、曰く……。

色々な場所で話された水兵長の伝説は今でも覚えています。

尤も、より詳しい内容は機密らしかったですが流布している内容だけでも凄いものでした。そう考えると本来はどれ程の活躍をしている事か。

初めは違う世界の住人に感じていました。

私の様な平均的、いや事務向き艦娘とは違う。

余りにも雲の上過ぎる為、会えるのなら会ってみたい程度の気持ちで絶対に会いたいという程では無かったです。

そんな時に舞い込んできた実戦早期希望制度。

実家が生活苦な為、私はこの制度を利用しようと前々から考えており迷わず応募しました。ですが、死ぬ気で頑張る程では無く『もし無理だとしたら地道に昇進して家族を助けるしかないかな』という気持ちです。

正にどちらに対しても軽い気持で。

今思うと必死人達にとつては失礼だなと思いました。

まあどちらでも高嶺の花だから諦めていたのかもしれない。

本当にもしかしたらという軽い気持ち。

ですが神様はお気まぐれらしく、私は受かつてしまいました。

最初、合格通知が担当教官から手渡された時は思わず呆然としてしまい続いて歓声を上げたのを良く覚えています。

実戦早期希望制度は私たちの様な貧乏人にとつて大変助かる制度。

家族には政府から支援がありますし私自身手当が付く、そして何より昇進が早いから将来のお給料も増えます。

更に付け加えるなら国の為に今すぐ貢献できる事がとてもうれしく、感謝の気持ちで一杯でした。

私は嬉しさの余り鼻歌を歌いつつ自室へ戻ると、より詳しく内容を知る為に辞令を早く開けて中身を確認する。

文章を上から読み進めていき、そしてとある文字を認識した瞬間に私は思わず目を止めてしまう。

一度辞令から目を離して瞬きを何度もする。

今、すごい文字が見えた。

特に配属先に関するところで。

深呼吸をしてから再び私は視線を戻し、中身を確認すると今度こそ現実だと実感。私は嬉しさと驚きの為に思わず腰を抜かしてしまうのだ。

その内容がなんと。

かの、時雨さんが旗艦を務める艦娘艦隊へ配属となった内容だった。

まさか会うだけでなく部下として私が着任するとは思わなかったのだ。

私は運が良い。

実戦早期希望制度に受かるだけでなく、かの有名な艦娘の下で戦えるのだから。

そこからとんとん拍子で話が進み、私は水兵長の部下となるのです。

ふと振り返ればあれから一か月ちよつと。

長いようであつという間です。

色々な問題もありましたが、今から思い返すとしても為になるばかりな経験でした。

「そうだ萩——作戦——すまんが——」

水兵長は厳しくも優しい方で、私感激だな。

特に甘いものが苦手と言われ、私に間宮券を下さつた時は凄く嬉しかったです。

あれのお蔭で私は甘味が好物になり、健康食よりも甘味命になりました。

まあ、そのせいか周りや他の萩風の方から性格が変わつたと聞かれますが……些細な事です。

「今まで……残念な——しかし——」

そして大規模防衛線を終えてから直ぐにこの辞令。

流石水兵長いや、二等兵曹に昇進して尚且つ奇襲部隊の隊長。

最早伝説です。

こんな場面に私が居るなどまるで場違いですね。

「貴官の——十分——よつて……?」

ですがまだ二か月近くあります。

その期間をもて余さず二等兵曹の役に立つて——。

「二等水兵? 萩風二等水兵!」

「ひゃ、ひゃい!」

「貴様話を聞いていたのか?」

突然大声で話しかけられた為か変な声で返事をしてしまった。

ふと気づくと周りに部隊の人達は居らず、この場に残っているのは私と二等兵曹だけでした。多分、私が昔を思い出している内に話が終わってしまったのでしよう。

「おい、貴様まさか話を聞き流していたでは無かろうな……」

「え!」

二等兵曹からの質問に私は凶星をつかれてしまい変な汗をかいてしまいました。まずい。

これは不味いです。

もし二等兵曹にそんな事ばれたら罰を受ける可能性が。

この前も笑いながら天龍さんや深雪さんに十五時間耐久走を強制していただけないかな恐ろしい内容なのか……。

最悪、間宮券没収!?

あああああ、私の楽しみが、癒しが、二等兵曹に取られる！
そ、それだけは何としても回避しないと。

「いえ、大丈夫です。聞いておりました！」

「……本当か？」

敬礼しつつ質問に答えるも事態は好転しない。

う、何故か凄く睨んでる。

多分私を疑っているのでしょうか。

これはいけない、何とか弁明しないと。

「本当です！ 私は二等兵曹が話された内容を確り記憶しております。唯……」
「唯何だ？」

いけない内容覚えていない。

でもこのまま答えられないと私は罰として間宮券を――。

そうだ！

確か奇襲部隊に選ばれたと話されていた。

ならそれに関する事に違いありません。

ならば……

「に、二等兵曹が仰られた奇襲作戦について考えていたのです！」
「ほうっ。」

二等兵曹が聞きたそうに声をあげる。

やっぱりそうだった。

じゃあ、此処で話す事は。

「私は未だ半人前の身、そんな私で本当に作戦に参加しても良いか。そして二等兵曹に着いていけるか、その事が心に引っかけかり考えていたのです！」

「……」

「ですが私も既に軍人、どの様な事があっても最後までやり通す。そう決意してしました！」

「――」

私が捲し立てる様に話終わり両手を後ろへと回して休めの姿勢をとる。

対する二等兵曹は、何か考え事をしているのか腕を組んで黙っております。

もしかしてダメなんでしょうか。

厳しい体罰決定なのですか。

間宮券没収なのでしょうか!?

私の心が絶望に支配されそうになった時。

「成程な……了解した。聞くまで無かったか」

呟く様に話された言葉を聞き、私は思わず瞬きを何度もしてしまう。

「貴様の覚悟は聞かしてもらった。今後の作戦も頼むぞ『一等水兵』」

去り際に私の肩をポンと叩いた後、その場から離れる二等兵曹は何処か嬉しそうな表情をしており、逆に私は呆然と立ち尽くすしか出来ません。

そして待機所には私一人が残される。

……やった。

やりました。

私は間宮券を守り抜きました！

そう、この時の私は正に有頂天でした。

ですが後にこう思い返します。

間宮券位諦めていれば……と。

それから一週間。

私は落下傘部隊の知識を他の方たちと一緒に叩き込まれ、奇襲作戦について概要を憶えたりと正に地獄の日々。明らかに途中で部隊から抜けるとは思えない訓練をさせられ続けました。ですが、私が艦娘学校へ戻る為に二等兵曹が色々知識や技術を授けてくれていると考え黙っています。

きつとそう。

大丈夫、私が降下作戦に携わる筈がない。

だって私実戦早期希望者ですし。

それに高所恐怖症ですから。

あとほら、私まだ二等水兵です。

……ん？

そういえば以前二等兵曹が、私に向かって一等水兵と言っていた様な。

あれ、確か今日から新しい階級章らしきものが何故か渡された気が……。

そして現在。

私は飛行機から今まさに飛び降りようとしていた。

凄い、今までの記憶が一瞬で流れましたよ。

これが走馬灯というものでしょうか。

もしかしたらこれも夢の可能性が――。

「おい、いい加減にしろ一等水兵」

夢じゃなかった。

いや本当に無理ですよ。

高度がどれ程かご存じなんですか。

4000メートルですよ!?

人間は空を飛べないんですよ!?

それどころか唯落ちるだけなんですよ!?
潰れたトマトみたいに死んじゃうんですよ!!!
ですが私の必死な弁明に二等兵曹は。

「作戦に必要な訓練だから諦めろ、それに艦娘なら死なんと何度も言ってるだろうが」

と、取り合わず。

ああ、何故私をあの人に適当な事を言ってしまったのだろう。

自分の浅ましさを呪いたくなる。

同じ実戦早期希望者の天龍さんと深雪さんはいつの間にか居なくなってるし。

何故私だけこんな目に。

嫌です。

厳しい訓練には耐えてきましたが、降下訓練だけはダメです。

高所恐怖症な私は絶対無理です。

だからお願いします何でもしますからあ！

「はあ、仕方あるまい。もう良いぞ萩風一等水兵」

そう私がシクシク泣いていると二等兵曹がため息を付きながら諦めてくれた。え、本当に。

……流石です二等兵曹。

大天使時雨は伊達ではありませんね！

嬉しさの余り私はその場で脱力してしまい。

ドン

「へ？」

後ろから強く圧力が掛かり、私は前へと飛び出す。

無論、私の目の前は空中。つまり何も無い訳でして。

「私が押してやる」

チラリと見えた機内には、蹴り上げた姿勢で白い歯が見えんばかりの満面な笑みを浮

かべる二等兵曹が見えました。

状況からして私は機外へと蹴り出されたらしく、つまり後に待つ運命は。

「お、おにiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!」

落下しかありません。

悲鳴を上げながら機外へと出て行った部下を眺めつつ時雨は再び溜息を付く。
思い出すのは部下に対する評価と志願した時の情景だ。

実戦早期希望者である為に途中で抜ける彼女であったが、中々物覚えが良くて役に立つ事から此の仮部隊に正式配属したいと時雨は考えていた。

しかし、自分から進んで前線へ出たがる性格では無いと判断して半ば無理と思いつつ本人に聞いたら是非所属したいという予想を裏切るものである。

これには時雨も大変驚き、快く正式配属となったのだ。

実際は勘違いなのだが、時雨がそれを知るすべはない。

回想が終わり現在。

時雨は部下の宣言とは異なる態度に頭を痛めつつ彼女の不甲斐なさを嘆く。

中々根性があり、尚且つ優秀な部下だがこうも駄々をこねられると気が滅入る。

後方の海上監視所へ左遷した馬鹿二人とは違い良い駒なのだが。

愚痴や残念さをダース単位で思考し、萩風が落ちた場所を睨んでいると何時までもこうしている訳に行かないと考え直す。

今は未だ訓練中だ、文句や愚痴は後でも出来る。

「余り時間を掛けられん。同じ場所を旋回しているとはいえ、風向きが変わると遠くへ流されてしまう」

そう一人で呟くと彼女は無線機の電源を入れ、此処まで運んでもらった陸軍航空機の操縦士へ礼を述べる。

こうゆう小まめな対応は自分の評価を上げる第一歩。

良い噂や評判でも広がれば御の字だ。

打算的な考えでの礼であったが、無線相手は此方が無駄に時間を浪費したにも関わらず気にしない様子。それどころか先程蹴り落とした萩風一等水兵の心配をしてくれた。

かの対応を見れば当然の反応なのだが彼女からすれば心配りできる人間だと思えなく、操縦士に対する評価を上方修正して次に利用する時も同じ操縦士を希望しようと心に決める。

全く、こんな心配りできる部下が私にも欲しいものだ。

無いモノを強請つてもしかたないが。

そんな願望を抱きつつ時雨は機外へと飛び出し、海面目がけ一気に降下を開始する。

さて、早く訓練を終わらせて一休みしたいものだ。

1940年 2月下旬 ラバウル勢力圏内海上 特務混合部隊降下訓練地点

天上に輝く太陽と真下の青く美しい海。

鼻を海独特の生臭さを感じさせやる気が削がれるも表情には出す事は無い。

時折カモメが魚の群れを見つけたのか海へと急降下しており、呑気な気分を味わいたいという思いが芽生えると同時に鳥になって今すぐにでも逃げだしたいという願いも湧き出てしまう。

「隊長、出発準備が整いました」

「ご苦労、不知火一等水兵。何か問題は」

「特にありません、しいて挙げるとすれば萩風一等水兵でしょうか」

「ああ、理解した。奴め、無駄な手間を掛けさせおつて」

部下の一人である不知火から報告を受けた時雨は、何時の間にか副官として扱っていた萩風について頭を悩ませた。

先程無理やり降下して火事場の馬鹿力を発揮してか、無事に降下成功。落下傘を危なげなく操り着水した。此処までなら問題ないのだが着水し落下傘を回収する筈が萩風は動かずに唯着水姿勢のまま動こうとしない。不審に思った他の艦娘や海兵隊員が近づくと着水姿勢のまま気絶していたのだ。

降下後に気絶する肝の小ささに怒るべきか、それとも海上に立ちながら気絶できる器用さを褒めるべきか。

後から着水した時雨は現場を見て思わず吐きたくもない溜息を大きく吐き出し、作戦に向けて萩風を集中的に訓練するのを心に誓う。

私の前で宣言した時みたいに勇ましく有ればよいのだが。

時雨は自分の副官を彼女から目の前の不知火に変えようか少し悩みつつ帰還命令を出すのであった。

無論、迎えの船などなく自力航行である。

色々問題はあつたがそれももう終わりいざ出発しようとした時、遠くに船が見えた。隻数は凡そ三から五で、速度や煙の数からして民間船だと思われるがふと疑問に感じた時雨は、首から下げていた双眼鏡を使い確認作業を行う。

船の形はアメリカ合衆国が大量生産しているリバティー船で、艦首にある番号から判断して海外へと援助したものと分かる。

事実、掲げられている国旗がアメリカの星条旗でなく赤い布地に鎌とハンマーをモチーフにした国旗、つまりソビエト連邦の国旗であり尚且つ軍旗を掲げていない。代わりに民間会社を表す社旗を掲げている点を見ると矢張り民間船舶の様だ。

そんな輸送船が何隻か集団で航行しており、方向からしてラバウルに向かっている。人類に敵対的な存在相手に戦争しているのだ。各国から支援物資が届くのも当然だし不足する日本船舶では輸送しきれない物資を海外にお願いする事だつてある。で、あるからして別に不審な点はない。

しかし、時雨は双眼鏡から目を離さずに暫く輸送船を見ていた。

否、どちらかと言うと睨みつけている方が正解だろう。

普通なら何かトラブルを想像するだろう。

だが時雨は違うと考える。

攻略作戦前の時期に海外船舶の輸送船。

それに中央に居る輸送船のマスストに軍用レーダーらしきものを見つける。

様々な要因を足した結果、疑惑を更に深め更に前世における共産主義嫌いが尾を引いてか、彼女は輸送船を唯の民間船と判断しなくなった。尤も、この海域は現在訓練指定にされている為に民間船は立ち入り禁止の筈。よって彼女以外でも不審に感じるだろうが。

しかし、隣に居る不知火はそんな思いは無いのか上官へと意見具申を行う。

「何かトラブルがあったのでしょうか？ 事情を聴いてみては」

「……聞いてみるか」

もしかしたら本当にエンジンの異常や航路を間違えて此処まで来てしまった可能性がある為に放っておかず、時雨は内心面倒くさいと思いつつも無線を国際チャンネルに切り替えて話しかける。

「こちら日本帝国海軍ラバウル基地所属の第一特務混合部隊である。貴船は現在、指定

航路を大きく逸脱している。理由を述べられたし」

規則に則った模範的な警告を発し、少し待つ。

相手側からの通信が無く、仕方なくもう一度警告を発しようとした次の瞬間に雑音交じりの音声が続いてきた。

『こちらアムトルグ貿易会社日本支部所属のルーシ号。現在航路を見失っている為申し訳ないが誘導をお願いします』

会社名を聞いた時雨は自分の持つ知識と照らし合わせた結果、相手の話を妙だと思ふ。

確かアムトルグ貿易会社と言えばアメリカに事業所を持つ会社だ。

元となった全ロシア協同委員会《アルコス》のアメリカ支店、アルコス・アメリカが合併してできた会社でニューヨークに籍を置いている会社。史実ではアメリカにおける諜報活動の最前線としても重宝されかの有名なGRUやOGPUも関わりのある会社な筈、それが何故。

「了解した。これより貴船の誘導と護衛を行う」

『協力感謝します』

時雨は疑心を深めつつも此処で断つた場合問題になる可能性がある為、仕方なく誘導と護衛を引き受ける。

己の知識と違う点に疑問を抱く彼女だがこれには事情があつた。

元々アメリカとソ連を繋ぐこの貿易会社は『ある時期』までは実際に彼女の知識通り活動をしており、日本にも支店は存在しなかつた。しかし、『ある時期』——深海棲艦との戦争で全てが変わってしまう。

深海棲艦の攻勢により航路は寸断され、海上輸送には大きな犠牲が伴う事となる。

結果、アメリカとのパイプや諜報活動が滞る事態となり一時期は完全に海域や航路を封鎖される前に引き上げる事も検討され、消滅の危機に瀕していた。

しかし、日本が艦娘を配備して破竹の勢いで海域を解放すると再びアムトルグは活動を開始します。この時、アメリカとの航路は主に大西洋方面であつたが欧州における深海棲艦は以前より少ないとはいえ配備されている艦娘数が少ないこともあつて不安視されていた。そこで太平洋側、特にオーストラリア経由での航路も開拓。日本が船舶不足を補うために他国の輸送船や海運会社を活用しだした事も相まって、日本支店を作る

事となった。

かの裏話を知らないとはいえ彼女は知識と照らし合わせた結果、航行している船舶が赤い国の諜報機関と関係があると判断。

基地側に事情を説明する通信を入れてから出発するのだった。

彼女としては赤い国に協力などしたくないが、向こうの要請を無視する訳にもいかなので、渋々といった感じだ。

「共産主義者は無駄な仕事が好きだな……」

「え？」

「いや、何でもない。奴らを誘導して早く帰還するぞ」

漏らした皮肉に不知火が上手く聞き取れなかった為か聞き返そうとするもそれより早く時雨が話題を切り上げて帰還急がすのであった。

この時彼女達は知らない。

自分たちが視線を外したのを見計らい、相手が此方を双眼鏡で観察しだした事を。

輸送船の中で男たちは見ていた。
監視対象の一つを。

「Как насчет?」(気づかれたか?)

「Вероятно……」(恐らく……)

「……Мы исполнять свои обязанности…… Это в
сё, что я хочу сделать。」

(……我々は任務を果たす……ただ、それだけだ)

「……Да」(……了解)

その後彼女達は訓練漬けの日々を送り自身と部隊の練度を上げていく。

無論、問題が無い訳では無かったがそれでも許容範囲内。

時雨が持つスパルタさも合わさって皮肉にも上層部の目論見通りに彼女は役立って
いたのだ。

やがて訓練が二か月を過ぎ……。

1940年 4月下旬 ラバウル基地司令室

時刻は間もなく午前4時前。

夜が間もなく開け、闇から光へと移る時間。

薄暗い作戦司令室において総司令官が、参謀官が、通信士がそして本土からの将官が緊張した面持ちで時計を見つめる。

小さいはずの秒針を刻む音が室内に木霊し、4時に近づくほど音が大きくなる錯覚に襲われてしまう。

無理もない事だ。

彼らはこの日の為に様々な準備をしてきたし調整をした。

作戦の見直しや配置する兵力を追加するために各戦線に大きな負担もかけてしまう。

深夜に作戦を実行しようとする案もあったが、深海棲艦の航空隊は短距離ならば夜間でも容赦なく攻撃可能な点を考えて航空戦で少しでも対抗できる夜明けの作戦開始となった。よってこの作戦は夜が明けて30分間までが勝負となる。もし、それを過ぎると敵の基地航空隊が長距離爆撃機を使用し最早日本軍に勝機は無いのだ。

無論慢心はしない。

彼らの背には兵士達の命やその家族の生活、そして祖国の荒廃と世界における平和が乗っている。

故に失敗は出来ないのだ。

皆思わず腰にある軍刀を触れた。

失敗しようものなら腹を切る覚悟を持っている。

しかし、それは逃げではない。

自分がより本気になれる為の覚悟だ。

カチ

小さくも軽い音が鳴り、続いて時計が4時を示す音が響く。
時間だ。

「作戦、開始！」

総司令官の今村均中将が号令を発し、作戦の開始を宣言する。

賽は投げられた。

ラバウル―ソロモン諸島間海域 正面攻勢部隊

月が沈み始める夜の海面に無数の船舶や艦船が陣形を組んでいた。

これら大型船は主に艦娘や水歩兵を運ぶ役割だが、前線へと運ぶのはまた別な存在だ。

一体何か。

それは大型船らが待機している場所から少し離れた位置にひしめき合っている。

約一隻で20人は運べる小型艇。

物資と人を満載した中型船や小型船。

そして隊列を組み、戦車の如く並ぶ装甲艇。

これら全てが前線へと将兵を運ぶための乗り物であり、大切な機動力だ。

大型船や艦船を兵員輸送の為に使う列車で考えるとこれら小型船は彼らを最前線へ

と運ぶトラックであり、それを警護する装甲艇は戦車や装甲車の役割だ。

無論、全部に兵士を乗せられない為部隊によつてはそのまま航行して進軍する所もあるし、小型船警護の為に敢えて乗らずに同行する水歩兵も居た。

中には途中までも良いと考えてか装甲艇の上に腰かける陸軍水歩兵が見受けられ、宛ら史実における西部戦線帰りの戦車を想像しやすい。

唯一の例外は航行時間が長い艦娘達で彼女達は大型艦船である一定の距離まで運ばれた後、終始自力での航行を行う。

上空からそれらを見ると間隔が広くあるとはいえまるで平野での歩兵やトラックそして戦車が集結している光景を思わせる。

「いよいよだな」

とある装甲艇のハッチから上半身を出して辺りを見渡す人物が居た。

上半身しか出していないにも関わらず日本人にしては身長が高く巨漢である事が分かる体躯をしていた。しかし、表情はどちらかというと優しげで特段魅力は感じないが変わったオーラを感じさせる人物と言えるだろう。

「西住中尉殿」

ふと後ろから声を掛けられ、振り返ると今作戦において新兵として参加する水歩兵が敬礼していた。

呼ばれた男——西住小次郎は記憶の中を探った結果、訓練生からの繰り上げで現場へと派遣された新兵だと記憶していた。それで輸送艇へ乗れなかつた事を哀れに思い自分の装甲艇へ乗せてやつた水歩兵の一人な筈。

確か名前は。

「どうした船坂」

名前を憶えてもらい嬉しく思う船坂弘は、装甲艇に乗せてもらった礼を述べつつ頭を下げる。

そんな義理堅い船坂を見た西住は思わず苦笑してしまい唯一言「気にするな」と言うだけだった。

「船坂、初戦で緊張していると思うが気張り過ぎるな。人は何時か死ぬ、どう生きるかは自分の頑張り次第だ。じゃあ何時死ぬか分からぬなら精一杯悔いが無いよう生きよう。そう考えると難しい思いが吹っ飛ばぞ」

「……は、うー」

優しい表情で話す西住に対して船坂は心の奥底から力強いような、しかし優しく休まるような妙な気持ちを感じられた。そして同時に目の前の戦車隊から装甲艇部隊へと転属した男を心から尊敬するのを実感する。

事実、彼の心にあつた不安は拭い去れていたのだから。

『各部隊へ伝達、狼煙を上げろ！』

作戦始動の合図が無線機より流れる。

その瞬間、西住と船坂は表情を引き締めて正面を見据えた。

先程まで和んでいた空気も一変し、緊張と殺意が入り混じった空気だ。

しかし、この場で西住は少し遊び心というか戦車心を出す。

彼は元々戦車隊に所属していたが、深海棲艦のせいで現在は水上の戦車隊と言われる

機甲水兵隊へと転属した身。だが心では何処か戦車乗りとしての気持ちが残っていたのであろう。普段公私を確りと分ける彼らしからぬ冗談が飛び出る。

西住は通信機の電源を入れ、良く響く声で配下の装甲艇へと宣言した。

「戦車隊、前へ！」

同時刻 海軍普通航空隊母艦 発令所

普通航空隊、つまり人間が操る航空機の部隊でありそれを運用する母艦は史実と変わらず空母である。その場合は普通空母と呼ばれ艦娘と差別化していた。尤も、艦船は最早主役と成り得ず名前を奪われ付けられない運命なのだ。

「時代は変わったもんだな」

煙草を吸いながら言葉漏らす人物。

少将の階級に黒い提督服を着こなす体格の良い軍人——山口多聞は奴らが世界へ攻めてくる前と今を比べて時代の流れを痛感する。

ほんの十年前までは海軍の主役といったら戦艦を始めとした艦船であり、人が皆黒鐵の城を呼び称えた。

しかし、深海棲艦が出現してからはより強力で小型な艦娘が戦場での主役となり本来なら艦船へと付けられる名前を奪われてしまう。

時代の流れだから仕方ない。

そう諦める軍人も居れば反発する者も居る。

全員が納得できない、それが人間だ。

山口も初めはそうであった。

パツと出てきた艦娘に全てを奪われ辞表を考えていたが上官であり恩師の山本五十六と艦娘飛龍が自分を支えてくれた結果、彼は此処にいられる。

そして持ち前の才能と鬼教官ぶりにより彼は珍しい艦船と艦娘両方を指揮できる提督となり、海軍に名を轟かせていた。

それは陸軍からも同様で、陸海両方からの呼び名が人殺し多聞丸と恐れられ軍内の雑歌では『仏の今村今日も笑顔で、鬼の多聞丸は血が欲しい』と言われる程だ

「一号航空艦より坂井隊、武藤隊の発艦完了と連絡あり」

「二号航空艦より岩本隊と赤松隊発艦完了！」

「本艦より友永隊発艦、続いて——」

司令所の通信士より普通航空機、つまり人間の操る航空機が次々発艦するのを伝えられる。

今回の作戦を成功させるために腕も機材も最高なものを揃えた部隊だ。

「正に総力戦か」

『多聞丸』

ふと個人の通信機より呼びかけられた声に思わず言葉が途切れるも、通信相手が誰だか分かり思わずため息を付く。

「どうした飛龍」

『大丈夫、疲れてない？』

まるで親を心配する様に声を掛ける飛龍に思わず苦笑してしまった山口だがこの場は既に戦場、気を引き締めなくてはと考え手っ取り早く肯定の返事をした。

素っ気ない返事な為か、少し声色を落とす飛龍に再び気を削がれた山口は柄にも無いと思いつつ助言をする事にした。

「飛龍、気持ちは嬉しいぞ。だが今は戦闘中だ、下手に規律を乱すものでは無いぞ」

『…………ごめんなさい』

「…………だが、元気が出た。ありがとう」

『う、うん！』

「がんばれよ」

『了解、お父さんも頑張つて！』

最後にそう言われ、通信が切れたのを確認した山口は煙草の煙を吐き出しつつ先程の言葉を思い出す。

「お父さん……か」

深海棲艦の襲撃により多くの部下や上官を失った。

数々の戦いで負け続け、奴らの本土空襲で家族も……。

そんな失意に苛まれた中、艦娘の飛龍——本名キヨに出会った。

初めは提督と艦娘という関係だったが何時の間にか親子みたいな関係になっており、飛龍からはすっかり父親と言われる様になった。

実際に他の飛龍とは違いキヨは彼に良く懐きそして山口も彼女を本当の娘の様に接していた。恐らく、同じく両親を亡くした彼女は山口を父親と重ねているのだろう。

もう負けられない。

大切な部下や上司、日本、そして家族の為に。

だから。

「今度あ勝たんとな」

同時刻　トラック諸島―ソロモン諸島間海域　側面攻撃部隊

正面からの攻撃を行う部隊が攻め入る頃、当海域に展開している各海軍艦艇や海兵隊

が敵の側面を攻撃すべく動き出していった。

トラック諸島方面から攻め入る彼らもまた、正面攻勢部隊に負けづ劣らずの士気を有し皆悲惨さを微塵も感じさせていない。

それは勿論艦娘とて同じである。

一人の駆逐艦娘が首から下げたネックレスを握りしめながら深呼吸を繰り返す。

立ち止まらずにゆっくりと航行しながらの為、邪魔にはならないが見ていて良いものでは無いだろう。何故なら緊張とは伝染するものだから下手に緊張している姿を見ると自分まで同じく緊張してしまうのだ。

しかし、彼女の艦隊でそれを咎める者は居ない。

それは彼女が旗艦であると同時にその行動を一種の儀式と思っているからで、最早慣れたと言えよう。

何より彼女の持つ砂浜の様な金髪が海風に揺らされつつ祈るような姿と相まって、絵画を思わせる美しさを醸し出していた。白み始める空と合わさると正に神聖さを秘めている。

この様な美しい姿を咎める方が罪というもの。

やがて祈りの時間が終わったのか彼女は目をゆっくりと開き前を見つめる。

「もう良いのか?」

声を掛けたのは彼女と同じ艦隊に属する艦娘で、黒い制服と白く長い髪を持つ睦月型駆逐艦、菊月であった。

先程までの祈りは長い付き合いの為既に見慣れている、を通り越し見飽きた菊月であるが別に邪魔をする理由も無いから何時も見守っているだけ。

そんな菊月に声を掛けられた少女は大きく頷くと再び前を向く。

何時も通りな行動に思わず菊月は疲れた様に息を吐き出すが、ふと疑問に思う事があり思案しだす。

何時も思うが彼女はその視線を何処に向けているのだろうか。

敵か、味方か、将又別なナニカかもしれない。

その視線の先に見える物は何だろう。

うちのエースは何処へ向かうのだろうか……。

「みんな」

透き通るような美しい声により思考が現実へと引き戻された。

作戦が既に開始されているのに上の空であった自分を菊月は恥じ、思わず苦虫を潰したような表情となる。

しかし同時に己が相棒であり、艦隊旗艦である彼女を見て菊月はやる気を取り戻すのだ。

今度こそ『コイツ』より多く敵を倒してやる……と。

「さあみんな。突撃するっばい！」

我らが旗艦は平常運転らしい。

同時刻 ソロモン諸島近海 上空7000メートル 奇襲攻撃部隊

そろそろ夜明けという時刻の雲上に複数の飛行機が飛んでいた。

陸軍の爆撃機もあれば輸送機も見受けられ、空気が薄い事もあり翼から雲を引きながら飛ぶ姿は幻想的でもある。

これらは降下作戦に参加する部隊で陸軍側が多いのは数的主力が挺身連隊な為だ。尤も彼らも今回が初めての降下作戦である為に参加する将兵は不安が拭えていないが。

元々降下作戦は考案自体1910年頃から存在したが、初めて大々的な実戦投入がされたのは1940年ドイツとベルギー戦におけるエバン・エマール要塞の戦いであった。しかしこの世界ではドイツとベルギーは戦争しておらず、それどころか深海棲艦との戦争で欧州各国は敵を上陸させない為の水際防衛や上陸した敵を内陸に誘い込んでからの包囲殲滅を重点的な戦略にした結果、未だに降下作戦は日の目を見ていない。

その為本作戦における陸軍側の要でもあった彼らだが未知数な戦術ゆえ、緊張が膨らむばかりであった。

また、彼らを不安視させる要因はもう一つある。

それは幾ら数が多くても彼らは敵主力たる泊地を攻略する事は難しい点だ。

強力な障壁と圧倒的火力を持つかの存在は正に戦場における死神で、攻略は不可能では無いが、多すぎる犠牲を出すことは必至であろう。

だからこそ本作戦における本当の要たる部隊は、海軍のラバウル第一特務混合部隊であり彼女らに全てが賭けられているのだ。

そんな彼女らが乗る飛行機は同じく飛ぶ飛行機たちの中にいて一際目立つ巨大なものであった。

その巨体はさながら怪鳥を思わせ、合わせて5機が編隊を組み悠々と飛んでいる。

二式飛行艇。

それがその航空機、否飛空艇の名前で別名二式大艇と呼ぶ。

史実において1941年に完成した当時としては世界最大の飛空艇だ。特にこの二式飛行艇は史実では量産されなかった兵員輸送型で最大64名の兵員が余裕をもって輸送可能な存在である。

何故史実よりも早く実用化されたかという点、これも深海棲艦による襲撃が関係して

おり飛行場が爆撃で使用不能な事態が多発した結果飛行場を使用せず水上で離着水可能な大型飛空艇が注目された為だ。

艦娘が活躍する現在でも二式飛行艇は活躍が減るところが増える一方で各基地に少なくとも20機あるのが普通となっている。また、人間が乗る航空機は生産こそするが史実に比べ低調気味で特に爆撃機と雷撃機は史実よりも圧倒的に少ない。

結果、少なくなつた分のリソースを輸送機や飛空艇に回せた事も合わせり史実よりも大量に作られたのだ。

史実で量産された航空機が減産され逆に数少ない飛空艇や輸送機が大量生産される。正に歴史の皮肉だろう。

薄暗い飛空艇の中、時雨は思索していた。

今回の作戦における我々は何よりも速度が求められる。

夜明けと同時に敵泊地から航空機運用能力の排除を第一目標とし、余裕があれば泊地の排除並びに制圧が主な任務だ。

ハッキリ言つて無茶極まりない内容だが可能性はゼロではない。

敵航空隊は短距離ならば夜間でも容赦なく飛ばしてくる。その為、夜間で敵空母に会つたときは距離を取るか戦闘機発艦前に潰す事がセオリーである。尤も此方も艦載機を消耗品覚悟で使用すれば対空戦闘できるが、人類からすれば御免被る話だ。

だからこそ今作戦は夜明け直前に決行となつた。

二方面からの同時襲撃と空挺を利用した飛び石戦法。

圧倒的な機動力と兵力そして一時的とは言え航空支援及び後方遮断という理想的な電撃作戦、いや縦深戦術理論が近いだろうか。

第二次大戦が勃発していないこの世界では研究し続けているが未だに不完全な形でしか実現されていない戦術だ。まあ、もしかしたら深海棲艦のお蔭で粛清されずに済んだ『とある赤軍将校』が既に考案位はしているかもしれないが。

『降下五分前、滑空飛行に切り替える』

エンジン音が消え、ガクンと機体が僅かに揺れた。

敵に接近を悟られない様にエンジンを切つての飛行へと切り替えたのだろう。

操縦士の通信が聞こえた時雨は、そろそろ時間だと理解し部下達である海兵隊と艦娘

達へ視線を向ける。

皆が緊張した面持ちで彼女を見ており、作戦成功のカギが自分達である事にプレッシャーを感じている様だ。

この様子に時雨は内心溜息をつく。

適度に緊張するのは良いが、し過ぎるのは良くないな。

こんな時部下達を和ませるのが上司の務めと考えると仕方ないとはいえ面倒くさいものだ。だが、フオローしない事で上からの評価や士気低下は避けたいうえにそれが原因で下手に犠牲を出せば今後の昇進に響く。

顔には一切出さないが、彼女の内心は仕方がないという感じだ。

全ては昇進と部下たちが少しでも役に立って自分を楽にさせる。場合によっては肉壁として利用する為に。

と、いう訳で緊張を解すジョークを一つ話そう。

無論、解しすぎは危険だから士気向上な話も織り込んで。

「諸君、緊張しているな……なら一つ私の秘密を教えてやろう」

不敵な笑みを浮かべつつ時雨は部下達に話しかける。

行き成り話しかけられた彼ら彼女らは一瞬間食らうが、自分の上官が何か伝えようと
している事に気が付き耳を傾けた。

「実は私は軽い病気に掛かっている。無論諸君らもだよ」

この言葉聞き、皆驚きの表情をするが続いて『自分達と同じ』という点で疑問に感
じてしまう。

何故なら彼らは健康だと自覚しており病気と思われるものは覚えがない。

こうなると答えが気になってしまう為、聞き取れる様により一層耳を澄ます。

「何だ、分からんか？ 簡単な話だ」

焦らす様な発言。

出撃前だというのに全員が指揮官に向け答えを急がす視線を向けていた。

すると時雨は勿体ぶるように彼らの眼前へと少し震える手を出して。

「臆病！ 誰でも成りえる恥ずかしい病気さ、名誉ある帝国軍人が情けない話だろおい」
「……プツ」

話す言葉とは裏腹に変わらさず笑顔な彼女を見て、周りは一瞬沈黙し続いて誰かが嘖き出すと皆が釣られて笑い出す。

今までの厳しさから一転、こんなジョークを自分達の隊長が言えるとは思わなかった彼らは普段との対比も含め笑ってしまう。それは話した本人も同様で不敵な笑顔を浮かべたまま笑い声を漏らしていた。

「何だ貴様ら、笑えるじゃないか」

再び発した時雨の言葉に彼らは何時の間にか震えや怯えが無くなっていた事に気が付く。

それと同時に目の前に居る少女に対して自分達をどれ程理解し考えているかを知り、尊敬の眼差しをむける。

しかし、彼女は再び言葉を出す。

彼らを盛り上げるために。

「では私の使う『臆病』に対する治療方法を授けよう。何簡単だ……戦果を上げるだけだ」

空気が再び変わる。

先程は和みある安らぎさを感じる空間と空気だったが、時雨から感じるモノが既に別になつてしていると全員が直感した。

そうこれは――。

「我々が敵を打ち倒すのを想像しろ、するとどうだ？ 奴らが無様に海へと逃げ帰り我らを恐れる。人間を恐怖に落とす筈の化け物が心底我らに恐怖するのだ……最高な皮肉だろ」

白い歯を見せつつ笑う彼女に皆が同じように笑う。

そうだこれは狂気だ。

一心不乱の戦争、それを求める狂気である。

辺りが熱気に包まれ、皆が顔を引き締めた。

そうだ隊長殿は口癖のように言われていたではないか。

勝てる戦争ほど楽しいものは無い。

ならば楽しもうではないか戦争を。

最早彼らに怯えた者も気の抜けた者も居なかつた。

彼らは此処に誓うのだ。

何処までもこの方に着いていこうと。

『間もなく降下地点、降下用意』

操縦士からの通信を聞き、時雨が外へと通じる扉を開ける。

扉の先には白みだした空が見え、地平線から太陽の光が辺りを照らし始めていた。

『夜明けです』

通信機越しから聞こえる何の事は無い唯の報告だが、それが何処か感傷深い様にも感じられてしまう。

「諸君、素晴らしい夜明けだ！　だが残念ながら敵泊地共は未だ寝ている様である。こんな風景を独り占めは良くない、そう思わんか？」

扉に手を掛けた状態で皆に宣言する彼女は矢張り笑顔のままだった。

部下達もそれに頷きや肯定の言葉を持つて同意し気分を上げ、正に最高潮といえる状態だ。

「ならば『モーニングコール』と行こうではないか！　きっと驚きの余り飛び起きるぞ」

ドツと笑いが起きた。

誰もがそれは良い。やりましょうと声を上げる。

その様子を見て時雨は機嫌が良くなった。

程よい緊張、高い士気、そしてあふれ出る戦意。

部下の状態を劇的に改善し、彼女は彼らに対して期待を寄せる。

準備は万端。

後は死力を尽くすのみ。

『降下5秒前!』

戦争は怖いし嫌いだ。

『4!』

だが、やらなくてはいけない。

『3!』

ならば、嫌いな事でも楽しいと思えば怖くない。

『2!』

だから。

『1!』

戦争を楽しもう。

『降下開始！ 降下、降下あ！』

時雨を先頭にまるで流れるような動作で次々と大空へと飛び出す兵士達。
海兵隊も艦娘も陸軍も皆関係ない。

誰もが目標へと降下していく。

まるで狂気の祭典の如く。

1940年 4月下旬 4時00分

作
戦
開
始。

第五話 「ガダルカナル降下作戦」

全ての人間は己の内に猛獣を潜めている

——フリードリヒ2世——

1940年 4月下旬 ソロモン諸島 ガダルカナル島

空が白みだし太陽が海面から顔を出し始める時間。

重巡り級は島の高台にて海上を見張っていた。

艦船を小型化した深海棲艦として視認範囲は人間よりは広いが望遠鏡程ではない。ま

た、身長が成人女性かそれよりも低めな重巡り級だと遠くを見渡すのに高さが足りないのだ。その為泊地周辺海域を見張る深海棲艦の中には高所や高台に上りより遠くを見ようとしている。

現在この泊地は前線における戦闘開始報告を受けて警戒態勢が敷かれており、泊地周辺艦隊も前線へと派遣されているので手薄な状態だ。その為、もし奇襲されようものなら大損害を受けるであろう。

しかし、それに関しては泊地を指揮する者達は考えていない。

それは戦術や戦略を理解していない訳でなく現実的にあり得ないのだ。

ソロモン諸島は最も近い戦線をラバウル、2番目をトラック諸島と考えておりそれ以外からの攻撃は迂回が必要な地形である。

後方にある拠点マーシャルやギルバードは深海棲艦の勢力圏内。そして下に位置するオーストラリアは途中にあるバナアツ島駐留艦隊により監視されているため奇襲は不可能。結果、泊地の長たちが考えた人類側による攻勢はラバウル・トラックの2方面であるというものだ。

事実それは的中しており敵は夜明け少し前に2方面からの大規模攻勢を実施、防衛部隊と戦闘に突入した。

本来ならば各戦線で膠着状態に持ち込み後方のガダルカナルから航空機の援護を出

して有利に進める手筈なのだが、予想に反し奇襲を受けた深海棲艦は混乱と大損害を受けてしまう。

攻撃地点を予想し防衛力を持たせているとはいえ、機動力の高さを基にした奇襲には流石に対応しきれず損害を被ってしまったのである。また、『ほぼ同時』にトラック方面からの奇襲で前線は混乱に拍車をかけ深海棲艦側が押されている状況だ。

彼女らの想定した奇襲は物量と時間差による攻撃であり、機動力と航空力を駆使した電撃戦など初めての事。

これには流石の泊地棲鬼や飛行場姫は慌て、ソロモン諸島を守る部隊を前線へと派遣して自分たちも航空機隊の発進を急ぐのであった。

無論、敵の長距離爆撃を警戒しているが爆撃だけでの地上戦力殲滅は不可能であるし例え一時的に航空機運用能力を失おうとも時間をかけて回復すればよい。

事実、前線での人類側の攻勢はソロモン諸島に展開していた大規模部隊の前線投入と泊地棲鬼がマライタ島にて指揮を執ってから低調になりつつある。それに長距離爆撃機は距離を考えると再び攻撃をするのに時間が掛かってしまうのでその間飛行場姫は復旧に専念すれば相手が再び爆撃するより早く治す事が可能、つまり人類側に飛行場姫の完全な排除は不可能なのだ。

後は人類側が再び爆撃するなら戦闘機部隊で殲滅して良いし、しないなら早期に爆撃

隊や雷撃隊を前線へと派遣して敵を攻撃する。そうすれば決定打を欠いた人類側に勝利は無く、深海棲艦側の勝利は確実と言えるだろう。

最早勝敗は決した。

負ける要因が無いのだ。

何故なら相手が攻めてくる場所は限られる。

そう、不可能だった。

空から悪魔が降ってくるまでは。

最初に見つけたのは海岸近くの高台に上っていた重巡り級であった。

彼女はふと何気なく、それこそ敵爆撃機が来るかとも思い空へと視線を移した時にある物を発見する。

雲の切れ目から見える無数の点で一瞬爆撃機かと考えるも黒い点はある高度まで降下すると白い花を一杯に咲かせて落ちる速度を急速に落とし始めた。

これにはり級も驚き、同時に爆弾の類ではないと判断。直ぐに自分の上官たる飛行場姫へと連絡を入れようとするも。

大きな爆音と光が目の前で発生、突然生じた衝撃と浮遊感に戸惑う彼女は地面を何度もバウンドし最終的には岩へと激突してようやく止まった。

「ガッ……アア!!」

口から空気が漏れ出て息ができない状態で地面に倒れているリ級は力を振り絞り何とか顔を上げると自分に起きた出来事を理解しようと辺りを見渡す。

まず見たのは己が立っていた高台だ。

そこは既に高台では無く唯の岩の塊と化しており、周りにあつた人類が残っていたコンクリート製の壁も完全に粉碎され跡形もない。

続いて周辺の木々を見ると根元から折れている物が幾つもあり、中には燃えている木まで存在していた。尤もそれは未だ良い方で完全に吹き飛ばされて木々があつた痕跡すら無い箇所までまる。

その後も周りを確認するリ級であるが自分の周辺は既に破壊され無事なものは皆無と言つてよい状態であつた。

此処で彼女はようやく敵の攻撃だと理解し、急いで敵爆撃機を撃ち落とさねばと動かない体をむち打ち無理やり立たせようとする。

先程見えた黒い点は恐らく爆弾であろう。

ならばこの後も爆撃機が襲来する可能性がある為、早く対空体制に移行せねば。

敵の爆撃と結論付けながら自分がぶつかった岩を支えに立ち上がろうとするり級だが中々立つ事が出来ない。

思い通りに動かない体を疎ましく思いつつ無理に立とうとした時、岩を掴んでいた手の力が抜けてしまい再び地面へと倒れてしまう。

余りにも体の自由が利かない事に愕然とした彼女は思ったよりもダメージが大きいと予想を立て、どう行動しようかと考える。

先程から続いている破壊音からして敵の爆撃は未だ続いている筈、ならば仲間や自分に当たらないのを祈りながら待つしかない。

つまり戦闘参加を諦めて救助されるのを待つしかないのだ。

無様で無力な姿を悔いて思わず歯ぎしりするり級。

兵器たる彼女の存在意義は敵を撃ち滅ぼす事。

ならばそれが出来なく、仲間を守れない自分が惨めでそして愚かだと感じる。爆撃音が聞こえる方へ顔だけを向けると彼女の瞳に絶望が映し出されていた。

天高く黒煙と爆炎が舞い上がり、粉塵を巻き起こす島の中央部。

味方の対空砲であろう射撃が時には見えそして沈黙していく様子。

動物が逃げ回り、木々をなぎ倒していく攻撃。

落下、爆発、黒煙、そしてまた落下、爆発、黒煙。

同じ現象が続き、その結果は島により大きな変化をもたらす。

爆発するたびに吹き飛ぶ深海棲艦と島の一部、そして変化し続ける地形。

正に煉獄が創造されている瞬間だ。

「——ッ!!？」

痛みと圧迫された肺の影響で上手く声が出せないり級は煉獄を作り出した相手、人類軍に対し憎悪を膨らませる。

己の守るべき主たる飛行場姫が居る島中央が爆撃され、自分たちを滅ぼさんとする奴らが憎く殺したい。

胸に滾る殺意を糧に立ち上がり、体が治り次第一人でも多くの敵を殺そうと決意した瞬間。

「何だ、まだ生きているのか」

上から聞こえた声に思わず顔を向けると一人の艦娘が主砲を構えており、眼前には砲口があった。

何時の間に居たのだろうか。

そう考え、答えを得ようと思考したが相手は待つてくれない。

目の前の悪魔は笑いながら再び口を開く。

「楽しんでやる」

砲撃、そして粉碎。

初めに受けた上空からの爆撃や砲撃により防護膜が消失したり級は防ぐ手立てが無かった。

頭を砕かれ、体ごと吹き飛んだり級が目覚めることは二度と無い。

「この場に残る生存者は彼女を殺した悪魔——駆逐艦娘時雨と続々と降りてくる時雨の部下達であった。

晴れ時々爆撃、地域によっては魚雷や砲撃もあるでしょう。

全くもって戦場では何が降るかわかりません。

恐らく先程死んだり級もあり得ない出来事に頭が真っ白になってしまい死んだはず。戦場とは恐ろしいですね。

早く終わらして帰りたい気持ちで胸が一杯です。

おはようございます、駆逐艦時雨二等兵曹です。

30分以内で飛行場姫を始末しろという上司の無茶ぶりを実現するべく戦場へと文字通り舞い降りました。

現在居る場所はソロモン諸島における深海棲艦側最大航空拠点、ガダルカナル島であり早速重巡を始末したところです。

上空から行った攻撃でかなりの被害は与えられた様なので、無駄な仕事が減り私は嬉しいですね。

早く飛行場姫を片付けて定時帰宅したい。

私の脳内はそればかり。

さて、話を戻すと今作戦における最重要目標はガダルカナルに展開する飛行場姫を排除して前線における制空権を有利にさせる事だ。

最初の空爆で片付けば良かったのだが、そんな簡単に行けば苦労しない。

現在我々が居る地点は島の高台当たりで、すぐ近くに海へと通じる急な坂がある。よってこれより海へ出て飛行場姫が移動するであろう地点へと先回りします。

何、敵は島に籠るのではだと？

確かに可能性はあるが敵の頭が少しでも回る奴なら逆に有りえないだろう。

降下作戦により島外縁部の防衛線が半ば無力化され、次々と占領されているのに島へ籠る事は愚策。ならば次に考えられるのは深海棲艦にとつて有利な戦場たる海上への脱出。

だが陸軍や海軍も当然それを考えて川や道を塞ぐであろうし、深海棲艦の部隊が移動すれば直ぐに気が付く。

そう、部隊ならば。

私はこの時ゲリラ戦を展開する日本軍や北ベトナムについての記述を思い起こす。

史実における末期の日本軍や北ベトナム軍はゲリラ戦を展開するうえで蜘蛛の巣が如く出来た小さいルートを多く利用し補給や小規模な部隊移動、脱出をこなしてきた。無論似たような事はこの世界でも取り入れていたが制海権が早々に消失した事でノウハウは少なく、また人類外相手ということで勝手も少し違う。

逆に私は深海棲艦の方がゲリラに向いていると考える。

小川や獣道を利用しての奇襲や脱出。

それらがある程度の思考ができ、命令に逆らわないロボットみたいな存在で実行されるのだ。考えただけでも頭が痛い。

事実、一定以上の思考や感情有する『赤色』や『黄色』は戦術等を駆使して厄介だが、『無色』共は士気の低下や撤退を考えなくても大丈夫な為に非正規戦においては先に述べた二種以上に厄介だ。

幸い敵は未だにその様な戦術を駆使していないが時間の問題だろう。

特に今回の相手は姫級であり直ぐに自然で作られた小道や小川の利用を考える筈。

奇襲を許した今ではゲリラ戦は不可能だが脱出に活用する可能性が高い。

そこまで考えた時、島の内陸部からひと際大きな爆発音が聞こえ思わず視線を向ける
と上空から攻撃しつつ降下する兵士達が見える。

どうやら他部隊も次々と降下を成功させ、攻撃の手を強めているらしい。

あちこちで戦闘音楽が鳴り響き、地獄を生み出す。

戦火が広がっている様子を見て、恐らく飛行場姫は既に移動を開始している筈だ。早く移動せねばならん。

こちらの作戦終了時間は残り20分、全く時は金なりどころか命だなこれは。

「隊長、周辺の敵排除を完了しました」

「各隊問題なく降下完了！」

私が作戦を考えている間に周辺に展開する敵排除及び隊員の集結を終わらせた部下達が報告に来る。

脳裏には作戦前に叩き込んだ島の地図が浮かび上がり、飛行場姫が通るであろう各ルートと最終的に何処から海上へ出るかを叩き出す。

ふむ、味方の部隊展開率と行動範囲を考えると『あの場所』かな。

さて、予想も立てたしそれでは行くとしよう。

もし無線を傍受されて敵に逃走ルートを変えられるのも面倒だから無線封鎖もしておくか。

「諸君、恐らく敵は海へと逃げ出す筈だ。よって我々の次に執る行動は逃げ出す敵を叩き潰すことだ！」

私の声に皆が耳を傾ける。

よし、戦意は変わらず大丈夫なようだ。

これで少しは楽に仕事ができるだろう。

「さて行くぞ諸君、鼠狩りだ！」

「ハア、ハア——チツ……クソ！」

バシャバシャと水面を走りながら自然の木々で作られたトンネルを走り抜ける影が複数。

それは三つあり、二つは黒髪の成人女性に似ており両手の艤装から戦艦ル級と判断できるとする。

問題は残るもう一つの存在で白く長い髪に頭から生えた短い角の持ち主、飛行場姫

だ。

他の深海棲艦同様、病的に白い肌と美しい光沢放つ長い白髪は普段なら誰もが見とれる神秘的美しさを感じさせるだろうが現在は流れ出た血や火傷、そして艦装から漏れる煙からその面影は見受けられない。

それは護衛として付いてくるル級二人にも言えることで、彼女ら全員中破もしくは大破の身であった。

「マサカ、空カラ攻メテ来ルトハ……予想外ダツタワ」

火傷を負った肩を抑えつつ独り言ちる飛行場姫は敵の予想外な戦術と自分の不甲斐無さを呪う。

彼女は敵がこの島に攻撃を加えたとしても空襲だけと予想し、前線に人類軍が集結していると情報が入り次第大多数の戦力をラバウルとトラック方面へと向かわせていた。しかし、結果はこのざまだ。

例え空爆で同様のダメージを受けたとしても敵が上陸しない限り動かず回復に専念できた。

そう、敵が直接来なければ回復の余裕が出来たはず。

だが予想は裏切られてしまう。

敵がパラシュートによる降下を行い直接戦闘と占領を開始したのだ。

攻めて来て尚且つ島を占領し出した状況では傷や犠装の回復などできる筈もなく彼女は無様に海へと逃げるしかない。

惨めだった。

心苦しい気持ちで一杯だ。

仲間たちが自分を逃がすために各地で奮闘しており命を次々と散らしていく。

この怒り、私は決して忘れないだろう。

私をこんな目に合わせた人類がそして艦娘が許せない。

何より命がけで自分を守る仲間たちに応えなければ。

それが私飛行場姫の上に立つ者としての使命だ。

この借りは絶対に返してやる！

海へと通じる川を下りながら決意を抱くと薄暗い木々のトンネルの出口が見えてきた。

そこは海面が反射する朝日の影響により、まるで光のゲートを思わせ神秘的な美しさと自分たちを歓迎する意思を感じてしまう。

もう少し、もう少しで海へ出られる。

そしたらマライタ島へと脱出して同島にて指揮を執る泊地棲鬼の助力を請わねば。

早く仲間を助けたいという思いともう少しで助かるという思いが重なり彼女の足を急がす。

飛行場姫の表情は決して暗くない。

何故なら固い決意をそして希望を胸に前へと進むのだから。

出口はもう目の前、朝日の影響で外が良く見えないが分かる。

自分は助かるのだ。

仲間と共に。

ああ、だから私は皆を助けて――。

大きな一歩を踏み出し光のゲートを潜る。

目の前には大きく広がる海と。

「ようこそ深海のお姫様」

こちらへ銃や砲を向ける者達。

中央には指揮官と思われる艦娘が笑いながら自分たちを見ており。

「そして、ささようなら」

パチン

指で鳴らした軽い音が辺りに響くと同時に銃声や砲撃がその場を支配する。

続いて体中に感じる激しい痛み。

私を先導していたル級達が血を流し倒れていく。

そして段々と遠くなる意識の中で私は思うのだ。

みんなと平和な海を……。

脱出ルートを特定しての待ち伏せ攻撃により無事飛行場姫と護衛のル級を排除した時雨は、自分が上げた戦果に思わず笑みを浮かべる。

何もかもが計画通り。

飛行場姫の排除は我が部隊が達成し、尚且つ被害はゼロ。

こうまで上手く行くとは最早笑えて来るな。

戦争は嫌いだ、勝っている内は楽しいものだ。

鼻歌を歌いつつ残敵掃討を行うべく部下達に指示を出す。

さて、とつとと終わらせて帰ろう。

サービス残業なんて御免被る。

同島 陸軍第一挺身団

九九式短小銃による艦式弾や強化型艦式弾を発射可能な九七式自動砲、そして一緒に投下され急遽組み立てた各種歩兵砲。それらが一斉に火を噴き、地上へ展開する深海棲艦を攻撃する。

無論深海棲艦側も黙っておらず、陸軍へと反撃するが地上戦に一日の長がある彼らに對して有効打は与えられていない。

尤もそれは陸軍と同様であつた。

「命中多数、しかし防護膜に阻まれ有効打確認できず！」

「構わん続ける！ 中央に展開する重巡り級へ集中砲火、膜を剥がせ！」

部隊指揮官の指示で分散していた火力を敵中央へと集中、機関銃や小銃の通常弾を含め大量の銃弾や砲弾がリ級へと殺到する。

それは凄まじくリ級の防護膜が見えないほどに波打ち、彼女の姿を隠す程だ。

苦しい表情を作るリ級が堪らず後退しようとした瞬間、彼女を覆っていた防護膜が粒子に変化して飛び散ってしまう。

防護膜が消失したのだ。

当然、陸軍部隊はこの好機を見逃す筈がない。

「今だ、リ級へ攻撃しろ！」

号令と共に銃弾や砲撃がリ級に襲い掛かり、彼女の体を引き裂く。

防護膜が消失した深海棲艦に最早銃弾一つ防ぐ手立てはなく、あれ程苦勞していた重巡級があつと言う間に排除されてしまう。

人型深海棲艦を攻撃するうえで一番の難題がこの防護膜であり、これにより人類側は上手く打撃を与えられない状況が恒例だ。

しかし、今回の様に防護膜を引きはがす。つまり膜が耐えられる装甲強度値をゼロにしてしまえば簡単に排除可能となる。

「敵増援確認！ 戦艦級だ！」

「防護膜だ、先ずは防護膜を減退させるんだ！」

「艦娘部隊はまだなのか!?!」

最初の奇襲で飛行場姫に損傷を与えた結果、空から攻撃される心配は無いが残っていた防護隊が己の主を守るため身を盾にしてまでも防護を行う。

あえて不利な地上で防護に徹するという事は仲間が戻ってくるまで時間稼ぎをする為だ。これにより陸軍部隊は想定したよりも被害を抑えられているが、進撃速度は大幅に遅れていた。

「隊長殿、このままでは予定通りな進行ができません」

「ふむん、いかな。このままでは飛行場姫が修復を完了してしまう」

部隊の指揮官たる山田秀男中佐は思うように事態が進まない中、見た目は焦らずに考察するが心中は穏やかで無い。

彼が話した通り、現状は日本軍が押している様に見えるが実際は追い詰められている

方なのだ。

何故なら敵防衛隊主力が反転して来たら彼らに逃げ場は無く、殲滅させられるしかない。それに飛行場姫が航空機運用能力を回復させても負けは確定、正に時間が経てば経つほど追い詰められる。

それを打開させるには艦娘達による攻撃が必要なのだが、無事に降下できたという連絡以降通信が来ていない。恐らく深海側に傍受される事を恐れて無線封鎖をしているのだろうが、友軍の動きが分からない事は誰をも不安視させた。

また、最終的に攻略成功できれば良いだろうし、時雨側の思惑も理解できるが少しでも将兵の被害を抑えたい山田中佐としてはもどかしく思う。

知らず知らずに溜息をついてしまう彼は今考えても仕方ないと諦め、部下達へ激励の言葉を掛けようと口を開いた瞬間。

『こちら特務第一混合部隊、陸軍第一挺身隊応答を願う』

近くに置いていた通信機から聞こえた声に皆が気付き、驚きと歓喜の表情を表す。
きた！

誰もが待ち望んだ艦娘部隊からの通信に思わず歓声を上げそうになるも山田中佐は、

あくまで冷静沈着を装い通信の返答をする。

「こちら陸軍第一挺身隊隊長の山田秀男中佐だ」

『返答ありがとうございます、こちらは特務第一混合部隊の時雨二等兵曹です』

「こちらこそ、君たちを待っていた。早速だが現在我が隊は飛行場姫が居ると思われる場所へ攻撃を仕掛けているが敵部隊の抵抗が激しく思うように進軍できていない。早急に援護を要請する」

『了解しました閣下、援護は直ぐに向かいます。ですが……』

援護を確約したが山田中佐は言葉を濁す時雨に対して疑問を感じた。

自分は何も変な事を言っていない筈だが何故彼女はここで言葉を濁したのだろう。

もしかして何か問題でも発生したのだろうか。

様々な可能性が脳内を廻る中、次に彼女から発せられた言葉を聞いて彼は思わず呆然としてしまい手にした無線機を落としてそうになった。

『飛行場姫は既に我々が排除致しました』

一瞬何を言ったのか理解出来ず言葉を失う。

飛行場姫を排除した？

そんな馬鹿な、その飛行場姫を排除するために我々が今攻撃をしているのだ。しかも艦娘部隊は見当たらない事から話が本当の場合ここから離れた地点で仕留めたという意味だ。

つまり気付かぬうちに逃げられただと。

一体いつ。

「な、まさか小川や獣道か!？」

思わず出た大声に周りの兵士達は驚いてしまっても気にする山田中佐では無かった。

飛行場姫が居る場所は確かに島の中央に近い場所で、近くには森や山もある。

無論逃走しない様『大きな川や道』に監視員を派遣していたが、全てを見張る事は事実上不可能。だが、敵が逃走するならば多くの護衛が必要と考え大丈夫だと判断したのだが。

『はい、その通りです閣下』

己が至った答えを肯定した者は皮肉にも通信先の時雨であった。

ここに来て彼は自分が大きな失態を犯してしまっていた事実を認識し、同時に通信相手の時雨に救われたと心から安堵する。

もし彼女が今作戦に参加していなければ恐らく攻略は失敗していたであろう。

彼女は我々だけでなくこの作戦全てに参加する将兵を救ったのだ。

彼女の持つ戦闘能力や部隊指揮能力、戦術的判断そして作戦立案能力。

作戦開始前から驚かせられたが山田中佐いや、この通信を聞いている全ての者が理解しそして驚愕した。

正に天才、否鬼才とは彼女の事を言う。

成程、上が彼女を気に掛ける訳だ。

確かに彼女の能力は日本にとって、いや人類にとって必要なものである。

もし、彼女が他国に居た場合を考えると恐ろしい。

「……ありがとう時雨二等兵曹、今後も貴殿の働きを期待している」

『了解しました。今後も全力を持って任務に取り組みます閣下』

山田中佐が必死に震えを堪えながら話した礼に何事もなく返された後、通信は切られた。

彼がふと周りを見ると皆が呆然とした表情になっおり、少し前まであつた歓声や罵声が無くなっている。

勿論無音などではなく遠くから爆音や兵士達の声が聞こえるがこの場に者達にとつてその戦闘音はまるで別世界の様に感じられてしまう。

ハッキリ言つて現実味が感じられない。

時間にして約1分も無かつただろうが彼らからすればその無言な空間は十倍以上に感じており、山田中佐が大きく息を吐くことで漸く打破することが出来た。

部隊指揮官の中には乾いた笑い声を漏らし疲れた表情な者も居る。

誰もが感じたのだ彼女の異常性を。

そして誰のかわからない一言が再び時間を進めさせるのだ。

「俺初めてだよ、戦場で安心できるの」

炎や破壊跡が残る沿岸部。

我々混合部隊は敵残存部隊排除後、本部の指示に従いここへと集結していた。

他部隊の中には占領や野営準備、兵士達の治療など大忙し。

被害が全くない我々が申し訳ない位だ。

確かに色々と危ない場面もあったが、我々は任務を果たし戦果も十分。それに陸軍にも名を売ることができ、正に順風満帆。今後のエリートコースは確定だな。

今後における明るい未来を幻想して思わず笑みを浮かべる時雨だが傍からすると戦争を楽しんでいる様にしか見られない。事実、周りの部下達はその期待に『応えるべく』準備を進めており他部隊は驚愕しつつ余裕がある部隊は彼女に負けじと同じく準備を開始しだす。

そして騒動の中心たる時雨は初め撤収準備かと考え「自分の部下達も早く帰りたいのだ」と内心同調して見守っていたが、作業内容が進むにつれ部下たちの行動を理解して

しまい笑顔が固まってしまふ。

おい、待て貴様ら。

撤収準備の筈だろ。

弾薬と燃料の補充はまだ分かるが何故攻略用重装備まで用意する？

何故私に期待の籠った目を向けるのだ？

気が付けば他部隊も同じ準備をしている為、止めろと言えず自分の思い違いだと祈るが残念ながら彼女の願いは叶わない。

そして準備指揮を執っていた指揮下の海兵隊員と不知火が彼女の前に立ち敬礼して告げられた言葉で時雨の気分は急降下し地面へと激突した。

「隊長、進撃準備完了しました！」

「各小隊欠員なし！」

「燃料と弾薬の消費は共に許容範囲内です！」

「二等兵曹殿、我々は何時でも行けます。どうかご命令を！」

「隊長は仰いました戦果を求めよと、ならば我々はより多くの戦果を求めます！」

早く出撃したいですと犬みたいに命令を待つ部下達に時雨は思わず頭痛を覚える。こいつらは何を言っているのだ。

我々が受け持つ任務は終了しているのだから後は待機の筈。

というか何故部下達が妙にヤル気を出しているか意味が分からん。

確かに出撃前に行った激励は効いたのだろうか此処まで好戦的になるのだろうか疑問だ。

それともこいつ等は初めから戦争狂いな連中で、降下作戦前に震えていたのは唯の武者震いであり私が行った激励は彼らからすれば邪魔だったという訳だろうか。

脳内で様々な憶測がぐるぐると回る中、とにかくこいつ等を落ち着かせて進撃を中止せねば上から命令違反と受け取られかねないと口を開こうとした時。

「時雨二等兵曹」

陸軍の代表たる山田秀男中佐が他の部隊長と共に現れた。

いかん、部下達が勝手に行動していると知られれば指揮能力と部隊運用能力を疑われ降格だ。

ここは私が命令しましたと思わせ渋々引き下がる風を持って行かなければ。

「はい、我が部隊は被害が皆無な為に更なる進軍準備をしておりました」

「しかし、我々の任務は……」

「前線では未だ戦闘が続いており将兵達はその命を散らしております」

「……」

「無論敵が反転する可能性もある為に島の防衛が必要な事は理解しております。ですの
で判断は本部からの返答次第となりますが」

「なるほど」

思案した後、近くで待機していた通信兵に本部へ連絡する様指示を出す中佐を見た時
雨は上手く誤魔化したと安心する。

日本軍が好む高い戦意を示しつつ防衛の大切さを説く。

更に前線将兵の犠牲を苦しく思っているとアピールする事で軍人に必要な戦意と知
能、そして愛国心を相手に思わせる行為は正に完璧。

本部や中佐殿はリスクを考え却下する筈だ。

私はあくまで立案者、上からの命令に仕方なく従う。

これで他部隊にも示しがつく。

打算して思わず不敵な笑みを浮かべる時雨だが上官達は彼女の話と笑みから別な意図を感じ、戦慄した。

この少女は未だに戦果を求めるか。

作戦中に見せた采配と思考、そして戦意。

正に軍人の鑑だ。

それに……

ふと考え、山田秀男中佐は彼女の部下達へ視線を向ける。

敬礼し、今か今かと命令を待つ姿は正に軍人。

艦娘はどちらかと言うと軍人らしくない人物が多く、中には反抗的な性格も居ると聞く。そんな艦娘達をこうまで従わせ尚且つ海兵隊までもここまで従順にさせるとは、彼女が持つ指揮官としての素質は想像以上。

成程、上が彼女に目をかけるのが良く分かる。

ならば彼女に任して問題ない。

結論付けた中佐は本部へ連絡中の部下に耳打ちをして自分の意見を付け加えて連絡

するように指示を出す。

恐らく返答は直ぐな筈だ。

後は部下達にも話を通しておくだけ、彼女なら十二分に扱えるだろう。

そう決意を抱いた山田中佐は目の前の少女を見据え笑みを零す。

対する時雨は己と各部隊長達との思考がすれ違っているとも知らず、本部と話し合いが終了した中佐へ頷く。

気が付いた山田中佐も頷き返し、彼女は確信した。

やはり無理な進撃はできない。

上が判断した以上仕方ない事だ。

「時雨二等兵曹」

「はー！」

山田中佐に名前を呼ばれ、流れる様に敬礼をする。

よしよし。

目の前で早く宣言してくれ。
追撃が無理であると！

「貴官の判断を尊重し、本部と我々各部隊の連名でマライタ島への進軍を許可する」

……ん？

今、変な言葉が聞こえたような。

いや、きつと聞き間違いだ。

我々の任務は降下作戦における敵航空能力を排除する事及び占領である。

間違ってもソロモン諸島全体における全作戦に携わる必要は——。

「このまま敵戦力排除に死力するように」

聞き間違いじゃ無かった……。

馬鹿な、一体何がどうしてそんな結論になる!?

「また、陸軍と海軍からそれぞれ水歩兵を一個小隊ずつ貴官の部隊に預ける。頼んだぞ！」

尚且つ責任倍プツシュ。

何故そんな方向に行く。

まさか本部は我々の働きをそして戦果を不十分と考えているのか。

もしくは前線での戦況が悪いとでも。

そう考えると不味い。

上が想定したよりも戦果報告が少ないと判断したのなら中佐殿が仲介したお陰でマライタ島攻略だけで済んだと考える必要がある。そうなるならば私は陸軍へ貸しを作るところか作られてしまったではないか。

これまで散々お膳立てしてもらい更に期待までされたのに陸軍に貸しを作ったと海軍上層部に知られたら私の人生が終わってしまう。

具体的には後方キャリアの夢が絶たれる。

くそ、ならば求めるのは更なる進軍だ。

深海棲艦共の戦力分布と混乱状況を考えるなら十分可能であるし、どうせマライタ島攻略を任せられた状況なら変わらん。

本当は拒否したいし逃げ出したい。

だが私の立場と状況がそれを許さないのだ。

全く自分の不幸を呪うべきか我が軍の状況を嘆くべきか……。

嫌々ながらも思考と覚悟を纏めた私は山田中佐へと声を掛けるのだった。

それと今回の反省を生かし、部下達への指示は自分が終始行おう。

有能な部下も考えものだな……。

「ん、何かね二等兵曹」

時雨の希望を叶えた中佐は、先ほど命令を下した彼女に声を掛けられ返答をする。彼からすればマライタ島攻略に関する質問だと予想した為に何も気にしなかった。

逆に装備の補充だろうかと考えて出来る限り希望を叶える思いでいたほどだ。

今作戦で飛行場姫逃走という陸軍が犯した汚点を拭い去ってもらったばかりか、その後における支援でも十二分に働いてもらいこれ以上無いまでの借りを作っていた陸軍としては断れない状況と言える。尤もこれから死地に向かう者に敬意を払わなくては帝国陸軍否、帝国軍人として恥と考える彼らにとつて最初から断るつもりなど無いが。

それに切れ者の彼女直々に願うというならば何か作戦に重要な内容に違いない。一体どんな内容なのだろう。

内心緊張と好奇心に駆られた中佐達だが時雨が発した言葉により再び驚愕する。

「我が隊はマライタとサンタイサベルの両島同時攻略を提案致します」

第六話 「マライタ島の死闘・上」

恐怖感を持つ人間は、善いことよりも悪いことを信じやすく、悪いことは誇大に考えやすい

——カール・フィーリップ・ゴットトリップ・フォン・クラウゼヴィッツ——

1940年 4月 トラック諸島——ソロモン諸島間海域

青い海を朝日が照らし、神秘的な光景を生み出す海域。

黒から白そして青へと変わりゆく空も合わさり、美しさに磨きが掛かるといふもの。しかし、残念ながらこの風景をのんびりと眺める余裕など誰一人とて居ない。

「菊月、左距離1400から敵水雷戦隊接近！」

「了解した！」

僚艦である長月のサポートにより深海棲艦の接近を感知した菊月はすぐさま攻撃目標を視認して反航戦へと移行、攻撃を開始する。

対する深海棲艦は全艦『無色』の軽巡ホ級1隻と駆逐艦イ級5隻からなる標準的な水雷戦隊で、単縦陣を維持したまま彼女達に突撃を行う。

上位個体が指揮しない限り簡単な陣形や攻撃しか行わない無色艦隊であるが低練度艦では厳しい相手だ。しかし、相手にとつて残念ながら菊月の所属する艦娘艦隊は決して低練度ではなくその逆の高練度艦隊であった。

手に持つ単装砲が火を噴き砲弾が狙い澄ました様に一隻のイ級を撃ち抜く。

中央を撃ち抜かれ内部で爆発したイ級は断末魔を上げつつ海中へと引きずり込まれ、続けて海中にて爆発したのか大きな水柱を生み出す。

恐らく弾薬庫が後から爆発したのであろう。

行き成りの味方喪失に敵は一瞬行動が鈍くなる。

『無色』は士気が落ちないとはいえ多少ながら思考を有する為に動揺は見せる事が多々あり、特に予想外の事態が起こると明らかに動きが鈍るのだ。

そしてそんな好機を見逃す菊月ではない。

「行け！」

続けて放たれる砲撃は避けたホ級の後ろに居たイ級へと命中し先の艦と同様に海中へと招待させた。

続け様に味方を沈められて菊月を脅威と認めたらしく直ぐに反撃へ転じる。しかし、脅威となるのは彼女だけではない。

「私を忘れるなよ！」

菊月と同じ黒い水兵服を着こなし長い緑の髪が特徴的な少女、長月が菊月へと注意が向いたのを見計らい敵に発砲。

3 発攻撃を行い 2 発は最後尾のイ級へと命中させて撃沈に成功。1 発はホ級へと当りダメージを与えた。

敵を発見してから僅か 3 分足らずでイ級 3 隻を撃沈しホ級 1 隻に損傷を与える姿は正にエースたる姿で、他の艦隊が驚きを見せる程だ。

しかしそれで満足する彼女達ではない。

二人は砲撃をしつつ接近を行い魚雷発射のタイミングを計っていた。

無論それは敵も同じで、深海棲艦達は立て直した陣形を維持しつつ菊月達へと接近しながらの砲撃を行う。

互いに回避と砲撃を維持しつつの全速力接近な為か命中弾は見られず周りに水柱が上るのみ。

しかし、両者共に元より期待していない。

勝負は魚雷を放つタイミングとその後の行動だ。

早すぎず遅すぎず、更に回避行動を予想して魚雷を撃たなければ。

菊月が内心そう考えてより加速させると敵との距離を再び計算しだす。

850 を過ぎた。

これ以上は回避しきれない可能性があり危険かもしれない。

しかしまだ大丈夫、何故なら自分達の練度なら問題なく回避可能と判断しており尚且つ敵は『無色』な為に砲撃精度は色つき共に劣る。

ならば限界まで近づく。

距離が800を切り深海棲艦側が魚雷を発射、同時に回避行動へ移行するのを確認。

それを見て私は内心早まったなど敵に対して愚かに思い微笑む。

どうやら勝負運は私に向いているらしい。

敵が放った魚雷の方向を予測しつつ緩やかな回避運動、つまり敵への接近ルートを多少変えながら移動し念の為にソナーへ意識を集中させた。

すると脳内にスクリーン音を感じ。

矢張りルートを変えなかった場合の航行上に向かっているのを補足できた。

「単調すぎだな」

思わず漏れた言葉に笑ってしまう。

やれやれ、本当に昔と比べて説教臭くなったな。

距離750。

もう少し、もう少しだ。

まだ詰められる。私なら出来る筈だ！

そして距離が700に達した時、私は魚雷を敵の未来予測位置と回避予想位置の両方に発射させ同時に距離を再び取り始める。それは僚艦の長月も同様で彼女も魚雷を発射させた後は離脱を開始した。

「しま——!？」

隣から聞こえた声に驚き思わず顔を向けると駆逐艦の砲弾が掠ったのか、防護膜を少し減退させた長月が表情を強張らせている。

恐らく離脱の瞬間避けそこなったのであろう。

艀装や体に被害は見られないが、余程当たった事が癩に障ったのか敵を睨み続けた。た。

その姿が少し可笑しくて戦闘中だというのに私は思わず吹き出す。すると彼女が怒りの視線を敵では無く私へと向け、まるで拗ねた猫の様だ。

おいおい、ミスした君が悪いだろうに。

そんな事を考えていると爆発音と共に深海棲艦達の悲鳴が耳に届く。

確認すると先程撃った魚雷が見事に2隻へ命中し、轟沈しているのを見る事が出来た。

16発中2発命中か、あの近距離で考えるとまずまずだな。

残念ながら残り1隻は取り逃したらしく、不利と判断してか急いで離脱をしている。しまった、詰めが甘かったか。

「1隻逃げられたか……」

距離を考えると追いつくのも砲撃を当てるのも難しいと判断し早期に別な獲物へと目標を変更、移動を開始した。

ああクソ、油断したつもりは無かったのに。

「残念だったな」

声を掛けられ再び長月の方を見ると顔をニヤニヤさせながら此方を見ており、此方を

からかっているのが見て取れる。

先程の仕返ししか？ というか貴様も同罪だろうが。

同僚の対応に溜息を吐くもこれ以上構っていられんとはかりに新たな獲物を探し始める。全く、戦場での緊張感が欠けているのでは無いか。

そう思いつつ他の戦闘場所へと移動しようとした時、視界の端で黄色い影がチラつき思わず其方へと顔を受けたら彼女を見つけてしまう。

我らが旗艦の夕立だ。

耳を思わせる跳ねた髪型に赤い瞳、そしてマフラーが特徴的で首には他の夕立には無いネックレスが掛けられている。

そして何よりも彼女が持つ独特の雰囲気と同種艦との違いをより鮮明にさせた。

まるで猛獣が如く荒々しい空気を身に纏いながら何処か知性を感じさせる変わった感覚、例えるなら獲物を知的に狩る狼や虎という頭の廻る獣に近い。

そう考えると他の夕立も凶暴な面が見られるが所詮獵犬止まりだ。

どうでも良い事を考えながらも彼女を見てるとふと相手にしている深海棲艦が気になり夕立の視線を辿り目標を目にした瞬間、思わずギョツとしてしまう。

赤いオーラを身に纏い夕立の攻撃を避ける重巡洋艦リ級だ。しかも部下に同様の赤いオーラを身に纏う二級まで着いており、最早声も出ない。

「おい！ 赤色のリ級1隻と二級2隻が相手とか正気か!？」

長月が驚きの余り大きな声を出す中、私は夕立に加勢すべく向かおうと考えた。流石の彼女でも一人では無理だ。

此方が奇襲して出来るだけダメージを与えなければ。そんな思いに駆られて動こうとした瞬間。

『私に任せてほしいっばい』

通信機より聞こえた静かな声が私の動きを止める。

考えるまでもなく我らの旗艦であり目の前で戦っている駆逐艦夕立である。何を考えている。

そう考えた次の瞬間、目の前の夕立が急加速して敵へと突っ込む。

一瞬此方を見て目を合わせたから理解できたが恐らく手出し無用という事、あれだけ

の相手を一人で問題なく排除できる自信があるらしい。

敵の攻撃を回避しつつ攻撃を加え敵防護膜に命中、減退させていく。

前後にそして時には横へとジャンプして無理やり軌道を変えまたある時は体を回転させ華麗に奴らの攻撃を回避そしてカウンターを叩き込む。不規則でしかしどこか規則性を感じさせる姿はまるで獲物を追いかける豹を思わせてしまう。

「凄い……」

思わず口にした言葉は私と長月どちらの物か、しかし彼女が行う戦闘は正に言葉の通りで私たちは自然と魅了されていた。

「ぼー……」

ふと彼女が気合の入った声を発したと思ったたら黒い筒の様なモノが体を回転させた時に発生した遠心力を利用して投げられる。

それは艦娘の力と遠心力が加わった為か物凄い速度でリ級へと飛んで行き防護膜へ衝突、大爆発を起こす。

これには大変驚き、多分敵も驚愕した筈。何時の間に爆弾なんかを持っていたんだ？

疑問に思い私は夕立を良く観察するも爆弾らしきものは見当たらない。

そもそも艦娘の装備に投げる為の装備など存在しない筈、ならば何処から。

思考の渦に囚われそうになる中、夕立の姿を良く観察した時にふとある変化に気づき同時に答えを導き出した。

装備している魚雷がさつきより一本減っている……あいつ魚雷を投げやがった!?

爆発物が何なのか漸く分かった私だが、魚雷を放つのではなく投げるとは思いもよらなかった。

否、普通魚雷を投げて当てるなど技術的に難しいいうえ考えない筈。

確かに魚雷を投げる事によって普通に攻撃するよりも早く敵にぶつけられ、敵からすれば回避も難しいだろう。だが言うのは簡単だが投げる角度や敵の位置、信管部分の衝撃を考えずに投げると例え当たったとしても不発が普通だ。そもそも魚雷は海に放ち進むものであって、投げるなど誰も考えていない。

そんな馬鹿馬鹿しい攻撃だが効果は絶大だったらしく命中したり級の防護膜は既に

何発か砲弾を受けていたこともあり消失、最早守る手立ては何もない。そしてそんな好機を逃す夕立でもなく消失直後に夕立から放たれた砲弾がリ級の胴体に直撃、風穴を開けてリ級は後ろへと倒れてしまう。

正に流れるような攻撃だった。

一番の脅威を短時間でしかも想定外な方法で排除する様はまるで悪い夢を見ている気持ちだ。

彼女は本当に駆逐艦なのか。

別なナニカの間違いでは？

余りにも非現実的な出来事の連続に私は戦場のど真ん中で呆然としてしまう。

本来ならこの様な失態はしないが今回ばかりは仕方ない。

だつて有りえないんだもん。

結局、その後の二級撃沈も彼女一人で行うが私としてはもうどうでも良かった。

唯己がライバル視している人物がとんでもないバケモノであると再確認出来た事が何よりも問題と感ずる。

私も彼女の様に出来るだろうか。

彼女の様な圧倒的強さを身に着け、活躍できるのか……不安だ。

先の戦闘を思い出し思わず弱気になるが自分らしくないと気づき否定するが如く首を左右に振る。

否、成ってみせる。でなければ今までの苦勞が全て水の泡と化してしまふ。

私は彼女の副艦でありライバルだぞ。

こんな所で弱音を吐いてどうするんだ。

奴を追いつき追い抜きそして私が艦隊の旗艦となる。

今回は認めよう。確かに奴の方が性能や技量共に上であり今の私では到底追いつけない存在、ならば追いつける様努力するまで。

見てろよ、何時かきつと追い抜いて見せる！

だから先ずは魚雷の投擲練習からだな。

同時刻　マライタ島近海　特務第一混合連隊

各前線が奮闘している頃、とある場所でも深海棲艦相手に命と昇進を賭けた戦いが繰り広げられていた――が。

「敵輸送船撃沈！」

「同じくこちらも敵を始末した！」

「入れ食い状態だ！」

深海棲艦に対する更なる後方かく乱と前線部隊支援の為に進軍した特務第一混合部隊であったが、彼らの戦いは最初から出鼻を挫かれてしまう。それは想定上の損害や予想外のトラブル等ではない。事実、部隊の損害は無くそれどころか絶好調で戦果記録を更新中。俗にいう嬉しい誤算状態だ。

これは深海側と人類側（時雨側ともいう）の思惑が変な形で合致？ してしまった故の事故であり喜劇である。何せ遭遇した相手は時雨達が想定していた敵精鋭部隊や大規模な防衛部隊ではなく。

「まさか敵の大規模輸送船団が待機していようとは……」

「凄いです二等兵曹！ 沈んでいるのはどれも敵ばかりですよ！」

喜ばしい事だが余りにも都合が良い出来事に嬉しさと困惑が入り混じる時雨とは違い隣に居る萩風は素直に大はしゃぎしている。恐らく萩風はこれも時雨の想定通りと思つて素直に喜んでいるのだろう。

彼女率いる特務第一混合部隊及び陸海空挺2個小隊が合わさった即席合同部隊、通称

特別進軍部隊は時雨曰く『上層部の無茶な突撃命令』によりマライタ島攻略を現在進行形で進めていた。

作戦内容は機動力を持つてマライタ島へと奇襲し敵戦力を撃滅、その後前線部隊が戦線を押上げると共にサンタイサベル島に再進撃を実施、挟撃するという内容だ。

この時上層部や各指揮官達は深海棲艦部隊の多くが各前線海域及びサンタイサベル島とパプアニューギニアに展開していると考えておりマライタ島は手薄と判断した。そして手薄な同島を早期に占領することにより敵を圧迫、反抗手段を奪うという野心さ満載な作戦となる。

幸い机上の空論作戦は現在において問題なく進められており、結果的に奇襲は成功し大きな戦果をもたらす。

二つの予想外な事態を除いて。

まず一つ目は、マライタ島近海に展開する深海棲艦の大規模輸送船団の存在であった。

この輸送船団は元々深海棲艦が反撃に転じた時に必要な各種物資を前線へと送るために集められたものであり言わば彼女らにとって生命線と言えよう。

そもそもマライタ島はトラックと主戦場なサンタイサベル戦線における深海側の隣島なのだ。

人類軍の集結を聞いた飛行場姫と泊地棲鬼は互いの意見を交換し合い主戦場となる戦線後方又は隣島に補給用物資や反攻作戦用物資を集める様指示を出していた。これは主戦場となるパプアニューギニア島近くやサンタイサベル島では大量の物資を運搬した場合、最悪焼かれてしまう可能性が出た為である。また、両島は長年続いた人類側の攻勢により島の戦力分布や重要区画を把握されている可能性が高く最悪短期間で陥落する可能性も視野に入れていた。その為ゼロではないが襲撃回数が少なく尚且つガダルカナルからの援軍が期待しやすいまライタ島をサンタイナベル方面、パプアニューギニア島とガダルカナル島の中間地点にあるニュージョージア諸島がラバウル方面と言う形で物資や輸送船を集結させていた。

マライタ島を敵が攻めればサンタイサベルとガダルカナルによる挟撃が出来る事から敵はこの島には攻めてこない。それでも『もしも』を考え物資集積場所や輸送船団は『ガダルカナル側』の沿岸や沖合に集める為敵が早々に破壊する事は不可能。

よって補給に関する心配は無用であると結論付ける。

確かに彼女達の判断は普通なら正解だろうし同じ状況なら誰もが似たような策を講じるだろう。

後世の歴史家たちは皆が当時の情勢や作戦立案を考えるなら正道と答え彼女達を優秀な指揮官と評した。

だが彼らは同時にこう言い放つ。

彼女達は不運な指揮官たちであると。

前線へと届ける各種装備や物資を満載した輸送ワ級、未だ地上に荷揚げさせられていた燃料弾薬が『ガダルカナル側』海岸又は近海に多くあり、護衛も少ない。

そんな場所へ時雨達の特別進軍部隊が襲撃した結果、深海側の策は全て裏目に出た。

近海や沿岸に停泊していたワ級や人類が残した輸送船を接收した深海輸送船が。

直ぐに積み込める様にと陸に集められていた各種物資が。

各種等級の深海棲艦に直ぐ補給できるよう整備された海上給油設備が。

そして反攻用に用意した新式装備や果ては小規模な整備施設が。

それらが全て炎を上げて燃えてしまう。

正に海を埋め尽くさんばかりに集結していた輸送艦隊は撃てば当たる程で、時雨達の部隊に攻撃を受けて次々と海中へ没していく。

流れ弾で地上に命中すれば山積みになされていた補給物資や簡易施設に命中し大きな炎を巻き起こす。

中には自衛用の装備で反撃しようとするがその様な武装で対抗できる相手でもなく無駄な足掻きに終わってしまう。また、周辺に展開していた護衛部隊も少数しか居ないた為に数や錬度で勝る敵部隊に完敗してしまい最早誰も止める事は出来ない。

結果、最初に部隊員達が述べた様に入れ食い状態となったのだ。

この事態に一番慌てたのは当然現在で最高指揮官となった泊地棲鬼である。

確かに物資積載地点を攻撃されれば誰でも慌てるだろうが、今回の襲撃は度を越えていた。それどころか彼女が被害を拡大させた要因の一つを作り出していた。

これが二つの目要因で、同時に時雨達の戦果を更に拡大させる原因だ。

まず、先に述べた様に人類側は泊地棲鬼をパプアニューギニア島もしくはサンタイサルにおいて前線指揮を執っていると考えていた。しかし蓋を開けてみればガダルカナルに近いマライタ島で指示を出しており人類側の予想を外してしまう。

何故予想を外してしまったかというところには今回行った電撃戦が深く関係しており、泊地棲鬼が普段とは異なる行動をした原因と言える。

今までは人類側が攻略作戦を実行する度に各地前線にて対応した彼女だが電撃戦により各戦線の混乱と敵進撃速度が思ったより深刻で遠海における戦線維持を早々に放

棄、敵が息切れと空爆の被害で進撃が滞った時点で反撃する策へと変更した。

その為に戦力をパプアニューギニア島及びサンタイサベル島の沿岸部へと集結させ、両島近くにあつた前線保有分の補給物資も中間補給島へと後退させてしまったのだ。

普通に考えると堅実的で尚且つ臨機応変な対応も可能と大変有効な判断だが今度ばかりは逆に悪手であつた。更にはガダルカナル陥落による指揮系統混乱が対応の遅れをより明確にさせ正に深海棲艦にとつて悪夢と化す。

敵襲撃を聞きつけマライタ島の前線方面、つまり輸送部隊とは反対側に居た拍地棲鬼が駆けつけた頃にはもう手の施しようが無い状況だつた。

護衛につけた僅かな艦隊が全滅し輸送艦隊と地上の集積地点が炎に包まれている様は正に煉獄、この光景を目にした彼女は安心してしまい思わず膝をついた程であり正に絶望的な状況としか言えない。

そして彼女は確信してしまう。

ソロモン諸島防衛戦は完全に破綻したのだと。

「戦艦含む艦隊発見！ 機種は全て黄色！」

「こちら第二小隊、敵水雷戦隊確認！ 黄色雷巡を旗艦として赤色の駆逐級5隻が突っ込んで来ます！」

「敵増援は両方私と第一小隊が引き受ける。萩風一等水兵を旗艦とした艦娘部隊と他の水歩兵は此の俣輸送部隊を叩け！」

敵増援を報告された時雨は現在の戦力と作戦時間を考えて部下達に全て任せるのを愚策と判断、直ぐに自分と海兵隊一個小隊で当たる旨を伝えると攻撃を開始する。

指示を受けた部下達は疑問に思う事無く直ぐに現在相手をする深海棲艦を片づける為により一層の攻撃を行い次々と排除していく。

「敵は上位種が殆どだが気にするな、殺してしまえば変わりない。全て狩り獲れ！」

「「Yes, ma'am！」」

時雨の激励を受けて海兵隊が歓喜を含む返事をし、次には全員散開してしまふ。

それらは一糸乱れぬ見事な動きで小隊員達が仲間の動きを全て把握し尚且つ敵がこれらの動きにどう対応するかを理解していた。

高練度では片付けられない常識外の動き。

敵の動きを知りつくし次に執るべき最善を個々が即時判断、実行可能かつ想定外の事態にも対応可能。言うのは簡単だがこの時代からすれば有りえないもしくは一部にしか存在しない能力者集団だ。

何せ彼らは初期の頃から時雨と共に戦場を駆け巡り、共に訓練へ取り組み彼女が指揮官となつてからは指導者として様々な知識を身に着けた者達である。その結果彼ら第一小隊は、持ち前の練度も合わさり精鋭部隊どころか未来でいうデルタやSASに近い性質を持つ『特殊部隊に近い』存在へと変貌してしまう。

その能力は凄まじく市街地戦や非正規戦、工作戦といった知識や技能まで空いた時間を利用して習得してしまい他部隊からは日本帝国の暗部ではないかと噂される程なのだから。

尤も一番の原因たる時雨は訓練している内にこうなつたという認識だが。

尚、この報告を受けた上層部は彼女に大規模な部隊を預けるか本当に秘密裏な特殊部隊を作らせるかを本気で検討しているらしく、もし本人の耳に入れば確実に頭を抱える

に違いない。

話しを戻すと彼らは正に精鋭中の精鋭と化し、次々と深海棲艦を沈めていた。

全員で散開しつつも敵が味方へ砲撃するタイミングを見計らい攻撃して妨害及び損害を蓄積させ、周囲に残っているワ級を盾として使い隙を見れば即座に艦隊行動を乱させる。

これらを全てロス無く瞬時に熟す。

相手にしている雷巡チ級は決して弱くない。否、どちらかと言うと黄色な事も含めて大変強敵であり間違っても水歩兵が一個小隊で相手をして良い相手では無いのだ。しかし彼らは手下の赤色駆逐級5隻も一緒に相手をしつつ確実に仕留めていた。

チ級が散開をして敵の攻撃を分散させようと指示を出そうとした瞬間、小隊員で直ぐに攻撃に転じられる者達が彼女に対して攻撃を殺到させ命令伝達を阻害、そして大きな被害を与えてしまう。

無論黙っている深海棲艦では無く、部下の駆逐級達が援護をしようとするも後ろへ回り込まれた別な者達に攻撃を受けて沈黙を余儀なくされる。幸運にも攻撃のタイミングを掴んだ艦も居たが敵が直ぐにワ級の影へと隠れてしまい攻撃を即座に中止せざるを得ない状況になる。

正に一方的な展開であり最早リンチとしか言えない。

この行動を繰り返された結果、知能以外に装甲や機動性という性能面も強化されている黄色と赤色の深海棲艦達といえども既に限界を迎えているのは目に見えて明らか。

互いを補助し合い脱落者を出さないようにしていた深海棲艦だが最後尾の駆逐口級が弾薬庫へ被弾し轟沈、続けて雷巡チ級も防護膜を消失させてしまい部下の後を追う。艦隊の頭を失い尚且つ数を減らした彼女らに勝利は最早有りえない。

旗艦沈没後も駆逐級達は抵抗を続けるが3分後には全て海中へ没し、水雷戦隊は全滅する。

それは戦闘開始から10分足らずで正に彼らの精鋭ぶりを見せつける戦いであった。

有能な部下達がそんなバケモノ染みた戦いを繰り返している中、彼らの飼い主たる時雨は一人で戦艦含む艦隊を相手に奮闘していた。

相手は戦艦夕級1隻と軽巡ホ級2隻、二級3隻で全艦黄色である。

駆逐艦が戦うには余りにも荷が重い艦種であり、更に高練度と高性能な黄色となると普通の艦娘なら絶望して諦めるしかない。

だが彼女は違う。

時雨は脳内で敵の攻撃を予測、それと同時に海兵隊同様ワ級を盾にして遠距離からの

攻撃を防ぐ。

対する深海棲艦も味方への誤射を防ぐ為に遠距離攻撃を控え近距離戦を選択、回避行動を執りつつ速度を上げて接近する。このまま接近を許せば時雨の不利は明確、だからこそ砲撃をしつつ魚雷を放ち少しでも数を減らそうと努力した。

しかし黄色タイプの深海棲艦ともなると相手が執る行動を予見するなど造作もなく、難なく砲撃を回避して魚雷も相手が発射したタイミングと方向を考えれば容易である。また、ソナーを使い魚雷を探すことも抜かりない。

更に付け加えるなら砲撃は深海棲艦に当たる予想位置にも撃たれていたがどちらかと言うと艦隊周辺に着弾する事が多く、砲撃精度が悪い事が伺える。

これには夕級達も予想外だったが敵の主砲に何か問題が発生したか想定よりも練度が低いのだろうと結論付け思考から外す。

距離が段々迫り互いの顔が見え始めた時、それぞれが抱く感想は全く別なものであった。

深海棲艦側はこんな塵芥に輸送船団が壊滅させられた事実を苛立ち、逆に時雨は想定以上に敵が馬鹿である事感謝する。

それが互いに判明したのは正に顔が確認できる距離まで近づいた時で（それでも人間が視認する距離よりも遠いが）それぞれが表情を見て次に浮かんだのは次の様な思考

だ。

『何故奴ハ、余裕ナノダ？』

『頭に血が上る馬鹿が』

時雨が少し前に発射した魚雷は大きく回避した事で不発に終わり最早深海棲艦に決定的なダメージを与える事は不可能。間もなく接近戦である為に副砲の発射準備を整える夕級は勝利を確信して攻撃用意と部下達に指示を出す。

仲間達ノ仇ダ！

心に憎悪と仇を取れる喜びとが絡み合い砲撃を開始しようとした瞬間。

隣から聞こえた砲撃の着弾音とは異なる爆発音により思わず視線を向けてしまう。

そこには爆炎に包まれ沈みゆく仲間が居た。

「ナンダト!?!」

思わず口から飛び出す驚愕した言葉は他の仲間達も同様で何があったのか分からない状況だ。

しかし彼女達は続いて起こる出来事で更に混乱する。

今度は右後ろに居た二級が爆発し海中へと引き込まれていく。

そして再びの爆発、今度はホ級だ。

あつという間に2隻が沈められ1隻が大破、戦力の半数が無くなっていた。

何ダコレハ、一体何が起キテ!?

艦隊が狼狽する中、大破したホ級の破損部分を見て夕級は驚愕してしまう。

喫水線下部分に入る大きな損害、そして浸水状況。

間違いなく魚雷で受けた傷である。

驚かずに居られない。何故ならば彼女達は時雨が魚雷を発射する瞬間を見逃さなかったし、その後も『彼女から目を離さなかった。』確かに砲撃による着弾音によりソナーが利かない状況だが発射角度や位置を割り出せば避ける事など容易い……。

此処まで考えて夕級はある事実が気が付く。

何故急に砲撃精度が悪くなったのか？

本当に敵を一瞬たりとも見逃さなかったか？

先程奴が浮かべていた余裕な表情は？

全ての疑問と思考が合致した時、ある結論が彼女にもたらされた。

「マサカ!？」

もう少し頭が回ると思ったが意外と鈍いな。

そう心の中で愚痴る時雨は見事に魚雷が命中した敵艦隊を見つめ、続いて予備も含めて空となった魚雷発射管を見据える。

全く、一瞬ワ級の陰に隠れたら普通は攻撃を予見するだろう。

原理は単純明快で敵の砲撃に対してワ級を盾にして回避する際、魚雷を少しずつ発射していたのだ。

良く勘違いされがちだが第二次大戦の魚雷は誘導能力こそ無いが事前に入力された方向へ転換して向かわせる事が可能で、艦後方から発射した魚雷を海中で方向転換させて艦前方へ進ませる事も出来る。その機能を利用すれば残骸等で隠れた隙に魚雷を発射させ敵進路上へと向かわせる事など造作もない。

尤もこの機能の欠点は実際に敵へと狙い放つよりも命中精度が落ちる点と方向転換の調整が面倒な点であるが。

さて、仕上げとするか。

そう決めた私は隠れていたワ級残骸から飛び出し、敵へと疾走し出す。

様子を見る限りあの後も命中したらしく、夕級が中破で二級が残り一隻という状態だ。

命中率が悪いとはいえ結構当たるではないか、よし今度からこの方法を多用してみるのも良いかもしれん。

行き成り飛び出した私に敵2隻から砲撃が殺到するが精度も統率も取れていない攻撃など恐れる必要などない。此の俣回避行動を執りつつ一気に片づけてやろう。

早急に判断を下した私はまずは残りの駆逐艦である二級へと主砲を向け発砲、一撃で仕留める。

流石に強化型だろうがこの距離なら一撃か、何とも呆気ないな。

続いて既に防護膜が消失した夕級へと砲撃するが此方は先程沈んだ二級とは違い咄嗟に回避して難を逃れた。

未だにやる気十分とは恐れ入ってしまう。もし彼女が艦娘で私の部下だったなら上手く活用してやったものを、運命とは残酷だ。これも全て存在Xが悪い。

全く、戦争は優秀な人材を擦り減らすから嫌いだ。

人材と資源、そして時間の無駄遣い。

早く平和な時代になつて欲しいものだな。

そうこう考えている内に私は避けた拍子でうつ伏せに倒れてしまった夕級へと近づく事が出来た。

避けたのは良いが受けている傷が深いらしい。

早く楽にしてやる事が優しさだと思いつの頭へと主砲の砲身を押し当てる。砲身からガタガタと振動が伝わる事から恐らく震えているのだろう。

死ぬのが恐ろしいと思う感情は正常な証拠だよ。
喜びたまえ。

だが。

「すまないね」

悲しいかな。

「これも戦争なんだ」

そして悪魔は笑いながら引き金を引く。

一先ずこの場へと駆けつけた敵戦力の撃滅に成功した時雨は、予想以上に稼げている戦果を心から喜び外から分かる程機嫌を良くしていた。

初めは都合良く敵の輸送船が多く集結しているのを見て畏かとも考えたが蓋を開けてみればそんな事も無く順調にスコアを稼げてしまい流石の彼女も思わず顔を引き攣らせてしまう。しかし、今では気にするのが馬鹿らしいと考え自分の手柄として純粹に喜んでゐる。

輸送船団や物資を破壊する他、輸送船を盾にする事で敵の高錬度艦隊を容易く撃滅を行う。それは正にボーナスポイントだと彼女に思わせこの結果を喜ばない人が居るならば頭がイカレテいるか飛び切りのマゾであると心から断言する程だ。

「よし、諸君良くやった。だが遠足は帰るまでが遠足だ。油断なく残りの敵を掃討しつつサンタイサベル島に進軍するぞ、良いな?」

「Yes, ma'am!」

見事な敬礼を返され時雨は思わず不敵な笑みを浮かべ彼らの返答を嬉しく思う。

全く、敵地へと我が部隊だけで突っ込めという命令を受けた時はどうなるかと思つたが予想以上に楽で尚且つポイントも稼げる美味しいものであつた。そう考えると上層部が我々に進撃を命じたのは幸運であつたな。それどころか上は此処に輸送部隊が居たことを予見していたのかもしれない。ならば期待に応えるために精々暴れるとしようか。

とても明るく嬉しい結果に私は年甲斐もなく喜びたい気持ちを押さえつけなるべく平常心を保つ。

さて、早く残敵掃討を済ませてサンタイサベル島へと進撃せねば。折角戦果を示したが任務を疎かにしては元も子もない。

そう考えつついざ移動しようとした時、私の近くに大きな水柱が上り視界を遮る。続けて遠くより主砲の発砲音が聞こえ敵からの砲撃だと瞬時に理解した。

「——ッ!? 総員敵輸送船の蔭へと飛び込め!」

咄嗟に指示を出し残骸や大破状態の輸送船を盾にすると敵からの砲撃は止み辺りには不気味な静寂が漂う。

馬鹿な、一体何処から。

「敵を確認! て、敵は泊地棲鬼です!」

「な!?!」

深海棲艦を発見した部下の言葉に思わず驚きの声を出してしまう。

そんな馬鹿な、作戦前に聞いた情報では泊地棲鬼はサントアイサベル島又はパプアニューギニア島で指揮を執る筈。何故マライタ島で姿を現す!

想定よりも早く敵は混乱を脱して急行した?

敵の欺瞞情報に引っかけた?

それとも泊地棲鬼がもう一隻存在したのか？
分からない。

私の脳内は様々な可能性を想定しては吐き出すが結局答えとは断言できない。いや、そもそもそんな事を悠長に考えている場合では無い筈だ。奴は此方が暴れまわったせいでお怒りらしく、双眼鏡越しで見える憤怒の表情から凄まじい殺気を感じさせる。兎に角本部へ連絡を取らなくては、最早無線封鎖の意味も無い。

「H Qへ至急連絡し、作戦遅延を伝えろ！」

私が部下へと指示を出して長距離通信による状況報告と作戦遅延を提言しようとするが……。

「駄目です！ 本部との連絡、付きません！」

「短距離通信でも試みましたがガダルカナルの部隊と繋がりません！」

帰ってくる返答は絶望するに足りるものだった。

馬鹿な、この距離ならば通信は可能な筈だ。それなのになぜ連絡が付かん!?

まさか!?

私はある可能性を考え双眼鏡でもう一度泊地棲鬼の艦隊を細かく確認するとある物を見つける。

それは泊地棲鬼後方に居る黄色いル級で、奴は背中に大きなドーム状の装置を背負っていた。

間違いなく電波妨害装置だ。

何てことだ!

余りにも悪い状況に私は思わず元ワ級と思われる残骸へ思い切り拳を叩き付けてしまおう。

不味い。

実に不味い事になった。

こちらは作戦がまだ完遂していない為に逃亡が不可能。では逃げながらサンタイサベル島へ向かえば良いとも思えるがそんな事をすれば我々が逆に包囲殲滅されてしま

う。更に付け加えるなら作戦時間にも限りがあり此処で泊地^奴棲鬼^ら達を相手にすれば確実に間に合わないのだ。

つまり両島攻略と後方からの攪乱に支障が出てしまう。

本部や中佐達が態々進撃を命令したほどだ。恐らく前線における戦力と時間的余裕は殆ど無いと想定すべき。

命令違反は重大な国家における反逆行為。

良くて前線での酷使。

悪くて銃殺。

最悪だ。

ならば執るべき行動は唯一つ。

「萩風一等水兵！」

「は、はい！」

私の呼びかけに近くの残骸から声がして其方へ顔を向けると萩風が涙目で残骸から顔を覗かせていた。

隠れろと言ったが、そんな頼り無い表情での隠れ方は軍人としてどうなのだ？

「萩風一等水兵、これから私と two man cell で行動してもらおう」

「え？ つーまるせる？」

「ツーマンセル、つまり二人一組として働けという意味だ馬鹿者！ 貴様はもう少し英語を憶えろ！」

「す、すみません！」

これから僚艦として働いてもらう予定の萩風にだらしなく応えられると不安になってくる。本当に大丈夫かこいつ。

しかし、時間は敵だ。

ならば私にとって一番カバ―能力を發揮してくれる彼女を僚艦として傍に置き、残りの4名を第一小隊と共に行動させた方が良い。

そして残りの奴らは。

「不知火一等水兵、貴様は第一艦娘艦隊と第一小隊以外を引き連れてサントイサベル島へ急行しろ」

「……よろしいので？」

「早くしないと敵が体制を立て直す。ならばサンタイサベル島を早急に片付けて友軍と共に此方へ戻ってこい」

「……了解しました」

いつもと変わらず乏しい表情で敬礼した不知火は私が指示を出した通りに行動し、部隊を纏め始めた。

幸い砲撃は未だに止んでおり部隊への連絡伝達はスムーズに進んだ。

尤も砲撃が無いのは此方が身を隠している為に砲撃による輸送船被害拡大を恐れているが故でだが。

「(一)武運を」

そう言い残して立ち去る不知火達を見送りつつ彼女達の離脱を支援すべく砲撃を行う。

初めは不知火達に砲撃を加えようとしていた深海棲艦隊だったが、旗艦である泊地棲鬼が止めに入り追撃を取りやめた。

くそ、上手く不知火達を追えば後ろから奇襲出来たものを。

あの泊地棲鬼は勘と知性両方が優れているな。

中々厄介だ。

だが仕方ない。

我々は我々の仕事をするか。

全く割に合わない仕事だがね。

「さて諸君、どうやら敵はデザートまで持つてきたらしい。何ともサービス精神溢れるではないか、ならば我々が払うべき鉛玉チツプは多めにせねばな」

ジョーク交じりに話すと皆が笑い出す。

この絶望的な状況下で頼もしい限りだ。

現在この場に残留する部隊は私含め艦娘1艦隊と水歩兵一個小隊のみ。

遠距離からの支援砲撃や航空部隊の支援、そして他艦隊からの援護すらない。

正しく最悪ここに極まり。

しかしまだ可能性はある。

サンタイサベル島への奇襲が成功すれば友軍が順調に攻略できる可能性があるうえ援護に来る筈、それに敵は6隻だ。立ち回り次第では攻略は出来るだろう。

そう考えるなら末期の日本軍よりもマシである。

魚雷も部下から一本ずつ分けてもらい半分は補充できた。後は全力を尽くすのみ。

「さて、もう一働きしようではないか」

第七話 「マライタ島の死闘・下」

わが軍の右翼は押されている。中央は崩れかけている。撤退は不可能だ。
状況は最高、これより反撃する。

——フェルディナン・フォツシユ——

1940年 4月 午前9時 帝都東京 海軍参謀本部

一定リズムを刻む壁掛け時計の振り子音が室内を満たす会議室、現在この場には海軍司令長官や海軍大臣といった日本海軍における重役達が集まり今作戦における推移を見守っていた。

無論インターネットや各種通信機器が充実した現代とは違い、この時代は情報伝達が圧倒的に遅い。前線の情報を黒板や紙にある程度纏めて各前線司令部へと回され、更にそれらの情報を無線や電報をもつて本土へ知らせる。これでも大変な作業だが、実際はより細かい伝達手順や工程がありそれ又時間が掛かるので作戦総本部たる本土に届く頃には既に戦闘が終わっている事も多い。

よつて、彼らが今見つめている地図上における駒は前線からすれば古い情報となる。事実、彼らが見つめる盤上の情報には今のところガダルカナル攻略完了と特別進撃部隊が後方より奇襲を行うという内容が届いたばかりだ。

そんな机上を神妙な面持ちで見つめる人物の一人、山本五十六は作戦の最重要目標たるガダルカナル島攻略が無事に成功を収めて多少ながら気を落ち着かせていた。なんせ奇襲成功の報を聞くまでは、部下と共に将棋をして気を紛らわせていた程で焦りと緊張を隠すのに必死であった。

「一先ず負けは無くなったか……」

作戦図を見つめながら呟いた山本は周りの肯定的な反応を気にせず思案し出す。

ガダルカナル島を抑えた今、敵は空からの支援を受けられない状態だ。少なからず空母からはあるだろうが、それでは日本軍は止められないし何れ息切れするだろう。それに後方からの支援や指示が受けられない前線は混乱状態となる筈、ならば最早敵に勝ち目は無い。

しかし問題もある。

「離脱の為にガダルカナルへ雪崩れ込まれたら奇襲部隊が危険だな」

そう、彼が答えた様にもし敵が戦力を多く割きガダルカナルへと雪崩れ込んだ場合は奇襲部隊が地獄と化すだろう。なんせ奇襲部隊は落下傘降下部隊な性質状、装備面において大きく不安がある。もし敵艦隊が大量に押し寄せると防ぎきれぬ事は不可能なのだ。

勿論前線で戦う部隊を引きはがす愚行はしないと予想すると恐らく前線に投入する予定の予備戦力、より細かく考えるなら予備戦力のさらに半数程だろう。だがそれでも奇襲部隊にとっては脅威であり、無視できない。そしてガダルカナルが陥落した場合、

恐らく敵はそこから撤退を開始、戦争において後顧の憂いを残す事になる。

更に気がかりなのが進撃した部隊、明確に言うならば戦果を求め最前線へと飛び込んだ時雨の事であった。

彼女の熱意に負けた結果、前線司令部が進撃を許可してしまい喜々として戦場へ向かったと報告を受けたのだ。

初め聞いた時は会議室に居る者全員が慌て、直ぐに中止を伝えようとしたが時すでに遅く彼女はマライタ島へと進軍してしまふ。

最早誰にも止められない。

もし彼女が戦死しようものならば日本軍にとって大きな損失となる。しかし、前線から聞いた彼女の進言内容も否定できないのだ。

敵が混乱中の今なら大きな打撃を与えられる筈、だがもし失敗すれば……。

「祈るしかあるまい。上層部我々が出来ることは戦略指導と準備のみ、後は前線の奴らに任すしかないんだ」

皆の心配をよそに山本は論すように話す。

そんな彼の手には再び将棋が握られていた。

炎と煙が支配する此処は地獄。

歳や経験、能力は関係なく戦場では等しく死という概念が己を捕まえようとする。

決して振り向くな。

後悔や心の迷いがお前に付け込んで命を刈り取ってしまう。

戦の熱意に飲まれるな。

それは麻薬の如く、戦に酔いすぎれば快楽と引き換えに貴様を弱らせる。

正義を見るな。

正しき道を探そうとすれば矛盾と醜さしか見えん。

自分を見失うな。

最後に頼れるもの……それは自分だ。

近くに着弾した砲弾が大きな水柱を生み出し海水を高く押し上げる。

海水で作られた壁がある程度立ち上ると忽ち解け、周りに居る者達を濡らす。

普段なら海水に濡れる事での不快感と針を思わせる程の冷たさで顔をしかめる所だが、残念ながらそんな余裕は無い。

それは私の隣に居る萩風も同様で必死な表情をしながら主砲を懸命に撃ち返す。

自分と比べると命中精度は悪いがまあ状況が状況だし仕方ないであろう。

「奴がまた発砲したら前から2番目の残骸へ呼び込め！」

「りよ、了解です！」

私の指示を素直に聞き元気な返事をしてくれるが、声色が震えており無理に強がつているのが見て取れる。

そりやそうだ。誰だつてこの状況は怖いし逃げ出したい筈、だが残念な事に私達にそんな案は選べない。

不満や愚痴を脳内で垂らしながら残骸へと飛び込むと間一髪で砲弾を回避し、陰へと隠れる事に成功する。

無論これは一時しのぎで残骸が『生きているかどうか』識別される僅かな間だ。時間にして約10秒、だが我々にとって貴重な時間であり数少ない好機。

「次、200先の大破したワ級まで突っ走るぞ！」

「はい！」

返事を聞いてキツカリ10秒。

私は即座に飛び出すと同時に敵へと砲撃を行い牽制、続けてピツタリ着く形で萩風も残骸から飛び出す。

そして次の瞬間には残骸は敵砲撃が直撃して吹き飛んでしまい、大きな爆炎を花咲かせた。

チツイ！ 敵の砲撃精度と識別能力が上昇している。それに容赦が無くなっている点を考えてと恐らくワ級を使った盾も効かなくなるだろう。どうやら泊地棲鬼は大破したワ級救出や残骸との識別よりも我々の殲滅を優先するらしい。

電波妨害といい容赦なさい、優秀な敵程やり辛いものだ。

脳内で毒づきながら手にした主砲を相手に向け発砲、命中させるも防護膜により弾かれてしまう。

少しは減退しただろうが雀の涙程度、主砲の弾も連戦続きで心持たないし正にギリ貧。

流石に泊地棲鬼と複数艦隊相手では分が悪いな。

「くそ、海兵隊の奴らは——」

何とか確認しようとするもワ級や煙が邪魔で確認できない。

通信手段が封じられた現状では相互連絡は不可能で敵に対して不利。更に相手の数が上で尚且つ射程に負けている状況では固まっている方が良いのだ。

此処はあいつ等の腕を信じるしかないか……。

全く、無事で居てくれよ。

もし奴らが死ねばその分私に負担が押し掛かるのだ。今でも厳しいのに更に負担が増せば私が死んでしまう。

付け加えるならもし部下を無駄に消費せたら私のキャリアに傷がつく！

「2時方向の敵艦隊に魚雷を放て！ 密集しているから必ず当たる！」
「了解です！」

指示に従い萩風が魚雷を放つ。

対して私は砲撃で牽制、もしくは敵進行方向に着弾させ敵を魚雷位置まで誘導を行う。すると上手い具合に魚雷の進行方向へと舵を切ってくれて命中した。

ふむ、良い具合だな。

この調子で敵を足止め出来ればよいのだが……。

何とか足止めを出来ている状況を喜ぶも、次の瞬間には上空に白い信号弾が打ち上げられた。それは撤退を意味する信号弾で、恐らく海兵隊の奴らは一度下がりを部隊の立て直しを図るのだろうか。

「くそ、あつちは持たんか……萩風！ 此処より撤退を開始、同時に海兵隊と合流するぞ。恐らく撤退する時に弾薬を多く消費する筈だ。貴重な火力として我々が着く必要がある。泊地棲鬼共は私が牽制するからとつと下がれ」
「わ、分かりました！」

戸惑いつつも急いで下がる萩風を見ると溜息を吐きたくなる。

ああ、部下の手前自分から尻尾巻いて下がる訳にもいかんからなあ。

中間管理職が辛いのは此処でも一緒か。

唯違うのは命を張るかどうかという点だろう。

ああ、早く帰りたい。

時間にして少し前――

「ここはもう盾として使えない！ 後退だ。後退しろ！」

小隊長の命令を聞き、後退を開始する小隊員達。

味方への通信が不可能な為、信号弾を上へと飛ばして撤退する旨を部隊長である時雨に伝達する。

そして素早く撤退すべく行動を開始するのだが、彼らは唯では退かない。

一部の隊員達が、盾にしていたワ級とは別の同型種に対して近づくと何やら小さな箱の様なものを取り付ける。それを落ちないように固定して大破状態のワ級物資貯蔵部分へと繋げたら長いリールを箱と接続、リールを垂らしつつ退却を開始した。

退避する工作担当兵を援護しながら自らも引いていく殿隊員は所々にあるある残骸や大破ワ級を盾として利用し、敵の攻撃を防ぐ事で敵への出血を強いる。

仲間との通信が不可能であっても動きは精細を欠く事無く、効率よく撤退をする様は一種の芸術とも言えるだろう。

「準備完了です小隊長！」

工作担当兵からの報告を受けた小隊長は、新たな防衛線と定めた輸送船残骸から顔を出して双眼鏡を覗く。

視界には殿からの攻撃を防護膜で防ぎつつ近づく戦艦級とその後ろから攻撃を行う駆逐級と軽巡級が見えた。

動きには無駄が無く、同時に防御力が高い戦艦級を盾役として運用する方法は宛ら戦車と追従歩兵を思わせる。恐らくこちら側に艦娘が居ないと知り駆逐艦や潜水艦から

の魚雷攻撃は無いと判断、戦闘方法を変更した様だ。

少し後方では前線指揮官と思われる戦艦夕級が指示を出しており、泊地棲鬼だけで無く彼女の部下達も優秀である事が見受けられる。

「焦るな、敵を十分に引き付けるんだ」

双眼鏡から目を離さずに部下へと指示を出す彼だが、その言葉は自分にも言い聞かせている様でもあった。

その証拠に焦りと緊張から流れ出た汗が頬を伝い、海面へと落ちて行く。

だがそんな事でミスを犯す彼らでは無い。

海兵隊の者達は皆、それを嫌と言う程時雨の下で学んだのだから。

「駆逐艦や軽巡洋艦ハ前ニ出過ギルナ！ 前衛戦艦部隊ハ互イニ支援シツツ防御ニ専念シロ！」

夕級が大きな声で命令しながら自らも後方で出来る限りの砲撃を行う。

余り前線に出過ぎない所を見ると自分が指揮官としての役割を理解しているらしく、攻め方も手堅く隙を作らない指揮を執っていた。

「焦ルナ！ 戦力ハ我々ガ圧倒シテイル、現状ヲ維持シツツ攻メレバ勝テル！」

本来時間は彼女らにとって敵となるが、それを表情に出す夕級では無い。下手に焦りや不安を見せてしまうと部下達に負の感情が伝染してしまうからだ。それを理解して彼女は勇ましくそして不安を見せずに指示を出す。

（クソ、味方輸送船ヲ盾ニサレテハ上手ク攻撃デキン。ダカラト無差別ニ攻撃シテモ友軍ノ士気低下ヲ招ク恐れガ……）

焦りと怒りが心の中で渦巻く彼女だが、決して表情に出すまいと必死に堪える。その姿は正に上に立つものとして理想な姿だ。

だが焦るまいと堪える気持ちと怒り、不安。それらを決して部下や敵に悟られまいとする思いは彼女に想像以上の負担となった。

結果、彼女は余裕を失いとある可能性を見落としてしまう。

それは……。

「点火！」

双眼鏡を覗いていた小隊長が、盾役 of 戦艦と後ろから追従する小型クラスが目印のワ

級を通過した瞬間に部下へと命令する。

リールが繋がった箱型のスイッチを強く押し込む。
すると次の瞬間。

爆炎と衝撃、熱風が深海棲艦前衛部隊を襲う。

爆発したワ級複数に内包されていた弾薬や燃料が爆発し、通過していた部隊へと純粹な破壊力を発揮する。その威力は想像を絶し、尚且つ破片や熱風が同時に襲い掛かり深海棲艦を次々と殺傷させた。

戦艦を盾にしていた駆逐級や軽巡級は勿論、背後から攻撃を受ける形となった戦艦級達も無事では済まない。

実際、小隊長が視線を向ける先には防護膜を消されて大小様々な損害を受けた深海棲艦がおり、中には轟沈した者も居る。

正に地獄だ。

しかし、地獄は終わらない。

何故ならば。

「今だ、敵にありつたけの火力を叩き付けろ！」

小隊長の掛け声に隊員達が呼応するが如く小銃や機関銃、八九式重擲弾筒を深海棲艦へ向けて発砲して更なる損害を出す。

八九式重擲弾筒——詰まる話小型で持ち運び便利な軽迫撃砲であり、現在においては陸海両軍における貴重な火力である。

この軽迫撃砲は、地面又は固い床等に置いて使用するもので常に動き尚且つ艦式弾を多用しだした現在においては使用頻度こそ以前より減ったが未だに活用されている武器だ。

射程も威力も強化型艦式弾や艦式弾に劣る本兵器であるが、グレネード以上の破壊力を持つ為使い勝手が良い。また、これは真つ直ぐ飛ばすのでは無く放物線を描き落ちる為に物陰からの攻撃が可能。塹壕や隠れた敵を攻撃するのに最適と言えた。

その様な痒い所に手が届く便利兵器は海兵隊にも幾つか配備されており1分隊に2つ、小隊全体で考えると合計8つある。

本来なら3人1組で使用する武器だが、時雨の部隊では非常時を考え2人1組、場合

によつては一人での使用も考慮された訓練を行う。

それは兎も角、そんな武器を構えた軽迫装備者は残骸を利用して固定すると弾道を即座に計算して攻撃を開始する。

防護膜の消えた彼女たちにとつて小銃や軽迫撃は勿論、機関銃ですら防ぐ手立ては余りない。艦式弾装填小銃や軽迫撃砲といった火力が装甲を大きく損傷させた駆逐級と軽巡級に叩き込まれて次々沈み、防護膜が消えた戦艦級や重巡級においては機関銃から放たれる通常弾ですら弾き返せず殺傷されていく。

「ナンテ事ダ!？」

弾薬や燃料を満載したワ級を前衛部隊近くで爆破された事により多くの艦が損傷してしまった。中には沈んだ者もあり、別動隊指揮官の夕級は混乱してしまい思わず呆然としてしまう。

これには隣で夕級を補佐していたり級も同様で、皆何が起きたか分からないといった

顔だ。

そしてそれが隙となり、更なる悲劇を生み出す。

損傷を受けた艦に対して撤退していた敵が攻撃し出したのだ。

結果、唯でさえダメージを受けていた味方が次々沈んでいく。

これに夕級は慌て直ぐに敵へと攻撃するも彼女が相手する者達はそう簡単にやられる馬鹿では無い。彼らは反撃されると深追いはせず再びワ級を盾に隠れてしまったのだ。そして顔を出して攻撃できないと判断した海兵隊達は、打撃力は落ちるが軽迫撃砲による曲射攻撃だけを継続する事で自らの被害を抑えつつ深海棲艦側への出血を強いる方法を選択、夕級を苛立たせた。

「各隊ハ一時後方へ退避！ 一度態勢ヲ立て直スゾ！」

夕級が叫ぶように命令して後退を指示、深海棲艦の別動隊は下がろうとするが。

「各員全力攻撃、敵を逃がすな！」

相手の隙について再び第一小隊が攻撃、敵を逃がさんと顔を出して猛攻する。

そんな猛烈な攻撃に夕級達は堪らず後退を諦め反撃と防御重視へ陣形を固めるも小隊員達は再び隠れてしまい失敗に終わってしまう。

前衛部隊が壊滅した別動隊では、後退を上手く行う為に壁や殿となる戦艦が沈んだ事で実質後退が不可能となったのだ。

無論、無理に後退する事も可能だがそれを行うと被害が大きくなる。数は確かに上だが最早彼女たちに早期的な決着は不可能であった。

「これで暫く時間を稼げるか」

「友軍が間に合えば良いのですが……」

小隊長と副隊長が互いに意見を交換し合うが実情はギリギリ留まっている形で、これ以上の余裕もそして戦果も余り期待できない。

何故ならば戦死者こそ出ていないが負傷者は多く、尚且つ弾薬も心持たない状況。これ以上の反撃や攻勢は厳しく、出来てあと2回と考えていた。事実機関銃の弾薬はそれ

ぞれ残り弾倉2個分しかなく、軽迫撃砲に至っては各砲残り10発未満。これらが切れれば艦式弾しか無く、後は少しづつ後退するしかない。

「もし敵がワ級ごとの排除を選択した場合、我々に勝ち目は……」

時雨や海兵隊らの心配をよそに相對する敵たる深海棲艦は現状に焦りと怒りを覚えていた。

「クソ！ 卑怯ナ！」

思う通りに行かない戦いと味方輸送船を盾にする戦法に彼女は口汚く罵る。

それは彼女だけではない。

彼女旗下の深海棲艦や急遽駆け付けた艦隊は皆同じ表情を作り出し元凶たる時雨を睨みつけていた。その怒りは正に憤怒の如くで、中には血が出るまで歯を噛みしめ何もかもかなぐり捨てて特攻しそうな雰囲気だ。

怨まれている本人としては堪ったものではないが。

現在マライタ島における防衛部隊は泊地棲鬼と旗下の司令艦隊。同じく黄色型戦艦夕級を旗艦とした近衛艦隊や各種小規模艦隊などそれなりの数だが、深海棲艦からすれば多いとも言えない。

残りは全てサンタイサベル島防衛へと駆り出し中か既に時雨の艦隊に沈められていた。

最早彼女らに残された選択は死か目の前に居る人類共へ一矢報いるかのどちらかであり、死兵でしかない。否、生き残る手立てはある。それはガダルカナルを占領した部隊を殲滅してそのまま早期離脱という無謀に等しい内容だ。

物資が無事ならば前線を維持しつつ撤退へと移れた。場合によってはソロモン諸島を放棄した後、時間は掛かるが奪還する事も不可能ではない。しかし、それは時雨達に

よつて無残にも引き裂かれてしまう。

「絶対二許サン、アノ艦娘ハ必ず殺シテヤル！」

憎悪を膨れさせ再び発砲するが命中弾は見られない様で、部下達も同じ結果に歯噛みする。矢張り味方輸送船を気にしての攻撃だと効果が薄い。

だが悠長に攻撃しては前線が持たないのは明白、ならば執られる策は唯一つ。

「仕方アルマイ、全艦全力攻撃ヲ開始セヨ。輸送級ニ構ウナ」

「シ、シカシソレデハ盾ニサレテイル味方ガ！」

泊地棲鬼の決断に部下のル級が具申する。

確かに現在の攻撃は大破した味方ワ級に当てないよう攻撃しており、敵が隠れる残骸も味方の可能性を捨て去ってから攻撃していた。また味方を盾にされた際は攻撃せずになるべく近づいてから対応しており、彼女らにとって圧倒的不利な状況だ。

少しでも状況を打開する為に損傷が多く、もう助からないと判断された味方は本意ながら敵ごと攻撃する方針へ既に切り替えたがそれでは焼け石に水。根本的な解決に

はならない。

だからこそ旗艦である泊地棲鬼が言った事は確かに敵を追い詰められるが、ワ級達が助かるか助からないかを判断をする以前に初めから見捨てるという意味であり味方もろとも敵を殲滅する事である。当然攻撃側からすれば避けたい方法であり、ル級の具申に対して泊地棲鬼も理解を示す。それどころか彼女自身執りたくない策である事をその目が物語っていた。

だが。

「私トテ無念ダ、ダガ我々ガ手ヲ拱イテハ友軍ノ撤退ガ出来ナイ」

「……」

「今我々ガヤラネバ、ヨリ多クノ味方ガ沈ムノダ！ ……全テノ責任ハ私ガ取ル」

「——ッ、……了解シマシタ」

上官の説得にル級が折れ、悔しい思いで了承した。

部下の表情を見て味方を殺す片棒を担がせる事を心から恥じた泊地棲鬼は齒を食いしばり拳から血が出るまで握りしめる。

スマン、スマン。私ガ不甲斐ナイバカリニ……私ガ無能ナバカリニツ！

彼女の無念な気持ちと力不足を呪う思いが、心渦巻きそれが力と成す。

そうだ自分は彼女らの指揮官だ。

彼女らを導く存在だ。

罪は自分が背負うだから。

心より決意した気持ちで彼女を突き動かす。

「アノ悪魔ヲ、私ハ殺ス！」

心の奥底より決意を表し彼女は行動する。

その結果、時雨が感じた攻撃の容赦なさへと繋がってしまう。つまり容赦ない攻撃の大半は時雨が原因と言っても過言ではない。

正にどうしてこうなったという事だ。

そんな注目の的たる時雨はというと敵の攻撃が容赦なくなつたと感じて早急に部隊と合流すべく速度を上げる。

元々海兵隊達の信号弾を見て合流すべく行動していただけに敵の無差別攻撃を受ける前に残骸から離脱出来た為二人とも無傷で済んだ。しかし、これでは思うようなゲリラ戦が展開できず時雨の表情を一層固くした。

「くそ、損得勘定の分かる奴だな。もし人類側ならば私の副官を任したい所だ」

副官の萩風に聞こえない様吹き、急いで逃げ出す彼女だが言葉の通り敵である泊地棲鬼に対して心から高い評価を下す。

泊地棲鬼から見て味方を盾にしての戦闘で、経済的なそして早期的な解決を相手は打ってきたのだ。

下手に拱いて限られた時間と戦力を擦り減らすよりも助かる見込みが少ない味方を切り捨てる。言葉では簡単だが行うとなれば難しい。それを目の前の敵は部下に反発されず尚且つ士気のある程度維持して行っている。

時雨からすれば損得勘定の良さと部隊運用経験、指揮維持能力は正に絶賛に値する能力であった。

尤も評価された泊地棲鬼は、そんな評価をされたとして嬉しい処か時雨に殺意を抱いて殺そうとしている真最中だが。

それは兎も角、海兵隊と合流した時雨が更に奥地へと退いて行く様子を見た泊地棲鬼達は怨敵を逃がさんと追撃を開始。尚且つ攻撃を一層激しくさせる。無論黙ってやられる時雨達では無く、こちらも魚雷や機雷、砲撃をばら撒きながら敵を牽制、その甲斐あつてか敵軽巡1隻と駆逐級1隻を撃沈させた。

この時殿を務めたのは時雨と萩風両名であつた為敵攻撃が海兵隊に向かず時雨へと殺到、ほぼ無傷で後退に成功する。しかし後退成功と敵撃沈と引き換えに只でさえ少ない弾薬を大量消費してしまい最早戦闘継続は不可能だ。

煙幕も焚いて後退した結果、奇襲を恐れた敵が追撃を緩めてある程度余裕が出来た部隊は大きめの残骸へと隠れつつ軽い装備点検や弾薬確認を行う。

手早く確認や軽い点検をする隊員達であるが表情は皆一様に暗い。

それは時雨も同様で、主砲の残弾が残り僅かと知るなり険しい表情を作り出す。

くそ、主砲の残弾が僅かだ。これなら残弾を萩風へ渡して主砲を破棄、自分は小銃で戦った方がマシだな。

そう思いついたが吉日とばかりに残弾を取り出した主砲をその場で破棄、部下から予備の九九式短小銃を受け取る。使用は訓練等で慣れている為問題ないが、矢張り慣れ親しんだ武器では無いかから違和感を抱いてしまう。

舌打ちをしながらもボルトを引き小銃専用艦式弾を装填、ボルトハンドルを戻してその場で構えるという一連動作を試しに行うがまずまずといった調子だ。

だが背丈を考えると矢張り合わない感じもするな。

今度技術部へ新式小銃の提案書でも提出してみるか？

「萩風一等水兵、貴官は大丈夫か？」

有能だが危なっかしい部下へと声を掛けると私が渡した主砲弾を詰めている最中で、何処かあたふたした様子であつた。

上司たる者部下への心遣いはせねばならん。

幸い、私の部下達は皆優秀だが萩風だけはどうも不安だ。確かに優秀なのだが何処か抜けている部分があり扱いに困る。無論無能という意味では無く、こいつは磨けば磨く程才能を開花させる天才だ。

最初は敵や味方の死体を見ただけで吐いていたのに……矢張り鍛えてみるものだな。

「はい二等兵曹！ 先程頂いた弾薬のお蔭で問題ないです！」

敬礼しつつ元気に話す彼女はこの場では空気を和ませる貴重な存在だ。

事実、萩風の慌てぶりを見た海兵隊らは皆笑いを堪えている。

「いや、一等水兵は正に我が部隊の癒しですな」

「程よく肩の力を抜いてくれる。本当に助かるよ、萩風君」

「はい！ ありがとうございます！」

先輩軍人2人にからかわれるも気づかず馬鹿正直に礼を述べる萩風。

おい、そこは怒っても良い反応だぞ。

本当に萩風こいつを相手にすると疲れる。

「いやいや、本当に助かっていますよ。それに可愛いですしね」

尚も話し続ける1人の先輩軍人——第1分隊軍曹——から可愛いと言われた為か、萩風の顔はみるみる赤くなっていく。

戦場で呑気なものだ。

だが、彼のお蔭で部隊における緊張が解れているのも事実。矢張り先輩軍人は頼りになるな。

「そんな、可愛いなんて……ゴホン！ 冗談はよしてください。軍曹は気が抜けすぎです！」

「程よい程度が良いんだよ。ね、部隊長殿？」

「まあ、緊張しすぎも良くないからな。だが気を抜きすぎるなよ」

「その辺のさじ加減は任せて下さい。なんとってラバウル戦線最古参ですよ！」

私の言葉に笑いながら受答えする彼は何とも頼りがいのある軍人だ。

矢張り彼の様な人物が居ると我が部隊も円滑に任務を遂行できる。今度彼に何か上物の酒でも奢ってやるか。

どうせ今の私は飲めないし。

「隊長、敵が動き出しました」

見張りの部下から報告を受け、残骸から少し顔を出すと敵と思われる影が煙幕を通してゆっくり動いているのが分かった。

ふん、痺れを切らしたか。

「軽迫用意！ 敵を炙り出せ！」

私の指示に従い分隊における火力支援員が折りたたまれた軽迫撃砲を取り出すと残骸に固定、角度を調節し出す。

「用意……撃え！」

観測員の合図と共に筒の中へと軽迫専用弾を落し入れ、砲弾入れの者が直ぐに耳を塞ぐ。

ポオン、キーン！

と空気が弾けた音と鈍い金属音が混じった妙な音が聞こえて弾が飛び出すと曲線を描きながら飛んで行き煙の向こうへと着弾、爆発音が戦場に響く。

音源へと目を向ければ先程の攻撃が運良く命中したらしく爆炎と悲鳴が聞こえた。初弾に命中するとは……運の無い奴だ。

不運な敵を哀れに思いつつも数秒後、先程起こった爆発や水柱が立て続けに発生して深海棲艦を苦しめる。

残骸越しに撃つ為、攻撃位置が判明しづらく反撃を受ける可能性が少ない。更に付け加えるなら敵は未だに煙幕内な為、此方を攻撃出来ないで煙幕を抜けるまでは一方的な攻撃が可能。

素晴らしきかな。

これで殲滅できれば良いのだが生憎敵は無能では無い。

それに軽迫も弾が残り僅か、よってこれからは近接戦闘だ。

「そろそろ敵が出てくるぞ、30秒後に軽迫班は砲撃を止めて小銃での援護に切り替えろ。軽迫護衛も同様、それ以外は突撃用意！」

「了解しました！ 聞いたかお前等！ じゃなきやケツ蹴り飛ばすぞ！」

「大丈夫です！」

盾が意味ない以上、乱戦に持ち込んでの戦闘しかあるまい。

その事を理解してか私の命令後、小隊長を皮切りに不満も無く返事をする隊員達は全くもって良く使える優秀な駒だ。

返事や行動からフルメタルなジャケット風の香りがする事が少し不安だが……今は置いておこう。

まあ兎も角、やる気十分なら問題無い。後は私の力量次第。

頑張らなくては。

そうこう考えている内に迫撃砲による爆風で煙幕が少なくなった場所から黒い塊が飛び出す。

間違いない、駆逐口級だ。

援護も無く単独で飛び出して来るとは馬鹿な奴め、見た限り斥候では無く恐らく砲撃に我慢でき先行して出て来たな。

敵は浮足立っている様だ。

ならばこの好機を逃すべきではない！

「突撃―」

私が声を張り上げて先陣を切ると雄叫びを上げながら後ろから皆が付いて来る。

恐怖を紛らわす為か、大声で突っ込む姿は傍から見ると愚かだろうか？

安心しろ、私もしているし愚かだとも思う。

だがやらねば敵を滅ぼせないし私も死ぬ。

本当に世の中は糞だな。

そしてあつと言う間に先程飛び出した口級が味方の攻撃で沈み、続いて飛び出してきたり級へと照準を合わす。

本来ならば防護膜で防げるであろうが、相手を見る限り既に消失済み。

「ならば死ね」

眩きつつ放つ弾丸が敵へと打ち込まれ爆発、相手の上半身を抉り殺した。

次！

移動しつつ瞬時にボルトを引き排莖、そしてボルトを戻す。

体に染みついた動きで装填を完了すると再び狙いを付けて発砲し、今度はイ級の撃沈に成功する。

例え黄や赤とはいえ、損傷を受け尚且つこの距離ならば一撃死は必至。

此処で刈り取るだけ刈り取ってやろう。

次！

再び薬莖の排出と装填を行い今度はホ級を狙う。

余り損傷が見られない事から恐らく上手く切り抜けたのだろが……。

「相手が悪かったな」

そういつて引き金を引く。

発射された弾丸はホ級の砲塔、特に僅かながら傷ついた部分へと叩き込まれ大爆発を引き起こした。

馬鹿が、損傷を抑えたとして重要区画を守らなければ意味が無いだろうが。

「次ツ——!?!」

次の標的へと狙いを定めようとした時、大きな水音が響くと同時に私へと影が差す。横目で影の発生源を見ると砲塔が潰されたために私へと格闘戦を挑むル級が見えた。成程、手に持つ鉄塊で殴れば確かに大きなダメージを期待できるだろうな。それに飛び掛かる事で落下によるダメージも上乗せできるといふ寸法か、悪くない。

だが。

「甘〜!」

私は避けるのでは無く、逆に相手へと突っ込み体を捻る。

砲撃能力を消失した鉄塊は私の体をギリギリに通り過ぎ落下していくと海面へとぶ

つまり大きな水しぶきを上げた。その結果ル級は体勢が前のめりに成る為、大きな隙を私に曝してしまう。

正に好機！

私はル級と擦れ違いざまに腕を動かし薙ぎ払うと流れる動作で脇を抜けていく。

要は横をすり抜けて切り払ったのだ。

無事に切り抜けた私は勢いをそのままに少し進んだ後、片足を軸にUターンしてル級がどんな状態かはつきりと確認する。

結果は予想通り。

ル級は血を大量に流して倒れていたのだ、首を無くして。

「次、と言いたい所だが……」

小銃先の銃剣に付着した血液を海水に浸けて洗い流した後、新手を相手にする為に周辺を見渡す。

次の敵を見つけようにも敵の第一波はある程度殲滅したらしく、近場での戦闘は大体収束していた。

成程、一度部隊を引いて区画ごと吹き飛ばす気だな。

そうなると急いでこちらも退避しなくては。

丁度態勢を立て直したい。

思考を纏めつつ一度部隊の被害状況を確認すると私は思わず舌打ちしてしまう。

奇襲により敵部隊を半壊に追い込んだが此方も何人か戦死した様だ。流石に無傷では無理か、撃墜対被撃墜比率的に考えると大勝利だが人材を育てるのに一体どれだけの時間と金、資源を消費すると思っている。折角近代戦闘や工作技術を仕込んだというに。

まあ、反省は後で良い。今は急いで離脱して態勢を立て直す事が先決だ。

何時までも動かなければ敵の無差別砲撃が始まってしまい残骸や敵大破艦もろとも吹き飛ばされてしまう。

その様な死に方御免蒙る。

決意改め早く移動しようとした時、遠くから赤い信号弾が昇るのが見えた。それは昼間だというのに自己主張を忘れずゆっくりと海面へと落ちて行き、見る人によつては儚さを感じさせるだろう。しかし、我々は待ちに待った連絡で希望だ。事実私自身、あれを見た瞬間歓喜に打ち震えた。

急いで部下から双眼鏡を受け取り信号弾の昇った場所へと覗き込むと大きな影が見える。

なんと、味方は私の想定以上の規模を派遣したらしい。

良きかな。良きかな。

早急な連絡伝達と奇襲を達成させた不知火には後で間宮を奢ってやろう。

「諸君、任務御苦労。後は味方に任せようではないか」

双眼鏡から目を離しながら話す私は思わず笑みを浮かべていた。

対して敵は今頃顔色を真っ青にしてお通夜状態だろうな。

正に王手。

この戦いは終わりを迎えた。

我々の勝利として。

11:30 特別支援艦隊、支援攻撃戦艦艦橋 第一遊撃部隊

「どうやら間に合ったようだな」

見張り員より報告を受けた遊撃艦隊指揮官、西村祥治は自分達の救援が間に合った事に安堵して思わず息を吐く。

特別進撃部隊の先遣隊がサンタイサベル島を後方より奇襲した事により、トラック方面での戦闘が想定よりも早く終結した。その為、サンタイサベル島外縁で戦い、マライタ島に最も近い戦線担当であった第一遊撃部隊、通称『西村艦隊』が急ぎ救援へ駆けつけたのだ。

西村艦隊には艦娘や水歩兵以外にも砲撃用の通常型戦艦や巡洋艦、砲艦が付属してお

り打撃力や規模は十分。また、艦隊司令である西村祥治も後方攪乱の為に戦っている味方を救えと高い戦意を持っている。その為、燃費を気にせず機関一杯で駆けつけた彼らは泊地棲鬼が想定したよりも早く到着できた。

『提督、味方部隊の離脱を確認しました。また、敵は混乱しており上手く纏まっておりません。このまま全力攻撃するのが良いかと』

『私も姉さまの意見に賛成です』

偵察機を飛ばして上空より敵規模や陣形を確認していた扶桑、山城両艦娘からの報告を受け、西村は力強く頷く。

瑞雲からの偵察は西村艦隊に大きな恩恵をもたらし、敵の規模や陣形を細かく知ることが出来た。これは普段なら航空戦が拮抗する為に不可能な手段であるが、今回は敵基地を時雨達降下部隊が短期に殲滅したお陰で可能なのである。

「艦娘部隊及び海兵隊の配置完了！」

「本艦並びに旗下の艦船、全艦全て射撃用意完了！」

「味方部隊が戦線離脱を開始、何時でも行けます！」

部下からの報告を受け、西村は再び力強く頷くと握りこぶしを作りながら大きな声で号令を下す。

「全艦、全力攻撃開始！」

降り注ぐ砲弾が防護膜を減退させ、舞い上がる炎や破片が防護膜の無い者達へ襲い掛かる。避け損なった水雷戦隊に通常戦艦と思われる砲弾が複数着弾した事で丸ごと消滅、別な場所では防護膜を失った重巡や戦艦に対しては破片や機銃のみで体を引き裂かれその命を散らしていく。

悲鳴と怒号、破壊音が戦場を支配する。

先程まで狩る立場であつた深海棲艦達は、狩られる立場へと転落した。

射程が長く、威力の高い砲撃が広範囲に着弾し更には艦娘や海兵隊からも攻撃をしてくる。その為に深海棲艦達は反撃する余裕が無く、攻撃を出来る限り防ぐか避けつつ逃げるしか無いのだ。

「チイ、皆ハ無事カ!？」

「別働艦隊ハ被害甚大、コレ以上持ちマセン！」

「電波妨害艦轟沈！」

次々と舞い込んでくる凶報に泊地棲鬼は唇を咬み、悔しげな表情へと顔を歪ませる。

あと一步、あと一步で怨敵を始末できたのに最早それは叶わぬ状況。

後に残されたのはこれから撤退する味方前線部隊を見捨てて逃げるか、自滅覚悟の突撃であるか……。

「泊地棲鬼様、此処ハ引クベキデス」

「味方ヲ見捨てテ逃ゲルト言ウノカ!？」

「生キテイレバ孰レ汚名ヲ晴ラセマス。ソレニ此ノ俣戦ツテモ無駄死ニデス！」

「……」

「閣下！」

合流した部隊長の夕級に説得された泊地棲鬼は齒を食いしぼり考えた。

彼女の話す事は正しい。

もしこのまま戦つたとしても味方は救えないのだ。

ならば味方を見捨てたという汚名を被りながらも無事な者達と共に此処は引いて再起を待つのが最良である。

僅かばかりの時間目を閉じて考えていた彼女は、見開くと部下達へ命令を下す。

「総員撤退……我々ハ、ソロモン諸島ヲ放棄スルツ！」

悔しそうに宣言した命令に自然と涙があふれ出そうになるが部下達の手前無様な姿は見せられない。

「殿ハ私ラガ行ウ！ 総員直チニ撤退セヨ！」

声高らかに宣言する泊地棲鬼は、自分の近くに居る部下達の顔を横目に見た。

恐らく彼女らも泣きたい気持ち堪えているのだろう。

瞳に涙を滲ませるも表情を崩さぬように我慢しているのが泊地棲鬼には直ぐ分かる。中には悔しさを我慢して血が出る程唇を強く噛みしめる者も居た。そんな者達を見て彼女は自分の不甲斐なさを恥じ、敵を憎む。

そして彼女達は決意するのだ。

例え命尽きようとも。

この恨みや復讐、何時か果たす。

1940年 4月 午後3時

敵泊地棲鬼並びに付属艦隊撤退を持つて本作戦が成功した事と判断。

後は残敵掃討を残し作戦は終了した。

被害を受けつつも想定よりも少なく済んだのは司令部による指示や後方補給部隊による準備、各戦線における指揮官並びに兵士達による日頃からの努力と優秀さ故だ。

しかし、今作戦において立案と前線両方で尤も貢献した人物は限られ『とある艦娘』だけであろう。

この結果が彼女に良い影響を齎すかどうかは正に神のみぞ知る。